

出雲市駅付近連続立体交差事業地内

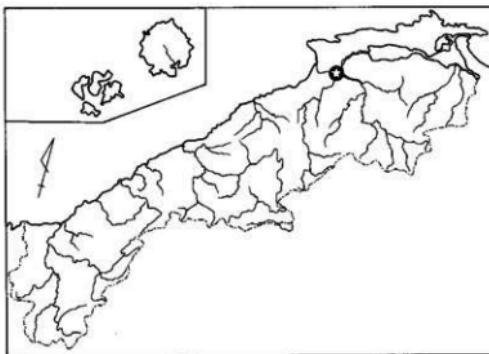
天神遺跡第9次発掘調査報告書

1999年3月

島根県出雲土木建築事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

出雲市駅付近連続立体交差事業地内

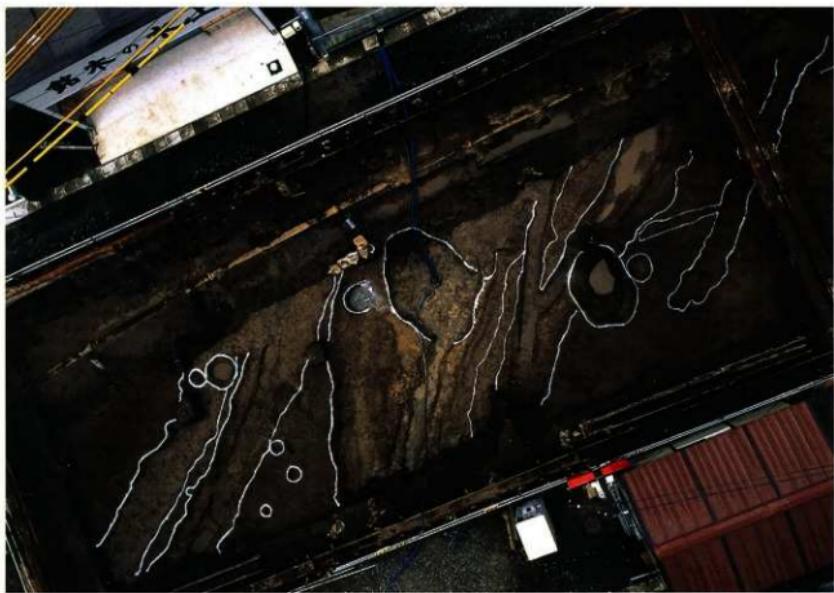
天神遺跡第9次発掘調査報告書



天神遺跡の位置

1999年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会



天神遺跡 遺構検出状況空中写真



SD03 検出状況



SK04 検出状況



SD03・SD04 検出状況



SK03・SK06・SD09・SD12 検出状況

序

出雲市教育委員会では、平成9年度に出雲土木建築事務所から委託を受け、出雲市駅付近連続立体交差事業地内に所在する天神遺跡の発掘調査を実施しました。

同事業地内では、平成6年度にも隣接地において発掘調査を実施しており、弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての環濠と考えられる大溝や、弥生時代の木製農耕具など数多くの遺構、遺物を検出しました。

今回の発掘調査でも、弥生時代中期を中心とする溝状遺構や、平安時代後半の井戸などを検出し、この地域におけるひとびとの暮らしを知る貴重な資料を得ることができました。中でも最も大規模な溝状遺構は、平成6年度に調査した環濠と考えられる溝と同一のものである可能性が高く、環濠の規模やその当時の人々の生活域を考えるうえでも貴重な資料となりました。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

なお、今回の調査にあたりご協力を賜りました地元の皆様をはじめ、関係各位に、衷心より御礼申し上げます。

平成11年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例　　言

1. 本書は、出雲土木建築事務所の委託を受け、出雲市教育委員会が平成9年度に実施した天神遺跡第9次発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成9年(1997)4月24日～同年7月10日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市塩治有原町4丁目1番地ほか

4. 調査は、次の組織で行った。

平成9年度

〔調査指導者〕西尾 克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、岩橋 孝典（同 主事）

〔事務局〕後藤 政司（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上 稔（同 係長）

〔調査員〕岸 道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）、糸賀 伸文（同 臨時職員）

平成10年度

〔調査指導者〕西尾 克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、守岡 正司（同 主事）

〔事務局〕後藤 政司（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上 稔（同 課長補佐）

〔調査員〕岸 道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）

5. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S D——溝状遺構、S K——土坑状遺構、S X——落込み状遺構、P——ピット

6. 本書で使用した方位は真北を示す。

7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸、糸賀のほか、高橋 智也（文化振興課主事）、片倉 愛美（同 主事）、今岡ひとみ、鬼村奈津子、春木 崇志、矢田 知美（同 臨時職員）が行った。

9. 本書の執筆、編集は、上記調査員の協力を得て岸が行った。

10. 石器の石材鑑定については、山本 順三（師田部美術館学芸員）が行った。

11. 調査にあたっては、出雲土木建築事務所、JR出雲工事事務所から多大な協力を得た。
12. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々に御指導、御協力を賜った。
田中 義昭（島根大学法文学部教授）、池田 満雄（出雲市文化財審議会委員）、赤澤 秀則
(鹿島町教育委員会係長)、角田 徳幸（島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、
岩橋 孝典（同 主事）、間野 大丞（同 主事）
13. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。
高根 正春 稲村 玉枝 高根 常代 藤原 一男 佐野 静子 吉田 荣
藤原 博 陶山 潤 吾郷 槟 周藤 俊也 鎌田 惺 板倉セツ子
角森雄志郎 坂根 誠 藤原 勉 米山 清司 奥田 広信
14. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。
遠藤 基子 飯國 陽子 川谷 真弓 荒木恵理子 吹野 初子 石川 桂子
岡野 和栄 岡 こずえ

目 次

カラー図版

序

例言

本文目次

挿図目次

I.	調査に至る経緯	1
II.	位置と環境	3
III.	8次に亘る発掘調査と遺跡の範囲	5
IV.	調査の概要	
1.	発掘調査の概要	9
2.	遺構と遺物	15
V.	総 括	85
	出土遺物観察表	89
	図 版	図版 1 ~ 図版30

挿図目次

I. 調査に至る経緯

第1図 試掘トレンチ位置図 1

第2図 試掘トレンチ堆積土層図 1

第3図 発掘調査区位置図 2

II. 位置と環境

第4図 天神遺跡周辺の遺跡 3

III. 8次に亘る発掘調査と遺跡の範囲

第5図 天神遺跡発掘調査例位置図 7

IV. 調査の概要

第6図 遺構配置図（1～4Gr） 11～12

第7図 遺構配置図（5～8Gr） 13～14

第8図 SD 0 1 実測図 15

第9図 SK 0 1 実測図 16

第10図 SK 0 2 実測図 16

第11図 P 4 実測図 17

第12図 SK 0 3 実測図 17

第13図 SK 0 3 出土遺物実測図 18

第14図 SK 0 4 実測図 19

第15図 SK 0 4 遺物出土状況実測図 20

第16図 SK 0 4 出土遺物実測図(1) 21

第17図 SK 0 4 出土遺物実測図(2) 22

第18図 SK 0 5 実測図 22

第19図 SK 0 5 出土遺物実測図 23

第20図 SK 0 6 実測図 24

第21図 SK 0 6 遺物出土状況実測図 25

第22図 SK 0 6 出土遺物実測図(1) 26

第23図 SK 0 6 出土遺物実測図(2) 28

第24図 SK 0 6 出土遺物実測図(3) 29

第25図 SX 0 5 出土遺物実測図 31

第26図 SX 0 5 実測図 31

第27図 SD 0 3 実測図 33

第28図 SD 0 3 遺物出土状況実測図

（南側） 34

第29図 SD 0 3 遺物出土状況実測図

（北側） 35

第30図 土器群1 (SD 0 3) 実測図 36

第31図 土器群1 (SD 0 3) 出土遺物実測図 36

第32図 SD 0 3 出土遺物実測図(1) 38

第33図 SD 0 3 出土遺物実測図(2) 39

第34図 SD 0 3 出土遺物実測図(3) 41

第35図 SD 0 4 実測図 43

第36図 SD 0 4 遺物出土状況実測図

（南側） 44

第37図 SD 0 4 遺物出土状況実測図

（北側） 45

第38図 SD 0 4 出土遺物実測図(1) 47

第39図 SD 0 4 出土遺物実測図(2) 49

第40図 SD 0 4 出土遺物実測図(3) 50

第41図 SD 0 4 出土遺物実測図(4) 51

第42図 SD 0 8 実測図 52

第43図 SD 0 8 遺物出土状況実測図

（南側） 53

第44図 SD 0 8 遺物出土状況実測図

（北側） 54

第45図 SD 0 8 出土遺物実測図 55

第46図 SD 0 9 実測図 57

第47図 SD 0 9 遺物出土状況実測図 58

第48図 SD 0 9 出土遺物実測図(1) 60

第49図 SD 0 9 出土遺物実測図(2) 62

第50図 SD 0 9 出土遺物実測図(3) 64

第51図 SD 0 9 出土遺物実測図(4) 66

第52図 SD 0 9 出土遺物実測図(5) 68

第53図 SD 0 9 出土遺物実測図(6) 69

第54図 SD 1 2 実測図 71

第 55 図 S D 1 2 出土遺物実測図	72
第 56 図 遺構外出土遺物実測図(1)	75
第 57 図 遺構外出土遺物実測図(2)	76
第 58 図 遺構外出土遺物実測図(3)	79
第 59 図 遺構外出土遺物実測図(4)	80
第 60 図 遺構外出土遺物実測図(5)	81
V. 総 括	
第 61 図 第 7 次調査 大溝 1 実測図	86

I. 調査に至る経緯

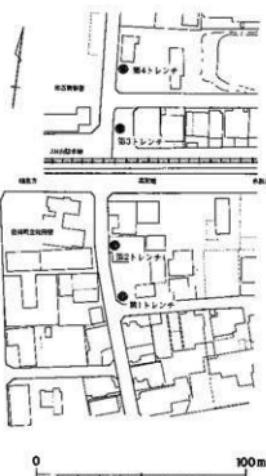
平成 8 年(1996)3 月 29 日、出雲土木建築事務所より出雲市駅付近連続立体交差事業地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は周知の遺跡である天神遺跡の範囲内であるとともに、平成 6 年(1994)には北側の隣接地（現在は鉄道高架橋となっている）を発掘調査し、多くの遺構や遺物を検出しているが、遺構検出レベルや遺物包含層を確認するため、試掘調査を実施することにした。

試掘調査は、同年 4 月 24 日に 4ヶ所のトレンチを設定して行った（第 1 図）。その結果、高架橋の北側に設定した第 3・第 4 トレンチでは、平成 6 年に発掘調査を実施した地山上面の包含層が削平された状態で、遺構・遺物とも確認できなかった。一方、南側に設定した第 1・第 2 トレンチからは遺構及び遺物が検出された（第 2 図）。遺物には弥生土器・土師器が多く、須恵器・陶器もわずかに出土している。また、遺物を包含している層位は、標高約 6.1 ~ 7.0 m と厚く、試掘溝全体が遺構にかかっていると考えられた。

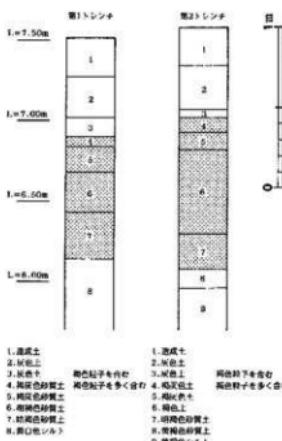
試掘調査の結果から、事業者である出雲土木建築事務所と出雲市教育委員会・鳥根県教育委員会の三者で協議を重ね、高架橋の南側、幅約 10 m、長さ約 45 m の約 450 m² を発掘調査することで合意した（第 3 図）。そして、調査期間は平成 9 年(1997)4 月から同年 7 月までとすることを確認した。

発掘調査に至る手続きについては、まず、事業者である出雲土木建築事務所から平成 9 年(1997)3 月 10 日付で埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第 57 条の 3）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の報告（同法第 98 条の 2）を同年 3 月 17 日付で文化庁長官宛提出している。

発掘調査は、平成 9 年(1997)4 月から準備を進め、同年 4 月 24 日から開始した。なお、調査地は現状が既設舗装道路であったため、試掘調査によって確認されていた遺物包含層の上層である造盛土までを重機によって取り除き、その下面から調査を開始している。そして、夏の猛暑と台風、遺構内からの湧水などに悩まされながらも平成 9 年(1997)7



第1図 試掘トレンチ位置図



第2図 試掘トレンチ堆積土層図

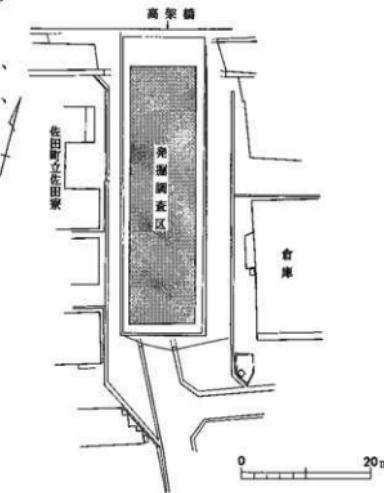
月10日に調査を終了した。その間、同年6月29日には75名の参加者を得て現地説明会を行っている。

なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届(遺失物法第13条)、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。

註

(1)「天神遺跡第7次発掘調査報告書」

出雲市教育委員会 (1997)



第3図 発掘調査区位置図

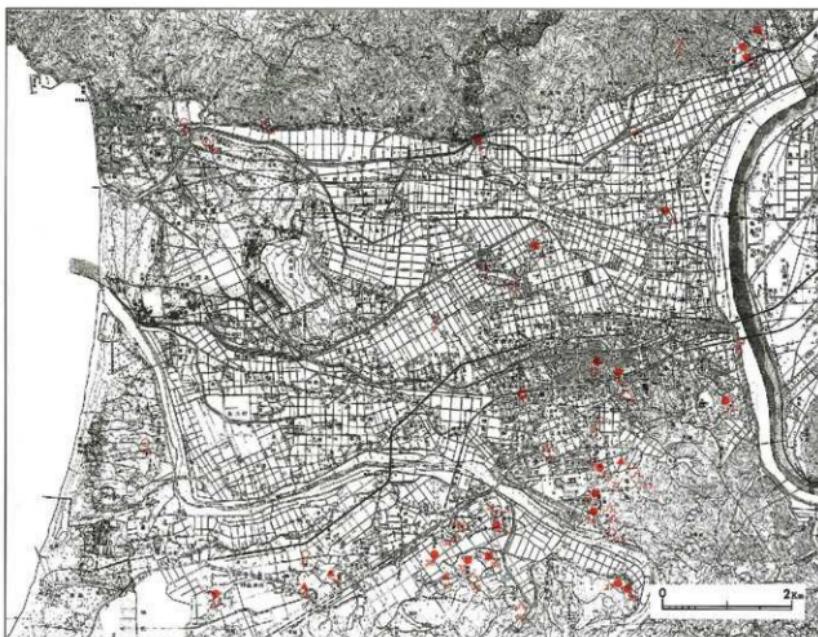
II. 位置と環境

(1) 遺跡の位置

天神遺跡は、出雲市天神町及び塩治有原町を中心とする広範囲な地域に所在している。現在では山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央、JR出雲市駅から西方1kmほど離れた地域に広がっており、そのほとんどが宅地として利用されている。

出雲平野をとりまく地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流



第4図 天神遺跡周辺の遺跡

- 1.天神遺跡 2.白枝荒神遺跡 3.小山遺跡 4.矢野遺跡 5.大塙古墳 6.石臼古墳 7.山持川川岸遺跡 8.薦ヶ峯城跡
- 9.平林寺山古墳 10.膳棚山古墳群 11.大寺古墳 12.萩谷古墳 13.斐伊川鉄橋遺跡 14.西谷墳墓群 15.今市大念寺古墳 16.塚山古墳 17.平家丸城跡 18.角田遺跡 19.神門寺境内施廐 20.上塙治築山古墳 21.篠山遺跡 22.上塙治横穴墓群 23.大井谷城跡 24.半分城跡 25.三田谷遺跡 26.小坂古墳 27.刈山古墳群 28.半分古墳 29.地蔵山古墳 30.栗栖城跡 31.放れ山古墳 32.大堤古墳 33.古志本郷遺跡 34.田畠遺跡 35.妙蓮寺山古墳 36.淨土寺山城跡 37.地蔵堂横穴墓群 38.宝塚古墳 39.福知寺横穴墓群 40.小浜山横穴墓群 41.知井宮多聞院遺跡 42.山地古墳 43.上長浜貝塚 44.正蓮寺周辺遺跡 45.出雲大社境内遺跡 46.原山遺跡 47.菱根遺跡

して入海のような状況を呈していた「神門水海」と呼ばれる潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。

また、古代国・郡・里制においては神門郡高岸郷に比定されており、「出雲國風土記」には、天神遺跡周辺の様子について、次のように記載されている。「或るは土地豊に沃えて土穀・桑・稔り歓びに、百姓の膏腴の圃なり。或るは土地豊に沃えて、草木叢り生ひたり。」というように、農業に適した豊かな肥沃地であったようである。

このような地形のもと、天神遺跡は入海の河口部に近い神戸川北岸の旧自然堤防上に立地していたと考えられ、少なくとも鎌倉時代の初期頃までは同様な景観であったと考えられる。

(2) 歴史的環境

出雲平野には、数多くの遺跡が存在している。中でも天神遺跡の所在する塙治地区は、出雲市内でも最も埋蔵文化財の密集する地域となっている。神戸川右岸に形成され、南北に長く伸びる旧自然堤防上には、神門寺付近遺跡・塙治小学校付近遺跡・弓原遺跡・高西遺跡など、それぞれを区分するのが難しいほど連続して遺跡が密集している。

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある斐根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある上長浜貝塚が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前期末から中期にかけての上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晚期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡、平野中央部の矢野遺跡・蔵小路西遺跡からも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡（湖陵町）などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵上に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60mもあるような3号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。

古墳時代になると、中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半には今市大念寺古墳・上塙治築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塙治横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺などの私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓・普済古墓のほか、近年の発掘調査によって、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、いち早く儒教あるいは仏教文化が取り入れられていたことが窺える。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、矢野遺跡では14～15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、蔵小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

III. 8次に亘る発掘調査と遺跡の範囲

1. 8次に亘る発掘調査

天神遺跡では、これまでに種々の開発に伴い、8次、20ヶ所の発掘調査が行われている（第5図）。

(1) 第1次発掘調査——海上地区土地区画整理事業に伴う発掘調査——⁽¹⁾ (1971年)

道路新設部分6ヶ所について行われた発掘調査である。第1調査地区では、柱穴を伴う堅穴造構のほか、弥生時代中期後半の漆棺墓が検出されている。器高58cmを測る壺棺が、長さ約1.5m、深さ約50cmの墓坑に横にして埋納されていた。第2調査地区では、弥生時代中期後半頃の溝状造構が検出されており、短頸壺や鋸歯文のある石製筋錘車などが出土している。第3調査地区では、弥生時代中期後半頃の溝状造構や古墳時代の土坑のほか、ピットなどを検出している。第4調査地区では、古墳時代後期以降と推定される溝状造構が検出され、土師器高坏やまりなどが出土している。また、天神遺跡発見の端緒となった第5調査地区では、古墳時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴を10以上検出し、須恵器や土師器の壺などが出土している。第6調査地区では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡3棟や溝状、横状造構などが検出されている。中でも奈良時代の掘立柱建物跡の柱穴は、径約70cm、深さ約40cmを測る大形のものであり、付近で墨書き土器が出土していることから、地方官衙跡（郡家、郷倉、駅家など）の可能性が指摘されている。

(2) 第2次発掘調査——島根医大教職員宿舎建設に伴う発掘調査——⁽²⁾ (1975年)

官舍部分3ヶ所について発掘調査が行われている。第1調査区では、弥生時代中期中葉の土坑墓と推定される造構を14基検出しているほか、弥生時代中期中葉から古墳時代後期にかけての溝状造構などを検出している。溝状造構の中には「コ」の字状を呈するものがあり、方形周溝墓としての可能性が指摘されている。また、第2調査区では、古墳時代後期から近世にかけての掘立柱建物跡6棟と溝状造構4条などを検出している。特に古墳時代後期頃にあたる掘立柱建物跡の柱穴は、径1m～1.2mと大形で、2間×4間の縦柱となるものも含まれており、1971年の調査を裏付けるように、都衛など官衙跡の造構である可能性を示唆している。また、これまで弥生時代中期の上器編年を前・後半に2区分していたのに対し、この調査で出土した土器などが指標となって弥生時代中期を前葉・中葉・後葉に3区分できる貴重な資料となっている。

(3) 第3次発掘調査——出雲考古学研究会による自主発掘調査——⁽³⁾ (1978年)

天神遺跡周辺を開発の波から守るために、その性格を捉えることを目的とした発掘調査であり、天神天満宮南側の3ヶ所で行われている。B-1区では古墳時代中期と考えられる土器窓を検出し、土師器高坏、塊には赤色塗彩され暗文が施されたものが多く、周囲から土製の勾玉や丸玉などが出土していることから、祭祀性の強い造構と考えられている。また、平安時代頃と考えられる掘立柱建物跡の柱穴は、径80cm～1mに及ぶ大形のもので、同区から縁鉢陶器が出土していることや1971年の調査時に隣接した畠地内から墨書き土器が出土していることから考えて、官衙的建物群の一部と解されてい

る。A-2区、A-4区の調査では溝状遺構、ピットなどを検出しているが、時期、性格ともに不明とされている。なお、付近で出土した墨書き器は、この調査時に「旱天」と判読できることがわかっている。

(4) 第4次発掘調査——建設省職員宿舎建設に伴う発掘調査——(1981年)⁽⁴⁾

職員宿舎の建物部分、約200m²について発掘調査を行っている。遺構は、奈良時代のものと推定される掘立柱建物跡2棟や平安時代と推定される土坑、中世から近世にかけての溝状遺構などが検出されている。特に、中世の溝状遺構の中には、それぞれが方形に囲繞するものがあって、2棟以上の建物跡を溝によって区画していたものと推定されている。なお、出土遺物には須恵器、土師器、古鏡などがあるが、弥生土器は認められていない。

(5) 第5次発掘調査——建設省新庁舎建設に伴う発掘調査——(1985年～1986年)⁽⁵⁾

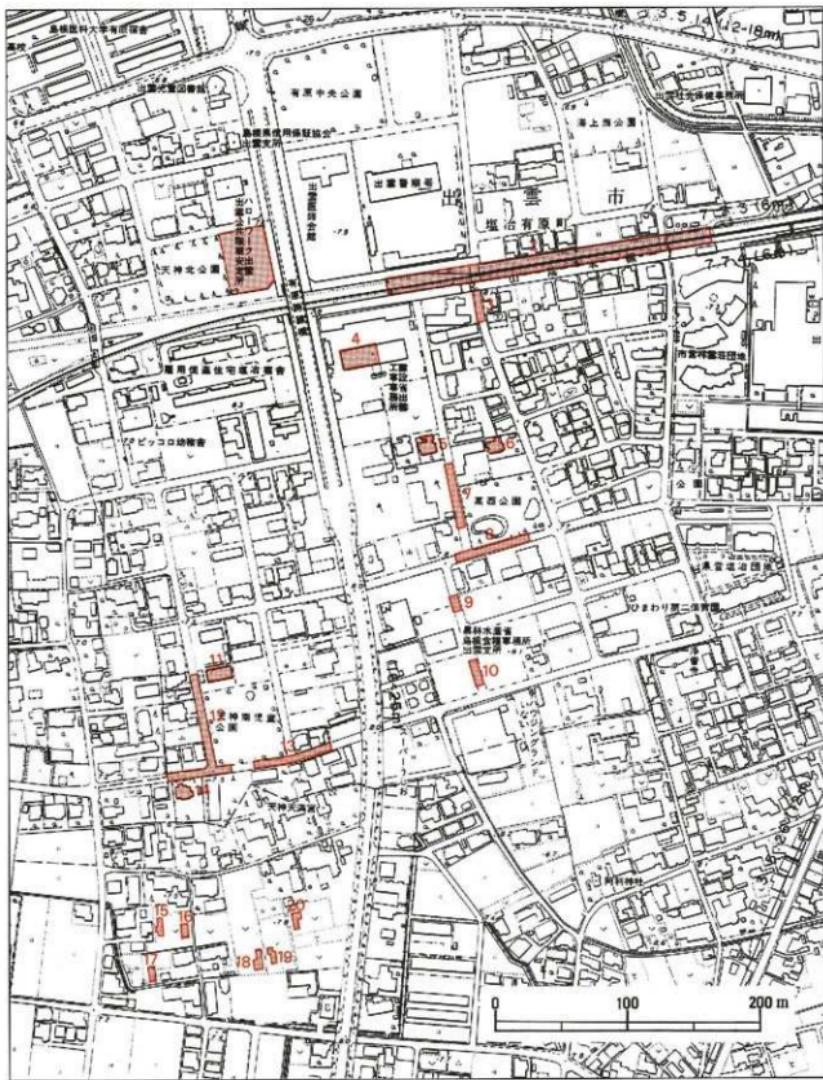
庁舎部分、約300m²について発掘調査が行われている。遺構は、弥生時代中期から中世にかけての溝状遺構や土坑状遺構が複雑な切合関係をもって検出されている。特に、弥生時代中期中葉の土坑墓と考えられる遺構には、管玉などの副葬品を有するものもあり、この地域における社会的階級の成立を考えるうえで貴重な資料となっている。また、調査範囲が限られているため全容は不明であるが、平面形が方形を呈し、床面に側溝が認められる古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられるような遺構が検出されており、この調査区周辺に古墳時代後期の集落跡があることも想定されている。

(6) 第6次発掘調査——塩冶地区遺跡分布調査による遺跡範囲確認調査——(1986年)⁽⁶⁾

5ヶ所のトレーナーを設けて行った遺跡範囲確認調査である。第1トレーナーでは、中世の溝状遺構やピットなどを検出している。第2トレーナーでは、溝状遺構、土坑、ピットなどを検出しているが、弥生時代中期の溝状遺構の中には、多量の土器が認められ、断面が「V」字状を呈して集落を囲繞する環濠の可能性が指摘されているものもある。そのほか、弥生時代中期の遺構としては、土坑も検出されている。遺構の多くは古墳時代後期から中世にかけてのものであるが、少量ながら弥生土器片も確認されている。また、第4トレーナーでも、溝状遺構、ピット、落ち込み状遺構など多数の遺構を検出している。時期は奈良時代から近世にかけてのものと考えられている。

(7) 第7次発掘調査——出雲市駅付近連続立体交差事業(高架橋部分)に伴う発掘調査—(1994年)⁽⁷⁾

高架橋予定期の幅約6m、全長約270mの区間に発掘調査を行っている。A区では、弥生時代中期中葉から近世に至るまでの溝状遺構、土坑、ピットなどを多数検出している。中でも、弥生時代中期中葉頃の遺構である大溝1・2は、幅が約6mもある大規模なもので、集落を囲繞する環濠の可能性が指摘されている。B区でも弥生時代中期中葉から近世に至るまでの溝状遺構、土坑、ピットなど多数の遺構を検出している。溝状遺構には、大規模なものが4条検出されており、それぞれ環濠の可能性が指摘されているとともに、時期的に重なるものがあることから、多重環濠として機能していた可能性がある。特に、弥生時代終末期頃に埋まったと考えられるSD06からは、遺物が多量に出土し、



第5図 天神遺跡発掘調査例位置図

- 1.建設省宿舎新築に伴う調査(1994) 2.出雲市駅付近連続立体交差事業に伴う調査(1994) 3.出雲市駅付近連続立体交差事業に伴う調査(1997) 4.建設省新庁舎建設に伴う調査(1985~1986) 5.島根医大教職員宿舎建設に伴う調査(1975, 第1調査区) 6.(1975, 第3調査区) 7.海上地区土地区画整理事業に伴う調査(1971, 第1調査地区) 8.(1971, 第2調査地区) 9.(1971, 第4調査地区) 10.(1971, 第3調査地区) 11.建設省職員宿舎建設に伴う調査(1981) 12.(1971, 第6調査地区) 13.(1971, 第5調査地区) 14.(1975, 第2調査区) 15~18・20.塩冶地区遺跡分布調査(1986) 19.出雲考古学研究会による調査(1978)

搬入品も多く認められることから、当該期の集落を考えるうえで貴重な資料となっている。C区は旧自然流路の低湿地で、弥生時代中期後葉頃の農耕具や食器などの木製品が多量に出土している。木製品の中には、未成品のものも含まれており、付近で杭や溝状遺構が検出されていることから、溝やウッドサークルで保管していた可能性が指摘されている。D区では、近世のものと考えられる石敷状遺構や道状遺構などを検出し、付近では墨書き木札が出土していることから、この付近に集荷センター的な施設があったことが想定されている。

(8) 第8次発掘調査——建設省宿舎新築に伴う発掘調査——⁽⁸⁾ (1994年)

宿舎建物部分と駐車場部分約1,000m²について発掘調査が行われている。遺構としては、溝状遺構、土坑、ピットなどを検出している。時期は古墳時代後期から近世に至るまでのものであるが、古墳時代後期の遺構は土坑墓1基のみである。なお、溝状遺構の中には、これまでの発掘調査によって指摘されていたように、建物を囲繞する可能性があるものも検出されている。なお、弥生土器は認められていない。

2. 天神遺跡の範囲

天神遺跡は、天神町及び塩治有原町を中心とする地域に所在し、その範囲は東西約450m、南北約600mの広範囲に及んでいる。これまでの発掘調査によって遺構や遺物が数多く検出され、弥生時代中期中葉頃から近世に至るまでの長期間、連綿と集落が営まれていることが明らかになっている。しかし、遺構や遺物の出土状況から考えると、弥生時代から古墳時代にかけての居住域は遺跡の北東部に集中している傾向にあり、奈良時代以降については西部や南部で多く検出されている。

天神遺跡の所在する地域は市内でもいち早く宅地化が進み、発掘調査についても部分的で面的な調査が少ないが、大局的にみると前述のように居住域が二極化していることは、今後も注視していく必要がある。

註

- (1) 「出雲市天神遺跡」 出雲市教育委員会 (1972年)
- (2) 「天神遺跡」 出雲市教育委員会 (1977年)
- (3) 「天神遺跡の諸問題」 出雲考古学研究会『古代出雲を考える』1 1979年)
- (4) 「天神遺跡発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 (1982年)
- (5) 「天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ」 出雲市教育委員会 (1986年)
- (6) 「塩治地区遺跡分布調査Ⅱ」 出雲市教育委員会 (1987年)
- (7) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 (1997年)
- (8) 「天神遺跡第8次発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 (1996年)

IV. 調査の概要

1. 発掘調査の概要

調査に入る前に、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの造成土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北とも 5 m 間隔のグリッドを設定し、南から A 1 ~ A 8 Gr、B 1 ~ B 8 Gr とした。調査面積は東西 10 m、南北 45 m の 450 m² である。なお、水処理のために調査区を囲むように深さ約 30 cm の側溝を掘っているが、この際にも多くの遺物を検出している。

層序（第6図・第7図）

調査区が南北に長いため、複雑な堆積を示しており、切合関係を把握するのも難しい状況であった。また、遺構が集中している調査区南側と遺構があまり検出されていない北側とでは、大きく層序が異なっている。

調査区の北側では、基本的には上層から褐灰色土、明褐灰色土、暗褐色土と堆積しており、地山である黄褐色シルト質土に達する。一方、南側の基本層は、上層から褐灰色土、黒褐色系土、砂質系土と堆積しており、地山である黄褐色シルト質土に達している。この層位の違いは、遺構の残存状況や遺物の出土状況から推察すると、北側では暗褐色土が堆積した後の時期に何度も削平を受けたものと考えられる。

遺構（第6図・第7図）

遺構は、溝状遺構 11、土坑状遺構 6、落ち込み状遺構 6、ピット状遺構 9 を検出しており、遺構が築かれた時期も弥生時代中期から古墳時代初頭・古代・中世・近世のものなど様々であり、これらの遺構が複雑な切合関係をみせている。

近世の遺構は、最上位層である褐灰色土上面で検出され、溝状遺構を 2 (SD 01・SD 02)、土坑状遺構を 1 (SK 01)、落ち込み状遺構 1 (SX 01) を検出している。

古代から中世にかけての遺構は、溝状遺構を 1 (SD 05)、土坑状遺構を 5 (SK 02~SK 06)、落ち込み状遺構を 4 (SX 02~SX 04)、ピット状遺構 9 (P 1~P 9) を検出している。中でも土坑状遺構は、その全てが 11 世紀後半から 12 世紀代にかけて築かれ、井戸として利用されたと考えられ、特に SK 04・SK 06 では白磁を共伴し、多量の遺物が検出されている。

弥生時代から古墳時代初頭頃にかけての遺構は、溝状遺構を 8 (SD 03・SD 04・SD 07~SD 12)、落ち込み状遺構 2 (SX 04・SX 05) を検出している。中でも溝状遺構である SD 09 は、第 7 次発掘調査で検出された A 区大溝 1 と規模や方向がほぼ一致することから、同一の溝である可能性が高く、注目される。

また、遺構は調査区の南側に集中しているが、北側には遺構が存在しないのではなく、地山上面が何度も削平を受けているためで、実際には遺構の底部のみが部分的に残っている状態であった。

遺物

遺物は、造成土を除くと地山である黄褐色シルト質土の上層に堆積する全ての層に包含しており、弥生土器・土師器を中心に須恵器・磁器・鉄器・木製品も若干出土している。総発掘調査面積は450m²であるが、遺物の出土量はコンテナ17箱分にも及んでいる。

中でも黄褐色シルト質土の上層に堆積する黒褐色土・暗褐色土は安定した遺物包含層となっている。また、遺構内からの出土量も多く、SD03・04・09、SK04・06からは大量の遺物を検出している。

弥生土器には、壺・甕・高坏・鉢・蓋などの器種があり、バラエティーに富んでいる。そのほとんどが弥生時代中期中葉頃の遺物であるが、中には中期前葉に近い様相を示す遺物も認められ、天神遺跡が営まれた時期がさらに遡る可能性がある。また、壺や甕の中には内外面とも横方向のミガキによって調整されている特異な土器など、他地域から搬入された可能性があるものもあり、貴重な資料となっている。

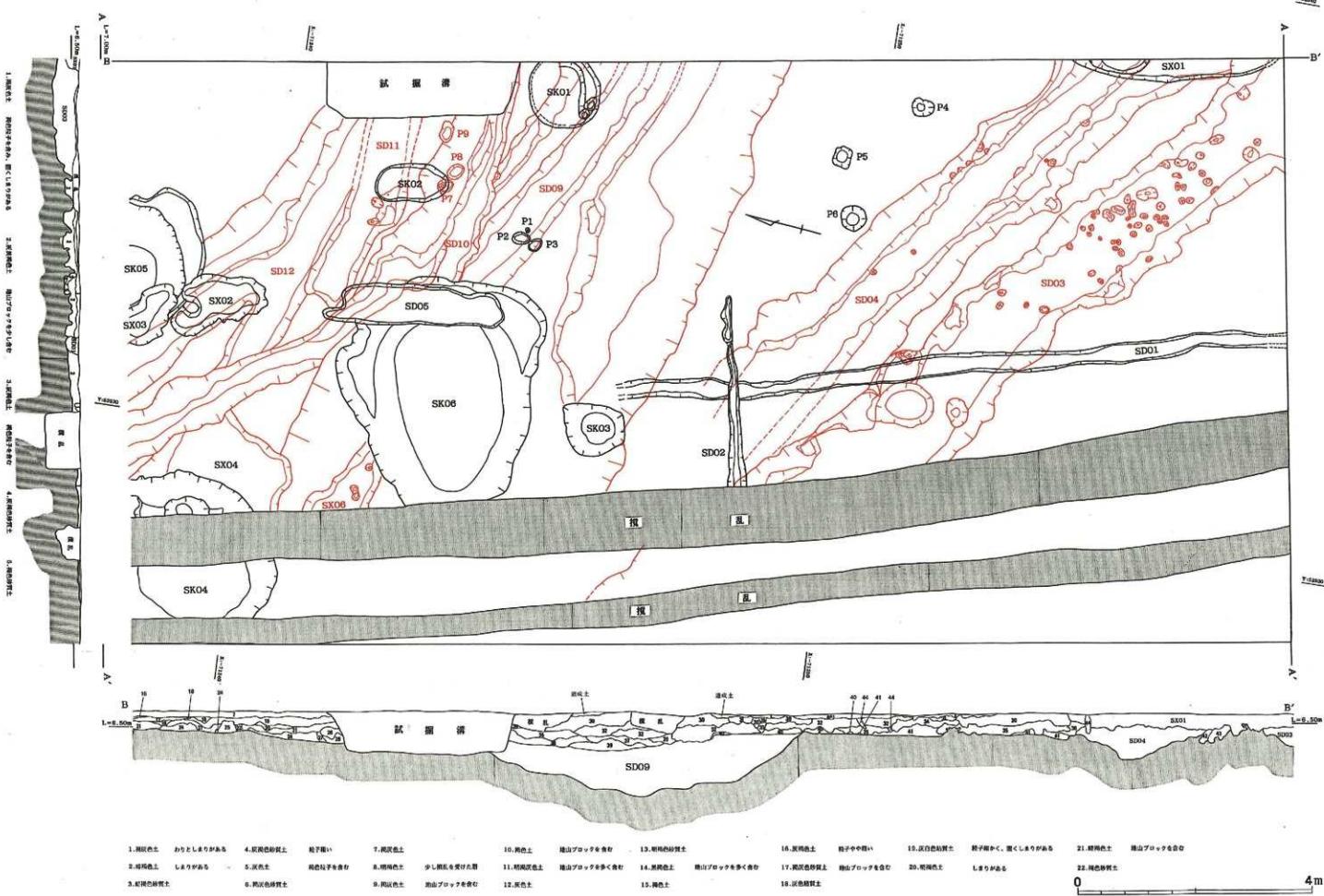
弥生時代後期頃の遺物は少ないが、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては再び遺跡の繁栄した時期で、遺物の出土量も多い。そして、中には第7次調査でも検出された布留式傾向甕も数点含まれており、注目される。

古墳時代前期・中期の遺物は少ないが、後期から奈良時代にかけての遺物はわずかながら出土している。そして、平安時代末（11世紀後半～12世紀代）になると、当該地に多くの遺構が築かれて再び繁栄期を迎える、遺物の出土量も多い。遺物には甕・坏・塊・小皿などとともに、玉縁のつく白磁や鉄鎌などの鉄器も共伴しており、良好な資料となっている。その他、中世・近世の遺物もわずかに認められ、遺跡が営まれていたことが窺われる。

以上のように、当該地は弥生時代中期中葉頃から近世に至るまで、一時衰退期はあるものの、連綿と集落が営まれていたことが窺われる。

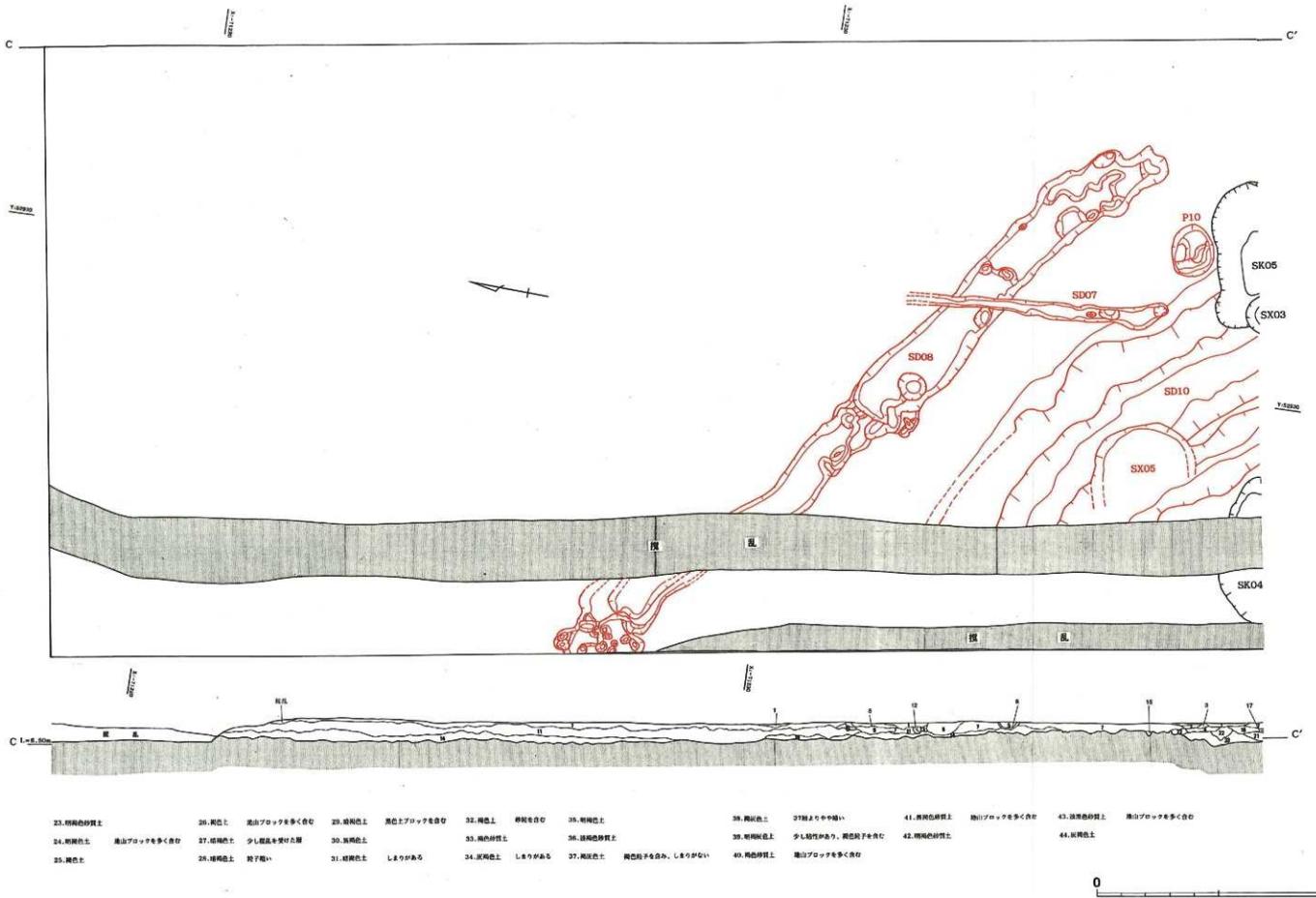
註

- (1) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 (1997年)



第6図 造構配置図 (1~4Gr)

*赤刷は弥生時代～古墳時代の遺構、黒刷は古代～中近世の遺構



第7図 遺構配置図 (5~8Gr)

※赤刷は弥生時代～古墳時代の遺構、黒刷は古代～中近世の遺構

2. 遺構と遺物

(1) 近世の遺構

近世の遺構は、溝状遺構2、土坑状遺構1を検出しているが、いずれも褐灰色土上面で検出されており、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。

SD01 (第8図)

調査区の南側、褐灰色土上面で検出された南南東-北北西に伸びる溝状遺構である。北側は上部削平のために途中で切れ、南側は調査区外へと伸びている。

検出長 10.8 m、最大幅 38 cm を測る。なお、検出高は標高 6.58 m である。

覆土には、少し粘性のある褐灰色土が堆積し、断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて、底面はやや平坦に作り出しており、最深部までの深さは約 16 cm である。

遺物は全く出土しておらず、性格については不明であるが、堆積土の状況や遺構の切合関係から考えると近世の遺構である可能性が高い。

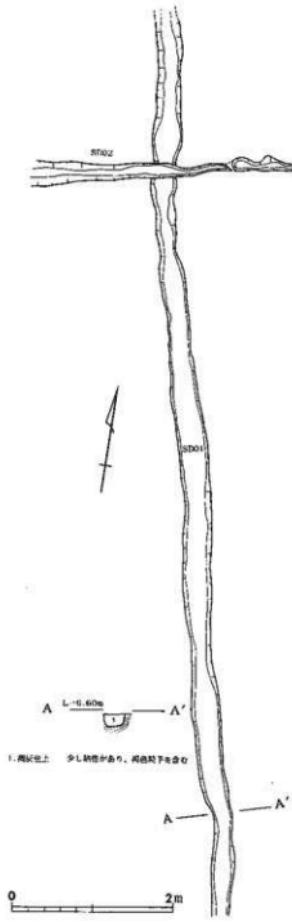
また、SD01 と直交するように SD02 が西南西-東北東へと伸びているが、切合関係から SD01 より新しい時期に築かれたことが明らかである。しかし、SD01 と同様、遺物は全く出土しておらず、性格について不明である。

SK01 (第9図)

調査区の東側、A3 Gr の褐灰色土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは、東側が一部調査区外へ伸びているが、径約 1.24 m のほぼ円形を呈している。なお、検出高は標高 6.58 m である。

覆土には、黄褐色粘土をブロック的に含む褐灰色土が堆積しており、断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しているが、南側では一度平坦面を作つてから中央最深部へと落ちている。なお、最深部までの深さは約 12 cm である。

土器は出土していないが、遺構の中央で 2 本の木片を検出している。これは、何かを据え付けるために渡されていた副木と考えられるが、何を据え付けていたかについては不明である。時期については、堆積土の状況や遺



第8図 SD01実測図

構の切合関係から考えると、近世の遺構である可能性が高い。

(2) 古代から中世にかけての遺構

古代から中世にかけての遺構は、溝状遺構1、土坑状遺構5、落ち込み状遺構4、ピット状遺構9を検出しており、遺構の残存状態もほぼ良好で、多量の遺物が出土している遺構もあり、貴重な資料となっている。

SK02 (第10図)

A 3 ~ A' 4 Grの灰白色粘質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長63cm、南北長

1.27mを測り、南北に長い梢円形を呈する。遺構の基軸は、南南東—北北西を向いており、検出高は標高6.48mである。

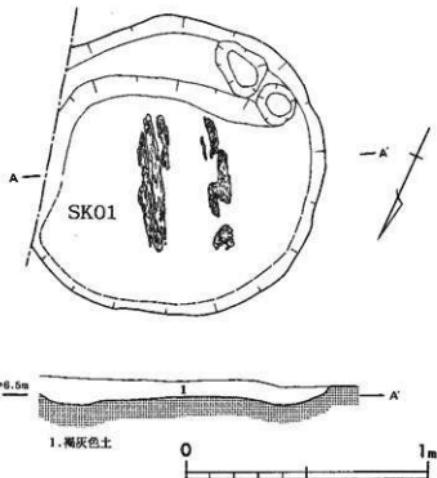
覆土には、上層から砂利を含む褐色土・灰色土・褐色土と堆積している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは約8cmである。

遺物は全く出土しておらず、性格については不明であるが、堆積土の状況や遺構の切合関係から考えると、中世の遺構である可能性が強い。

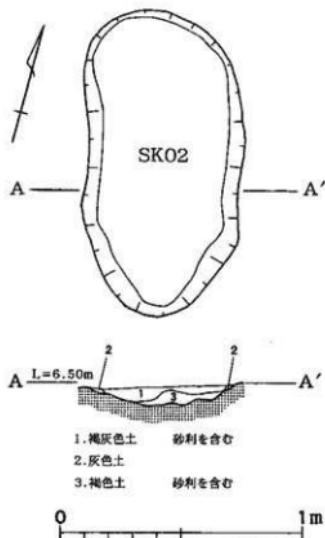
P4 (第11図)

A 2Grの黄褐色シルト質土(地山)上面で検出したピット状遺構である。平面プランは東西長30cm、南北長38cmを測り、やや南北に長い梢円形を呈する。なお、検出高は標高6.32mである。

覆土には、褐色砂質土が堆積しており、断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出し、最深部までの深さは約15cmである。



第9図 SK01実測図

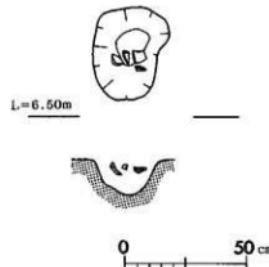


第10図 SK02実測図

P 4 の出土遺物（第60図-88）

遺物は、土師器の小皿が1点のみ出土している。ほぼ完形で、口径9.2cm、底径5.4cm、器高1.95cmを測り、内外面ともナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。このような小皿は、11世紀後半頃から導入されたと考えられており、器形からは判断できないが、他の遺構から出土した遺物を考えると11世紀後半から12世紀代の可能性が強い。

遺構の性格については、他のピットとの位置関係から考えると柱穴とは考えにくく、不明である。



第11図 P4実測図

SK 03（第12図）

B 3Grの灰黄褐色土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長約90cm、南北長約1.05mを測り、南北にやや長いいびつな楕円形を呈している。なお、検出高は標高6.32mである。

覆土には、上層に砂利を多く含む褐色土や黒褐色土が堆積しており、中層には砂をブロック的に含む黒褐色土・暗褐色土が堆積し、下層には粘性が強い黒褐色土・黒色土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて、底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約1.24mである。なお、SK 03は弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての溝状遺構（SD 09）と切合関係にある。

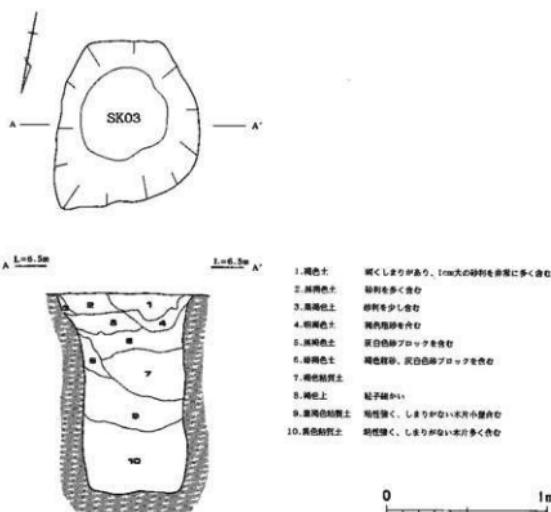
遺構の性格については、下層の粘質土中に木片が認められることから、木枠組みの井戸として利用されていた可能性が強い。

また、同時期に築かれたと考えられる遺構から出土した遺物から検討しても、SK 03は11世紀後半から12世紀代にかけて築かれ、遅くとも13世紀代には利用されなくなつたと考えられる。

SK 03の出土遺物

(第13図)

遺物には小片が多いが、土師器壊あるいは塊が出土している。1~4は土師器の壊あるいは塊である。いずれも内外面は回

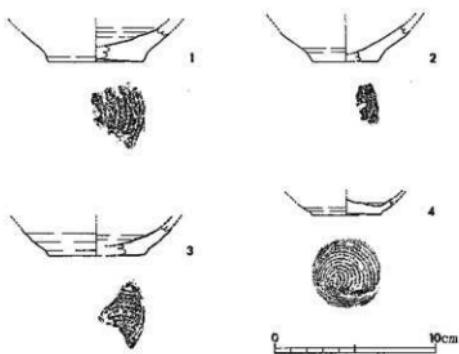


第12図 SK03実測図

転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

1は底部に厚みがあるので特徴で、2は口径に対して底径が小さくなるタイプのものであろう。3・4については全体の形状までは把握し難い。これらの遺物の時期的判断は難しいが、他の遺構などから考えると、11世紀後半から12世紀代の遺物である可能性が強いのではないだろうか。

また、下層の粘質土中から木片がかなり出土していることは注意される。



第13図 SK03出土遺物実測図

SK04 (第14図)

調査区のほぼ中央、B4～B5Grにかけて検出した土坑状遺構で、中央に水道管、西側にガス管が埋設されていたため、かなりの攪乱を受けている。

検出した状況では、東西長2.56m以上、南北長3.24mを測り、平面プランはほぼ円形を呈するものと考えられる。なお、検出高は標高6.35mである。

覆土には上層に砂利を含むにぶい黄色土・褐色土・暗褐色土などが堆積し、中層には炭化物を多く含む黒褐色土が堆積してその下層には黒褐色土・暗灰色粘質土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ち、攪乱により明確には判断し難いが、底面はほぼ平坦に作り出しているようで、最深部までの深さは約80cmである。

遺物は遺構の中層から下層にかけての出土が多く、中央と西側が大きく攪乱を受けてはいるものの、東側からの出土量が多い(第15図)。

遺構の性格としては、井戸が考えられるが、遺構の中央部が大きく攪乱を受けていることから、木片、板材などの出土も確認されず、判断し難い。しかし、遺構内からは量的には多くの土器・鉄器などが出土しており、井戸を埋める際に祭祀を行った可能性もある。

SK04の出土遺物 (第16図)

出土した遺物には土師器壺・小皿・足高台付壺・台付壺・白磁碗・鉄器など多くの遺物がある。その中にはほぼ完形の状態で出土し、全体の形状が把握できるものもある。1～10は土師器の壺で、いずれも内外面は回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

2は、口径に対して底径が小さくなるタイプのものであろう。3も形状的には2と同様であり、底径6.0cm、口径15.7cm、器高4.1cmを測り、底部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。6は、

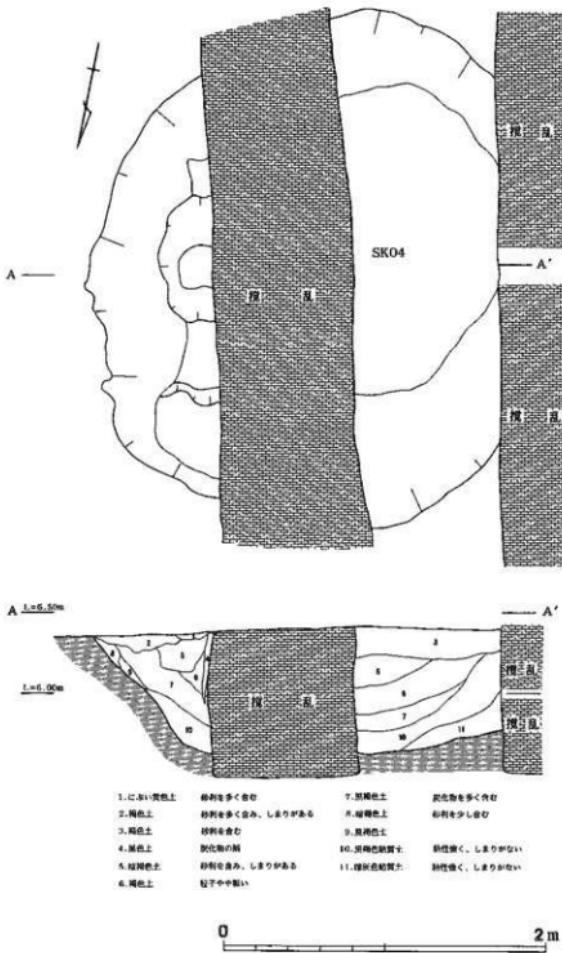
底径 5.8 cm、口径 14.0 cm、器高 4.6 cm を測り、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。また、体部には回転水引き痕が明瞭に残り、外面にはススが付着している。10 は口縁部から体部にかけての破片であるが、内外面とも黒褐色を呈し、口縁端部がやや外反するという特徴をもつ。

これらの坏は、6 がやや古い様相を呈しているものの、その他は松江市天満谷遺跡 SD 0 3 付近、⁽¹⁾ 遺構外出土土器、斐川町西石橋遺跡墓壙出土土器、出雲市藤ヶ森遺跡（I 地点）SK 0 1 出土土器と形状がよく似ており、12世紀代のものと考えられる。

11～13 は土師器の小皿である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによつて切り離されている。

11 は、やや内湾ぎみに立ち上がり、器高が 1.35 cm と低く、内外面にススが付着している。12 は形狀的には 11 と同様であるが、器高は 2.0 cm と高さがある。13 は底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。これらの小皿は、その出現が 11 世紀後半頃と考えられるところから、それ以降のものであろう。

14 は、足高高台をもつ土師器坏である。高台部はやや外傾するが外觀的には直立に近く、内外面とも回転ナデによって調整されている。また焼成が非常に良好で、外面にはススが付着している。足高高台付の坏は、小皿と同様、時期的には 11 世紀後半頃から出現するものであることから、それ

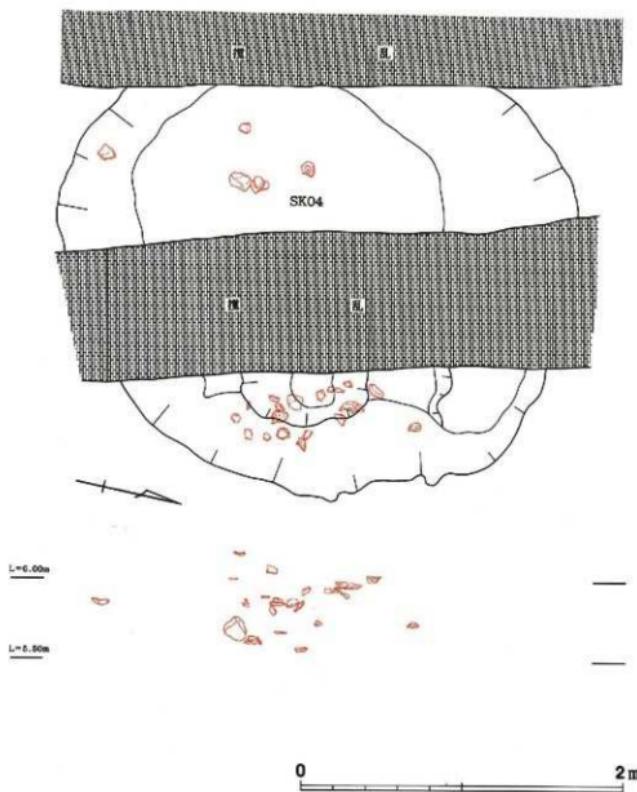


第14図 SK04実測図

以降のもので
あろう。

15は、台
付の土師器坏
である。内外
面とも回転ナ
デにより調整
され、底部は
回転糸切りに
よって切り離
されている。
このタイプの
ものは、松江
市天満谷遺
跡・黒田畦遺
⁽⁴⁾
跡などからも
出土してお
り、12世紀
後半以降に出
現する器形で
ある。

16は、白
磁碗の口縁部
から体部にか
けての破片で
ある。口径約



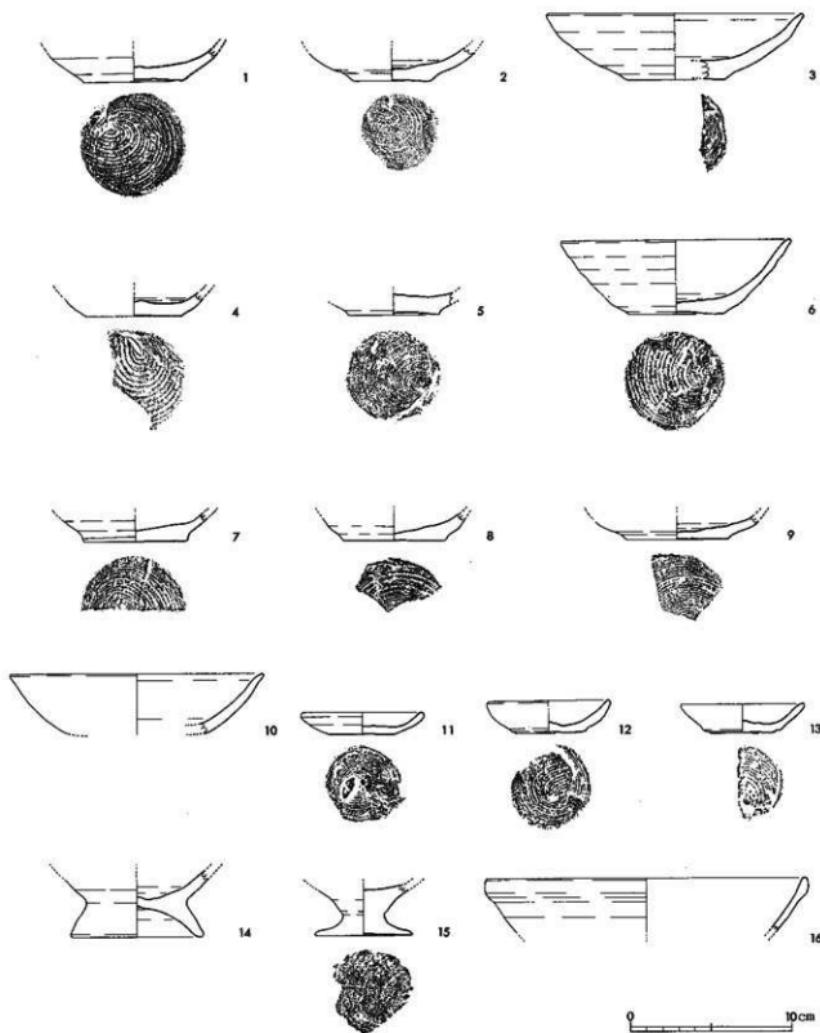
第15図 SK04遺物出土状況実測図

19.7cmを測り、外面口縁部に玉縁状の突帯が付くものである。その特徴から11世紀後半から12世紀代にかけての資料であろう。平安時代から鎌倉時代にかけての土師器にはバリエーションが多く、容易に時期的な判断はし難いが、この白磁が出土していることによりSK04から出土している土師器についてもおおよそ当該期の資料であると考えられる。

第17図-1～3はSK04から出土した鉄製品である。

1は鍔が付着してはいるが、最大長9.35cm、最大幅2.4cm、重さ42gを測る。2も同様に鍔化しているが、最大長6.9cm、最大幅2.5cm、重さ21gを測る。X線写真から観察すると、1は先端に2ヶ所の型持せ孔をもつ鉄鏃である。なお、片端は欠損している。2は鑿であろう。刃部の一部と上端が欠損している。3は、X線写真から観察すると完形ではあるが、用途については不明である。しかし、最大長7.25cm、最大幅3.4cm、最大厚が1.6cm以上あり、121gと重量もあることなどか

ら、金鎧のようなものが想定される。これらの鉄製品は、他の出土遺物から考へると 11 世紀後半から 12 世紀代のものである可能性が強い。



第16図 SK04出土遺物実測図(1)

SK 05 (第18図)

調査区のほぼ中央、A 4 ~ A 5 Grの灰白色粘質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長約 2.4 m、南北長約 2.05 m を測り、東西にやや長いいびつな橢円形を呈している。なお、検出高は標高 6.37 m である。

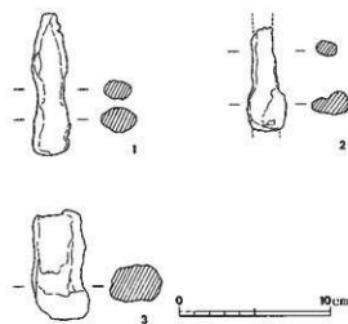
覆土には、上層に砂利を含む暗褐色土、中層には砂利を含まない褐色系土が堆積し、下層には粘性の強い暗褐色土や黒褐色土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層に達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、基本的には肩部から約 45 度の角度で落ち、底面はほぼ平坦に作り出しているが、遺構の南側では一度平坦面を作り出してからさらに落ち、やや北側に偏る最深部へと達する。なお、SK 05 はやや新しい時期の遺構である SX 02、SX 03、弥生時代の遺構である SD 12 と切合関係にある。

遺構の性格としては、形状や下層からかなりの湧水があることから、素掘りの井戸と考えられる。時期としては、出土遺物から考えると 11 世紀後半から 12 世紀代にかけてのものと考えられ、井戸を埋める際に土器などを投入し、祭祀を行った可能性もある。

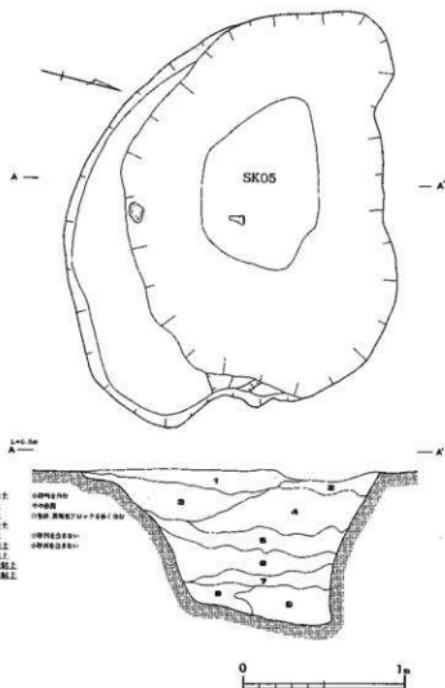
SK 05 の出土遺物 (第19図)

出土遺物には細片が多いが、土師器坏・小皿・鉄製品が出土している。

1 ~ 5 は土師器の坏である。いずれも内外面は回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。5 は、口径 21.8 cm を測るやや大形の坏で、やや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部の内外面にはススが付着している。



第17図 SK04出土遺物実測図(2)



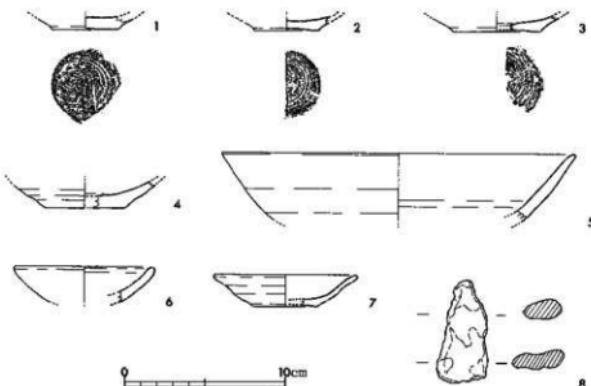
第18図 SK05実測図

る。

6・7は土器の小皿である。6はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。7は底径3.9cm、口径8.8cm、器高1.95cmを測り、内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。

8は鉄が付着しているが、最大長6.3cm、

最大幅3.4cm、重さ27gを測る鉄製品で、X線写真で観察すると完形の鉄鎌であることが判明した。この鉄鎌も他の出土遺物から考えると11世紀後半から12世紀代のものと考えられる。



第19図 SK05出土遺物実測図

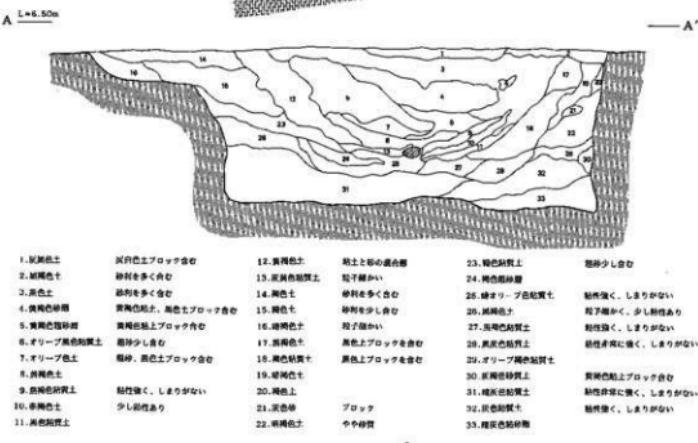
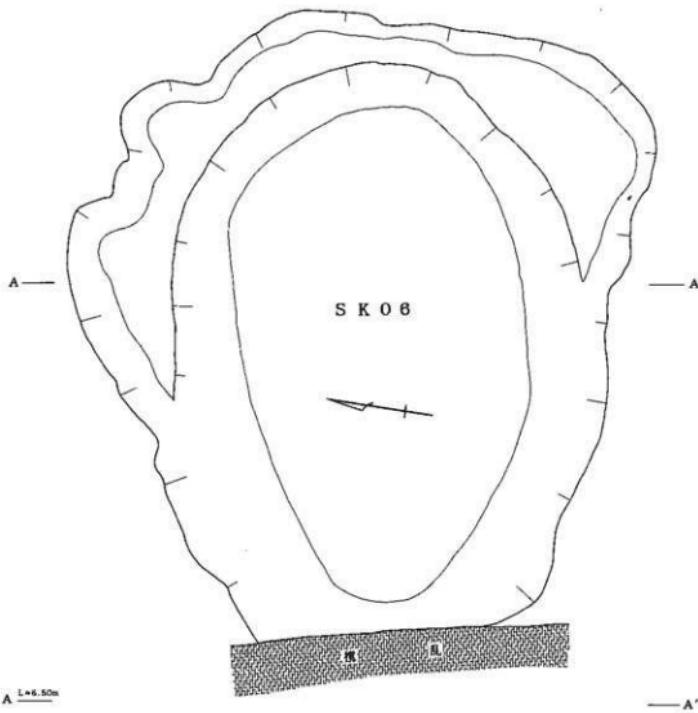
SK06 (第20図)

調査区のやや南側、A 3～A 4 Gr、B 3～B 4 Grの灰黄褐色土上面で検出された土坑状遺構である。西側は水道管が埋設されていたため擾乱を受けているが、東西長4.0m以上、南北長約3.2mを測り、東西に長い精円形状を呈している。なお、検出高は標高6.30mである。

覆土には、基本的に上層に砂利を多く含む褐色土・黒色土が堆積し、中層から下層にかけては粘性のある黒褐色土・暗灰色土が堆積しているが、遺構の中央部では異なった堆積層を示している。つまり、3層から13層までの覆土は人為的に埋められたものと考えられ、付近の堆積層には認められない黄褐色砂層や黒色土が堆積している。また、最深部は灰白色粗砂層にまで達し、この層位からはかなりの湧水がある。断面の形状は、遺構の東側では肩部から緩やかに落ちて一度平坦面を作り出し、さらに鋭角に底面へ向かって落ちている。一方、西側では肩部からほぼ垂直に落ちており、底面は一様に平坦に作り出している。なお、最深部までの深さは約1.0mである。

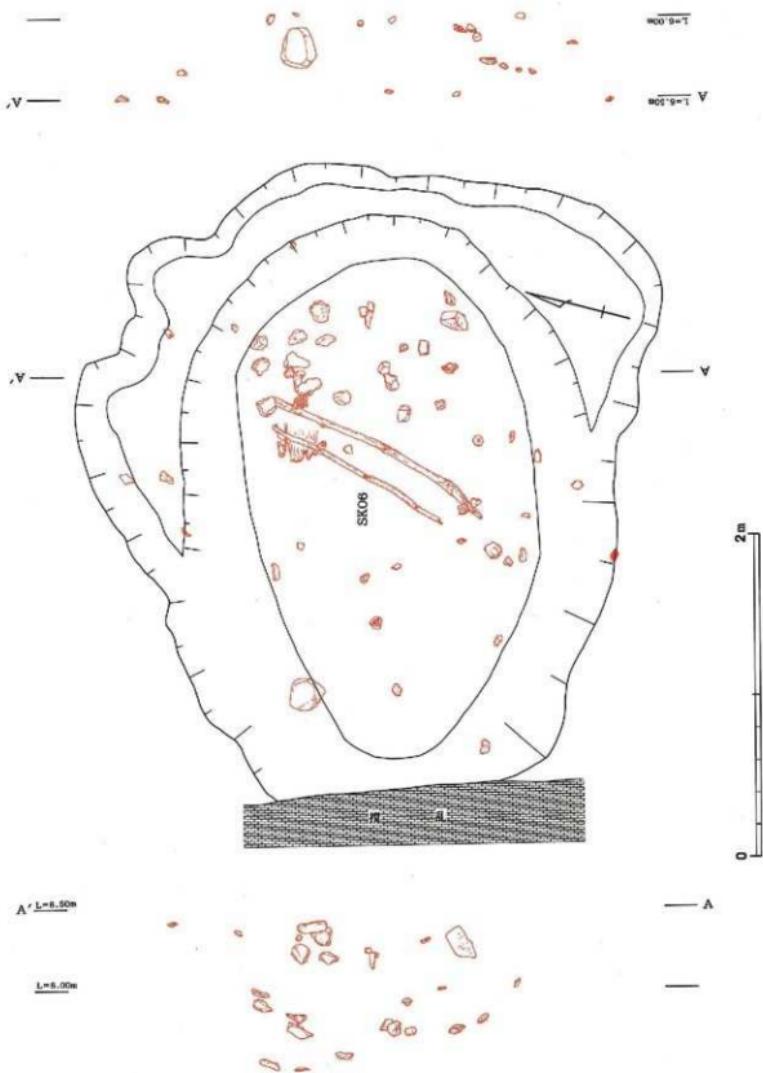
遺物は、上層から下層にかけてほぼ同量の出土が認められ、出土量も多い(第21図)。位置的にはやや東側からの出土量が多く、遺構ほぼ中央の最深部からは井戸の側板、副木として利用されていたと考えられる板材や杭が検出されている。また、中層にあたる褐色粘質土からは若干のヤマトシジミの貝殻が認められ、注意される。

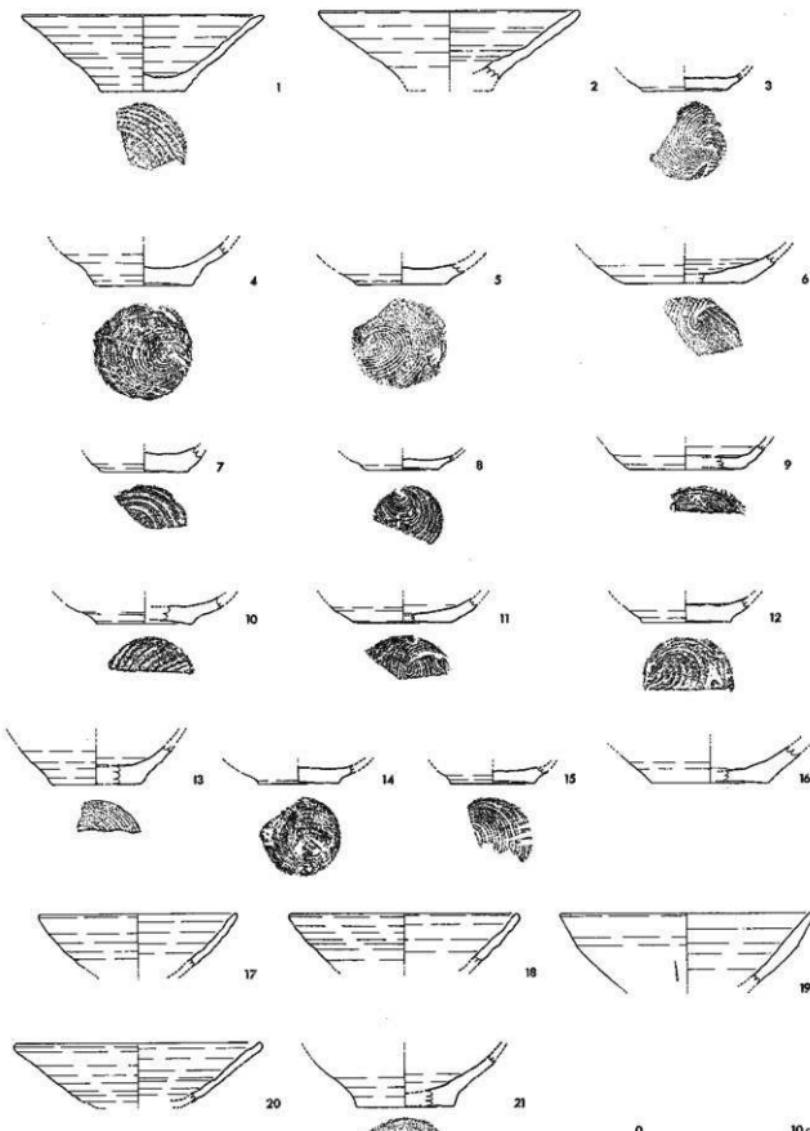
遺構の性格としては、中央最深部から板材や杭を検出していることから、木枠組みの井戸として利用されていたと考えられる。そして、遺物の出土量から考えると、井戸を廃棄する際に大量の土器を投入し、祭祀を行っていた可能性が高く、その後、人為的に埋めたものと考えられる。また、出土遺物から考えると遺構が築かれた時期は11世紀後半から12世紀代と考えられ、遅くとも13世紀代に



第20図 SK06実測図

第21图 SK06遗物出土状况实测图





第22図 SK06出土遺物実測図(1)

は利用されなくなったものと考えられる。

S K 0 6 の出土遺物（第 22 ~ 24 図）

S K 0 6 からは、平安時代末頃の土師器壺が最も多く出土しているが、その他、土師器小皿・甕・高壺・須恵器壺・白磁碗・鉄器・砥石なども検出されており、バラエティーに富んでいる。その中にはほぼ完形の状態で出土し、全体の形状が把握できるものがある。

第 22 図 - 1 ~ 21 は土師器壺である。1・2 は器高が低く、口径に対して底径が小さくなり、体部が逆「ハ」の字状に大きく開く。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。

1 は、底径 6.2 cm、口径 14.8 cm、器高 4.75 cm を測り、体部には回転水引き痕が明瞭に残っている。これらの特徴をもつ壺は、斐川町西石橋遺跡墓壙出土土器、出雲市藤ヶ森遺跡（I 地点）S K 0 1 出土土器に形状がよく似ており、12世紀代のものと考えられる。

3 ~ 16 は底部から体部にかけての破片であり、全体の形状は把握できないが、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。この中には底部回転糸切り後、一部にヘラ状工具による調整が認められるもの（4・6・15）もある。

17 ~ 20 は、口縁部から体部にかけての破片で、内外面とも回転ナデにより調整されている。18・20 は 1・2 と同様に器高が低く、口径に対して底径が小さくなり、体部が逆「ハ」の字状に大きく開くタイプのものであろう。

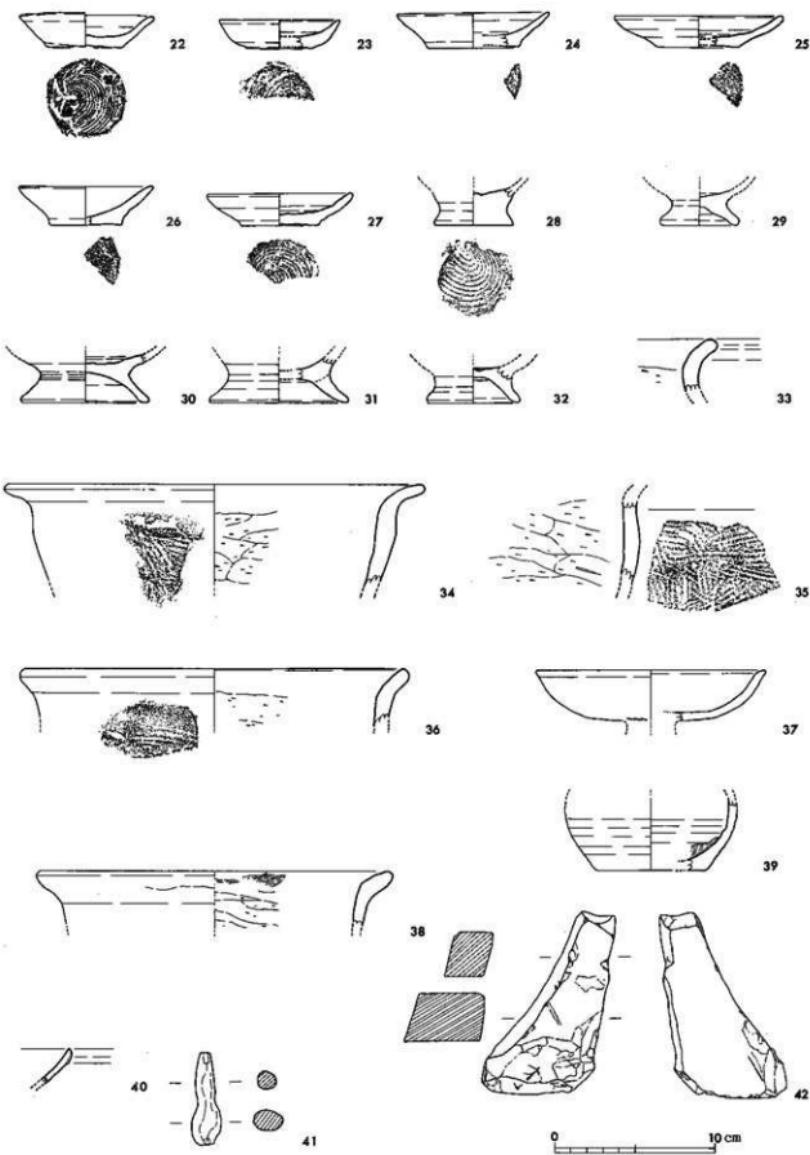
21 は、非常に硬質で焼成が良好であり、一見すると須恵器のようにも見える土師器壺である。やや内湾ぎみに立ち上がり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されているようである。平安時代～鎌倉時代にかけての土師器壺には多くのバリエーションがあり、編年が確立されてはいないが、S K 0 6 からは 11 世紀後半から 12 世紀代の玉縁状の突帯が付く白磁が出土していることを考えると、これらの土師器壺はおおよそ当該期の遺物であると考えられる。

第 23 図 - 23 ~ 27 は、土師器の小皿である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによって切り離されている。22 は完形で、底径 4.6 cm、口径 8.0 cm、器高 2.1 cm を測り、外面口縁部にはスヌが付着している。23 は、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。24 ~ 26 は、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、27 はやや内湾ぎみに立ち上がる。以上のような小皿は、その出現が 11 世紀後半頃と考えられることから、それ以降のものであろう。

28 は、台付の土師器壺である。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りによつて切り離されている。なお、台付の壺は、12世紀後半以降に出現する器形である。

29 ~ 32 は、足高高台をもつ土師器壺である。いずれも内外面は回転ナデにより仕上げられているが、高台部が大きく外傾するもの（29 ~ 30）、外傾するが、外観的には直立に近いもの（32）に類別できるが、これらの特徴からは時期的判断は難しい。なお、このタイプの壺は、11世紀後半以降に出現する器形である。

33 ~ 36 は、土師器甕であろう。いずれも外面はタタキ、内面頸部下は強いケズリによって調整され、外面全体にスヌが付着している。33・36 は口縁部は外方へゆるく屈折し、口縁端部は丸くおさめている。34 は、口縁部が外方へ強く屈折している。以上のような形態的特徴をもつ甕は、出雲



第23圖 SK06出土遺物實測圖(2)

地域では類例が少ないが、頬原町中原遺跡では外面はタタキ、内面はケズリの後ナデによって調整されている壺が出土しており、旭町重富遺跡では外面タタキ、内面はカキメによって調整されている壺が出土している。これらの壺は、北陸系の長胴壺によく似たタイプの土器で、叢入品の可能性もあるう。

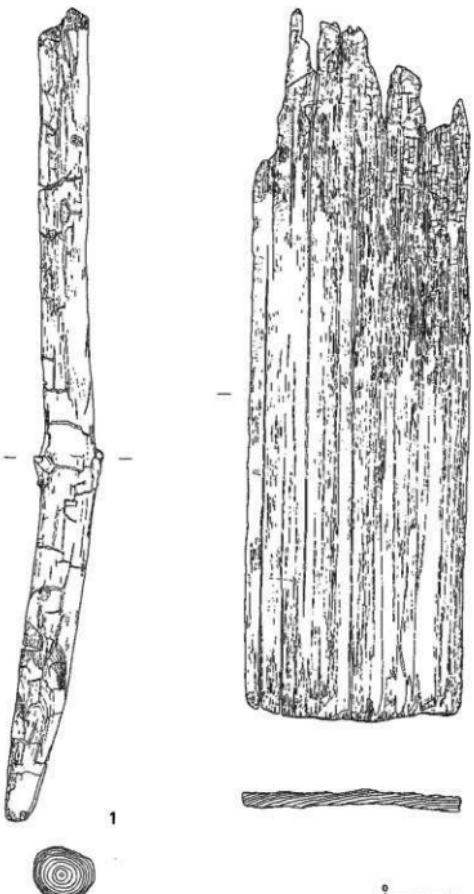
38は、当地方では一般的にみられる土師器壺で、口縁部内外面はナデによって調整（一部ハケ）され、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。以上（33～36・38）のような壺は、他の出土遺物から考えると、おおよそ11世紀後半から12世紀代にかけてのものであろう。

39は、須恵器壺の底部である。底径6.6cmを測り、内面底部には自然釉がかっている。このタイプの壺は、松江市池の奥⁽⁷⁾2号墳周溝内土壙、長峯⁽⁸⁾遺跡などからも出土しており、おおよそ10世紀～11世紀代にかけてのものであろう。

40は、白磁碗である。外面口縁部に玉縁状の突帯を有しており、その特徴から、11世紀後半から12世紀代にかけての資料であろう。

41は、用途不明の鉄製品である。現状では鋳化しており、最大長5.0cm、最大幅1.9cm、重さ11gを測るが、X線写真から観察すると径4mm程度の円管状を呈しているようである。なお、両端を欠損している。

42は、砥石である。片端をわずかに欠損し、広い方の二面に使用痕が認められるが、片面は全面



第24図 SK06出土遺物実測図(3)

を使用したものではなく、約1/4は自然面が残っている。石材には細粒の安山岩を用いている。

この他、SK06からは木製品も出土している（第24図）。いずれも中央最深部から出土しており、木枠組みの井戸の部材として利用されたものと考えられる。

1は、棒木の副本として用いられた杭であろう。片端は欠損しているが、現状では長さ67cm、最大径4.3cmを測り、表面は樹皮を剥いた状態であるが、下端部は削り出して杭状に加工している。なお、この杭は横たわった状態で出土している。

2は、井戸の側板として用いられたものであろう。ほぼ完形の状態で、片端はほぼ平坦に削られ、最大長58cm、最大幅18cm、最大厚1.2cmを測る。なお、この板材はほぼ直立した状態で出土している。以上のようにSK06からは多くの遺物が出土しているが、形状などから若干前後するものもあるうが、おおよそ11世紀後半から12世紀を中心とした範疇に入る資料と考えられる。

古代から中世にかけてのその他の遺構

この時期の遺構としては、前述した他にはSK02と同様に灰白色粘質土上面で検出した溝状遺構1（SD05）、落ち込み状遺構3（SX02～SX04）、ピット状遺構8（P1～P3・P5～P9）を検出している。これらの遺構の上面は何度かの削平を受けているものと考えられ、遺構の残存状況もあまり良くない。遺物も全く出土しておらず、時期的な判断は難しいが、層位的には平安時代末期の遺構である土坑状遺構（SK03～SK06）の上面で検出していることから、少なくともそれ以前、中世に築かれた遺構である可能性が強いのではないだろうか。

また、SD05とSX02～SX04については、上面が削平を受けていることを考えると同一の溝状遺構であった可能性もあるう。

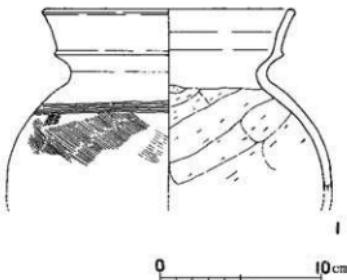
(3) 弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての遺構

弥生時代から古墳時代前期初頭にかけての遺構は、溝状遺構8（SD03・SD04・SD07～SD12）、落ち込み状遺構2（SX04・SX05）を検出しており、遺構内からは多量の遺物が検出されている。また、大規模な溝状遺構も検出され、第7次発掘調査によって検出された溝状遺構とともに環濠として機能していたことも考えられ、貴重な資料となっている。

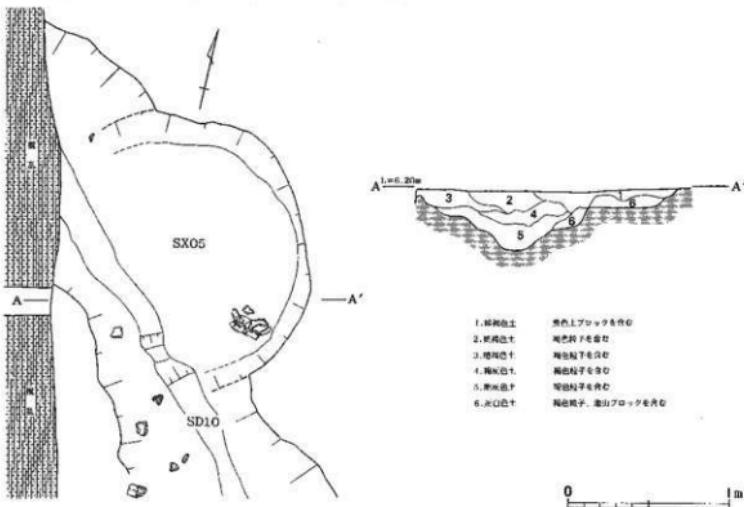
SX05（第26図）

B5Grの黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した落ち込み状遺構である。西側はガス管理設のために攪乱を受けている。また、SX05よりも古い遺構であるSD10との土層の見極めが困難であったことから、全体の形状が把握できなかった。しかし、土層断面から推察すると、平面プランは径約1.75mのほぼ円形を呈していたものと考えられる。なお、検出高は標高6.18mである。

第26図の土層断面をみると、1層～3層までがSX05の覆土と考えられ、上層には黒色土ブロックを含む暗褐色土が堆積し、その下層には褐色粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ち、底面はほぼ平坦に作



第25図 SX05出土遺物実測図



第26図 SX05実測図

り出しているようである。

遺物には古式土師器の壺が1点出土しているのみで、造構の性格は不明であるが、築かれた時期について古墳時代前期初頭と考えられる。

S X 0 5 の出土遺物（第25図）

古式土師器が1点出土しているのみである。複合口縁部の壺1は、口縁部から体部にかけての破片であり、口径15.4cm、残存高11.4cmを測る。口縁部は内外面ナデ、頸部下外面は6条の直線文と斜め方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。また、口縁端部はやや外方に折り曲げ、ナデで凹面を作っている。複合口縁部の稜は水平方向に向いているが、やや鋭さを欠く。このような壺は、鹿島町南講武草田遺跡の7期に相当する資料であり、古墳時代前期初頭のものであろう。なお、当該期の壺は第7次発掘調査のSD04からも検出されている。

SD03（第27図）

調査区の南側、A1GrからB3Grにかけて、黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東—西北西の方向に伸びる溝状造構である。西側は水道管、ガス管埋設のために攪乱を受けているが、南側、北側ともに調査区外へとさらに伸びている。

検出した状況では、長軸15.0m以上、最大幅2.0m、狭い所でも約1.2mを測る。なお、検出高は標高約6.30mである。

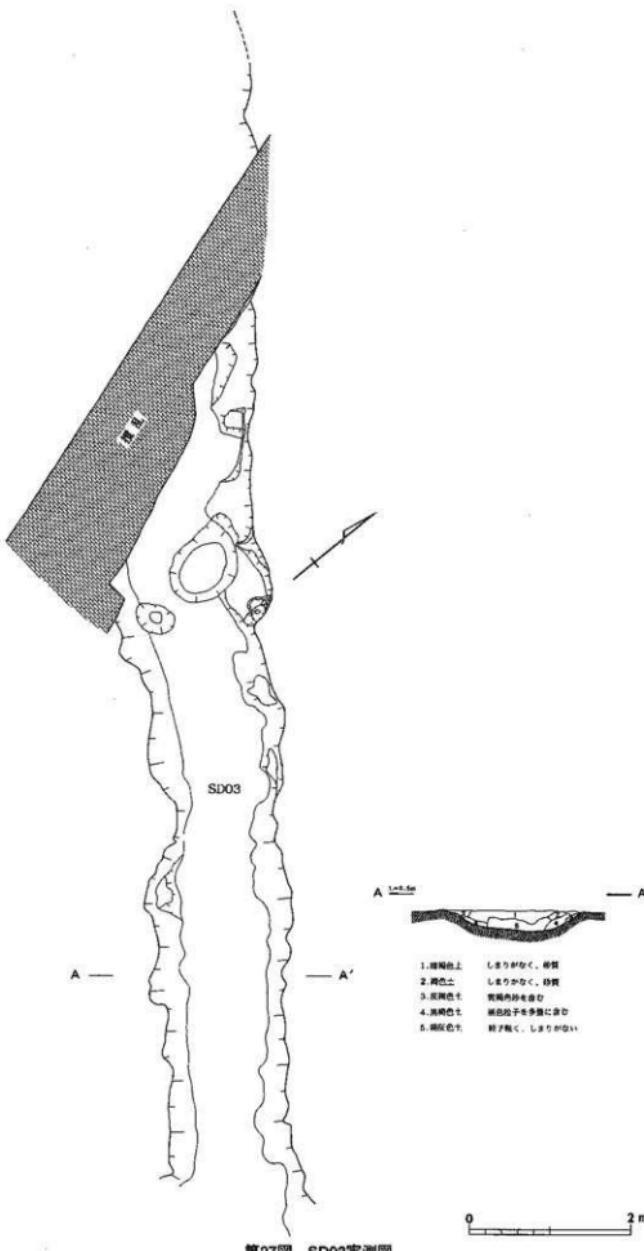
覆土には、上層に暗褐色・褐色の砂質土が堆積し、下層には粒子が粗い褐灰色土が堆積して最深部は地山である黄褐色シルト質土に達する。断面の形状は、両肩からやや緩やかに落ち、底面はレンズ状に丸く作り出している。最深部までの深さは約46cm、浅い所でも約24cmの深さがある。

全体の形状は、A1Grの南側とB2Grの南側付近で溝の幅が広くなっている。A1Grの北側でやや狭くなっている。また、B2Gr南側の造構底面にはピット状の造構が2穴掘り込まれ、そのうちの1つは径約80cm、深さ約55cmもあるが、出土遺物もなく、性格は不明である。なお、B2GrではSD03よりも古い造構であるSD04と切合関係にある。

遺物の出土状況をみると、造構の南側（第28図）では標高5.85mから6.55mの範囲に上層から下層にかけてほぼ平均して多量の遺物が出土している。位置的にみると、南側にやや遺物が多い傾向にある。しかし、これらの遺物の中には弥生時代中期頃の遺物を中心ではあるが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も若干検出され、層位的にも底面直上からの検出もあることは注意される。

一方、造構の北側（第29図）では標高5.8mから6.42mの範囲に遺物が認められている。南側での出土状況と比べると出土量は少ないが、位置的には平均して遺物が認められている。また、層位的には上層よりも下層から多く遺物が検出されている。

造構の性格は判断し難いが、覆土には砂質土系の土が堆積していることから、水路のように當時水が流れていた状態とは考えにくく、空濠のような状況であったことが推測される。そして、幅が約2.0mと規模も大きいことから、集落を囲繞する環濠として機能していたことも考えられる。



第27図 SD03実測図



第28図 SD03遺物出土状況実測図（南側）

第29図 SD03遺物出土状況実測図（北側）



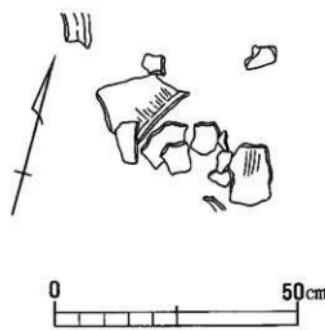
遺構が築かれた時期については、出土遺物から考えると弥生時代中期中葉頃の遺物が圧倒的に多いことから、当該期に築かれたものと考えられる。しかし、機能していた時期については、弥生時代後期の遺物が皆無であるにも関わらず、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土しており、判断し難い。推測するとすれば、弥生時代中期中葉頃に築かれた溝状遺構が後期には機能しなくなり、その後弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて再び同じ箇所を掘り直して利用されたのではないだろうか。そして、古墳時代前期中頃までには再び機能しなくなつたと考えられるのではないかだろうか。

土器群1（第30図）

本格的な発掘調査を開始する前に、下層からの湧水や雨水を排水するため、幅40cm、深さ30cmほどの側溝を調査区の4面に掘り下げているが、南に設定した側溝から検出された土器群である。

発掘調査によって検出した遺構の配置から考えると、弥生時代中期中葉頃に築かれた遺構であるSD03と同じ方向にあり、覆土もSD03の5層と同様の粒子の粗い褐灰色土中から検出されたことから、同一の溝状遺構の一部であると考えられる。

遺物は、約50cm×40cmの幅の間に重なり合うような状況で2個体以上の土器が出土している。いずれも弥生時代中期中葉頃の資料であり、時期的にもSD03が築かれた時期と一致するものである。



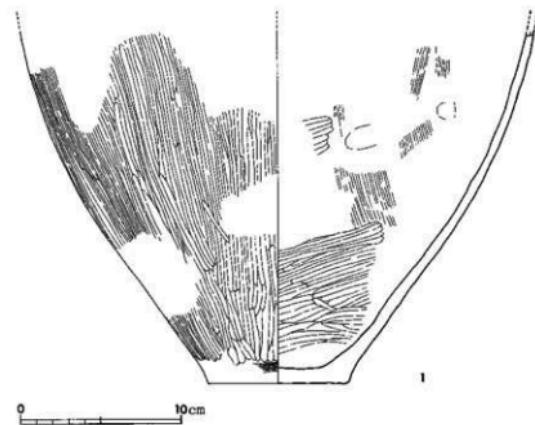
第30図 土器群1（SD03）実測図

土器群1の出土遺物

(第31図)

土器群1から出土した土器は、そのほとんどが接合可能なうえ、形態的にも特徴があつて貴重な資料となっている。

1は、弥生土器の壺あるいは壺の底部から胴部にかけての破片で、底径8.6cm、残存高22.7cmを測る。底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がり、胴部付近は内湾し



第31図 土器群1（SD03）出土遺物実測図

て倒卵形になるもので、外面はタテ方向のミガキによって調整され、内面底部付近から胴部下半にかけては横方向のミガキ、胴部中央付近は斜め方向のハケによる調整が行われている。なお、外面胴部にはススが付着しており、焼成は非常に良好である。

このように内面底部から胴部にかけて、ヨコ方向のミガキによって調整されるタイプの土器は出雲地域には珍しい。SD 03 の出土遺物から考えると弥生時代中期中葉頃の遺物であると考えられるが、形態的には弥生時代前期末の系譜を引くものと考えられ、やや古い様相を示すものであろう。松本編年では II-1 様式から III-1 様式の範疇に相当する資料ではないだろうか。

なお、このような形態的特徴をもつ壺あるいは甕は、松江市タテチョウ遺跡¹¹⁾、西川津遺跡¹²⁾などで少量ながら出土している。

SD 03 の出土遺物（第 32 図～第 34 図）

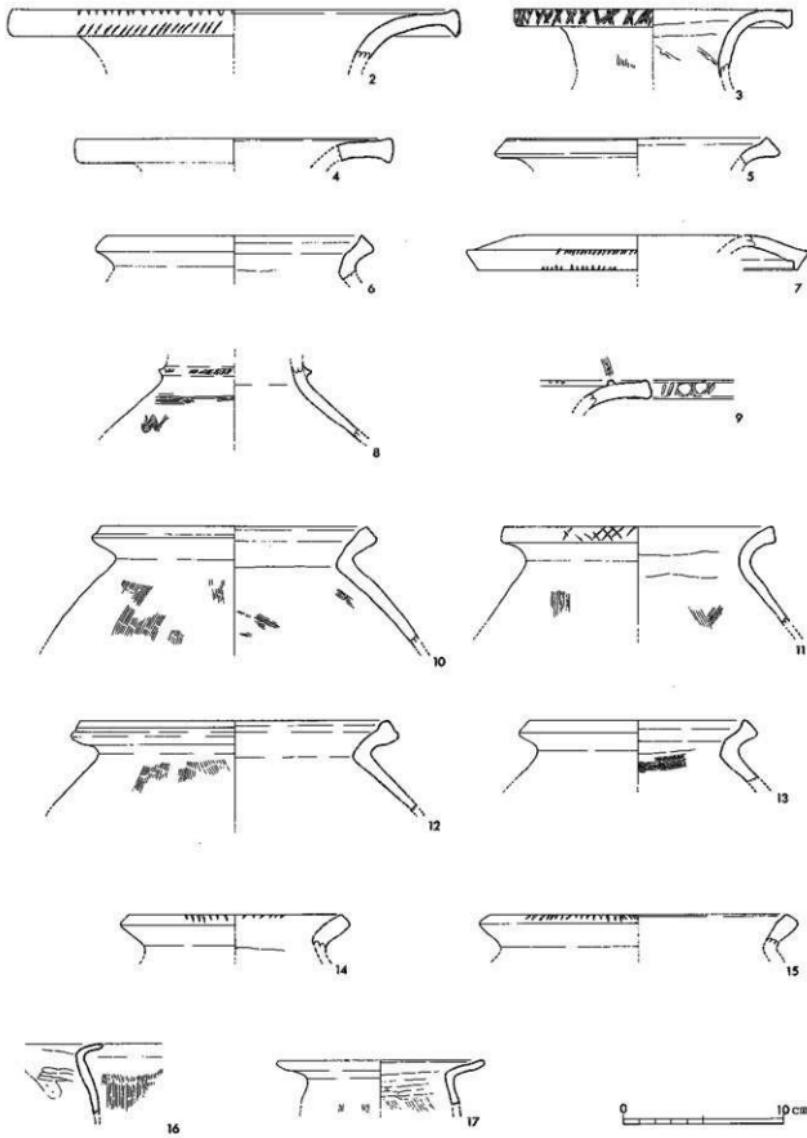
弥生時代中期中葉頃の遺物には、壺・甕がある。その中には珍しい形態的特徴をもつものも含まれており、貴重な資料となっている。

第 32 図 - 2 ~ 4・7 ~ 9 は弥生土器の壺である。2 は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張し、口縁端部の両端には刻目文が施されている。3 は、形態的には 2 と同様であるが、口縁端部は 2 本単位からなるクシ状工具によって斜格子文を施している。頸部外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。4 は、口縁部内外面はナデによる調整が行われ、口縁端部は無文で、上下にわずかに拡張している。7 は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部の両端には刺突による刻目文が施されている。8 は、壺の頸部から胴部にかけての破片であるが、外面頸部には刻目文で飾った三角形文帯を貼付け、胴部には 6 本単位からなるクシ状工具によって直線文・波状文が施され、内面はハケによる調整が行われている。9 は、口縁端部がわずかに上下に拡張し、口縁端部を刻目文・円形浮文で飾っている。また、口縁内面には刻目文を施した三角形文帯を貼り付けている。

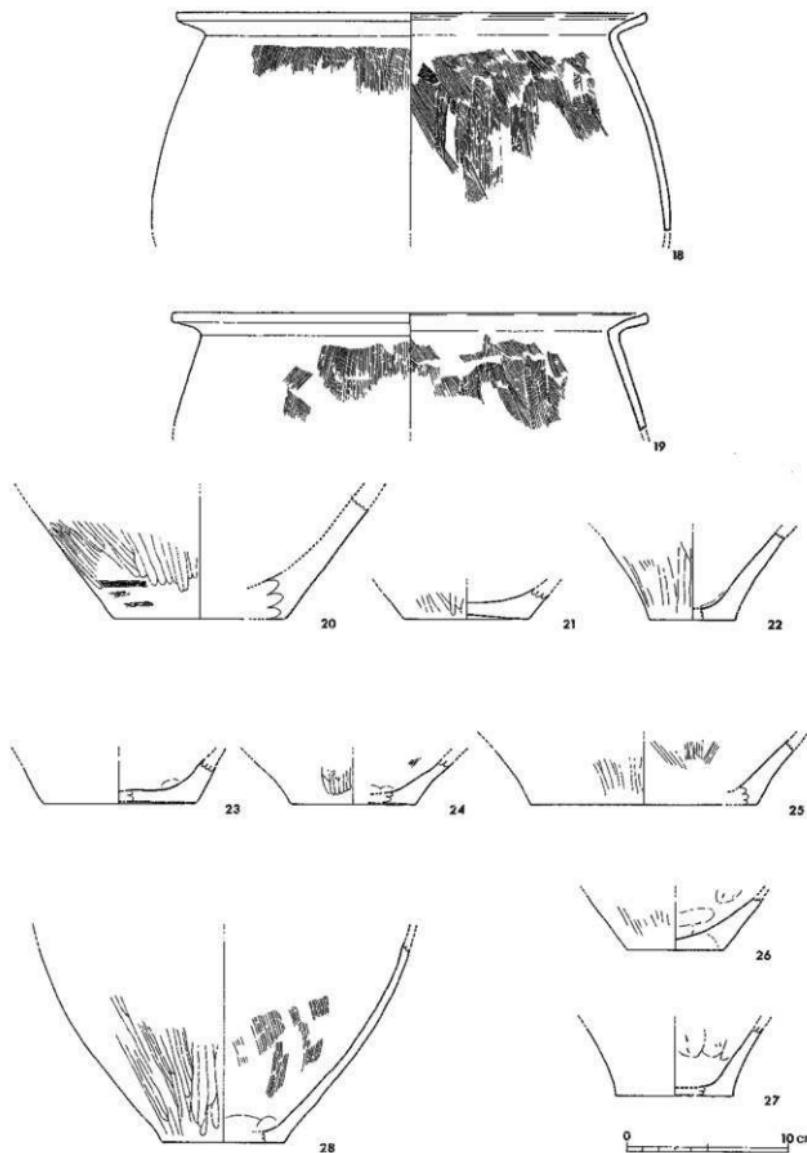
以上のような特徴をもつ壺は、おおよそ松本編年 III-1 ~ 2 様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第 32 図 - 5・6・10 ~ 17、第 33 図 - 18・19 は、弥生土器の甕である。5・6 は、口縁部が外方に短く屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張して平坦面を作っている。10 も形態的にはほぼ同様であるが、外面頸部下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケにより調整されている。11 は、頸部から緩やかに屈折して端部に平坦面を作り、クシ状工具によって斜格子文を施している。外面頸部下は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによる調整が行われている。12・13 は、口縁部が外方に強く「く」の字状に屈折し、口縁端部が上方に拡張して平坦面を作っている。12 は、外面頸部下には縦方向のハケ、内面はナデによって調整され、13 は内外面ともナデにより調整されている。14・15 は口縁部の破片であり、いずれも口縁端部には平坦を作るあまり拡張はしない。口縁端部の平坦面には斜線文・端部内面には刺突による刻目文が施されている。

16 は、口縁部の厚みが薄く、鋭く「く」の字状に屈折して口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデにより調整されているが、外面頸部下は縦方向のハケ、内面はケズリの後、横方向



第32図 SD03出土遺物実測図(1)



第33図 SD03出土遺物実測図(?)

のミガキ・ナデによって調整されている。17も形態的にはほぼ同様であるが、内面頸部下は横方向のミガキ・斜め方向のハケによる調整が行われている。なお、外面にはススが付着している。

第33図－18・19はやや大形の壺である。18は、口縁部が外方に強く屈折して口縁端部は上方に拡張し、平坦面を作っている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによる調整が行われている。19も形態的にはほぼ同様である。18・19は胴部が張り出すタイプのものであろう。

以上のような特徴をもつ壺は、壺と同様におおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、時期としては弥生時代中期中葉のものであろう。

第33図－20～28は弥生土器の壺あるいは壺の底部付近の破片である。20は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、一部は細かいハケによって調整されている。21は、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによって調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が残っている。24は、内面底部付近に指頭圧痕が残り、一部にはハケによる調整が行われている。25も同様で、内面は縦・斜め方向のハケによる調整が行われている。26・27は、内面底部から胴部にかけて縦方向のケズリによる調整が行われ、27は直立ぎみに立ち上がっている。28は、底部から胴部にかけてのやや大きめの破片であるが、外面は縦方向のミガキ、内面は縦・斜め方向のハケによって調整されている。

第34図－29は、外面は一般的な縦方向のミガキによって調整されているが、内面も横方向のミガキによる調整が行われている。30も内面の一部に斜め方向のミガキ、やや上方にハケによる調整が行われている。内面をミガキによって調整されるタイプの土器は、土器群1からも出土しているが、この時期の遺物としては珍しい。なお、30は外面にススが付着している。

以上のような壺あるいは壺は、29・30などやや古い系譜を引くものもあるものの、おおよそ松本編年Ⅲ－1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

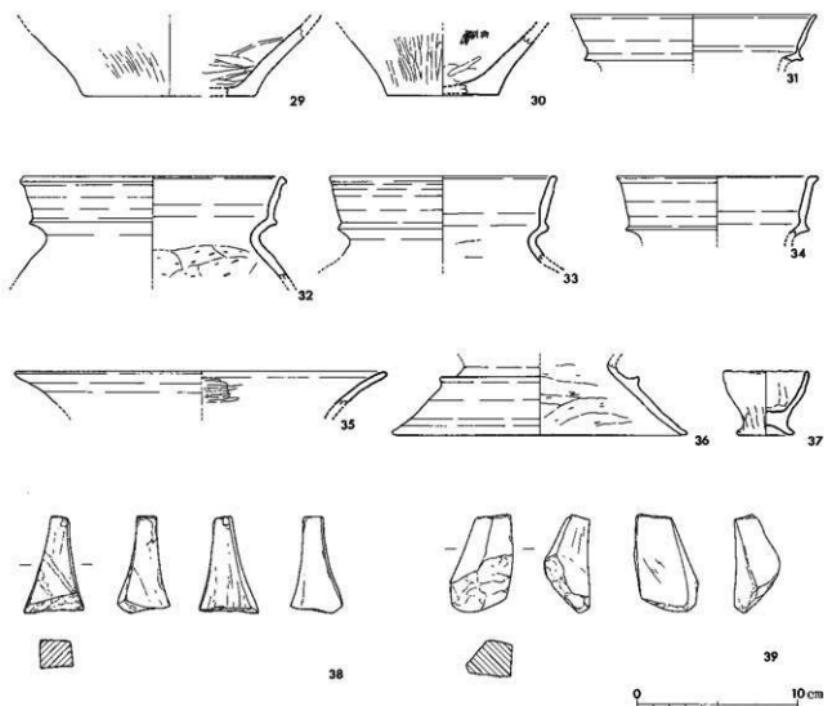
S D O 3からは、前述したような弥生時代中期中葉頃の遺物のほか、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も確認されている。

第34図－31～34は、複合口縁を有す古式土師器の壺である。31は器壁が薄く、複合口縁の稜が水平方向に鋭く突出し、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。草田編年では5期に相当する資料であろうか。

32は器壁はやや厚く、口縁端部を外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁部の稜は水平方向に向いている。33は、口縁端部をわずかに外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁部の稜は水平方向に突出するがやや鋭さを欠く。口縁部内外面はナデによる調整が行われ、外面頸部下は横ナデ、内面はケズリにより調整されている。34も32とほぼ同様な形態をもっている。32～34の壺は、その特徴から草田編年7期に相当する資料と考えられる。

35・36は、古式土師器の器台である。35は受部の破片で、外面はナデ、内面は横方向のミガキによって調整されている。36は、筒部から脚部にかけての破片である。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に鋭く突出している。

37は、ほぼ手捏ねによって仕上げられたミニチュア土器で、御猪口のような形状をしている。外面付近の一部には縦方向のミガキ、内外面全体に小さく間隔の狭い指頭圧痕が残っている。



第34図 SD03出土遺物実測図(3)

35～37については時期的判断は難しいが、SD03から出土している古式土師器から考えると、およそ草田5期～7期の範疇に入る資料であり、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

38・39は砥石である。38は両端とも欠損しているが、現存長5.8cm、最大幅3.8cm、最大厚2.5cm、重さ47gを測る。片端は使用によって厚さ1.15cmほどに擦り減っており、4面ともに使用痕が残っている。なお、石材には流紋岩質凝灰岩を用いている。39も両端が欠損しているが、現存長6.0cm、最大幅3.0cm、最大厚2.5cm、重さ55gを測る。片端は使用によって厚さ1.45cmほどに擦り減り、全体の5面に使用痕が残っている。38と同様に石材には流紋岩質凝灰岩を用いている。なお、砥石については時期的判断が難しい。

以上のように、SD03からは多くの遺物を検出しており、その大半が弥生時代中期中葉頃の遺物であるが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も認められている。しかし、その間の弥生時代後期の遺物が皆無であることは、SD03が機能していた時期を考えるうえで注視する必要がある。

SD 04 (第35図)

調査区の南側、A 1GrからB 3Grにかけて、黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東ー西北西の方向に伸びる溝状遺構である。A 1Grでは近世の遺構と考えられるSX 01に切られ、B 2Grでは弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての遺構であるSD 03に切られている。また、西側は水道管・ガス管理設のために擾乱を受けているが、南北ともに調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では、長軸10.0m以上、最大幅約1.80m、狭い所でも約1.52mを測る。なお、検出高は標高約6.30mである。

覆土には、上層から下層にかけて褐色系の砂質土が堆積し、最下層には灰白色のシルト質土が堆積しているが、この層位からも多くの遺物が確認されている。また、中層には炭化物のような黒色粒子を含む層や地山ブロックを含む層が部分的に認められる。なお、最深部は地山である黄褐色シルト質土に達する。断面の形状は部分的にやや異なるが、遺構の南側では東肩部は鋭角に、西肩部は約45度の角度で落ちているが、半ばあたりでなだらかな段を作つて再び底面に向かって鋭角に落ち、底面はほぼ平坦に作り出している。一方、遺構の北側では、東肩部はやや鋭角に落ちて一旦平坦面を作り、再び底面に向かって鋭角に落ちているが、西肩部からは約30度の角度で落ち、底面はほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは約52cm、浅い所でも約36cmの深さがある。

全体の形状は、遺構の南側と北側付近で溝の幅が広くなつておらず、A 2Gr付近ではやや狭くなっている。なお、A 2Gr北側からB 3GrにかけてはSD 03によって切られているため、遺構上面における形状は判断できない。

遺物の出土状況をみると、遺構の南側（第36図）では標高6.00mから6.50mの範囲に遺物が認められる。層位的には上層よりも中層・下層から多くの遺物が出土しており、位置的にはほぼ平均して遺物が認められている。

一方、遺構の北側（第37図）では標高5.82mから6.68mの範囲で遺物が認められている。南側と比較するとSD 03によって切られていることもあるが、総じて出土量は少なく、層位的には中層から下層にかけての出土量が多く、位置的にはほぼ平均して遺物が認められている。

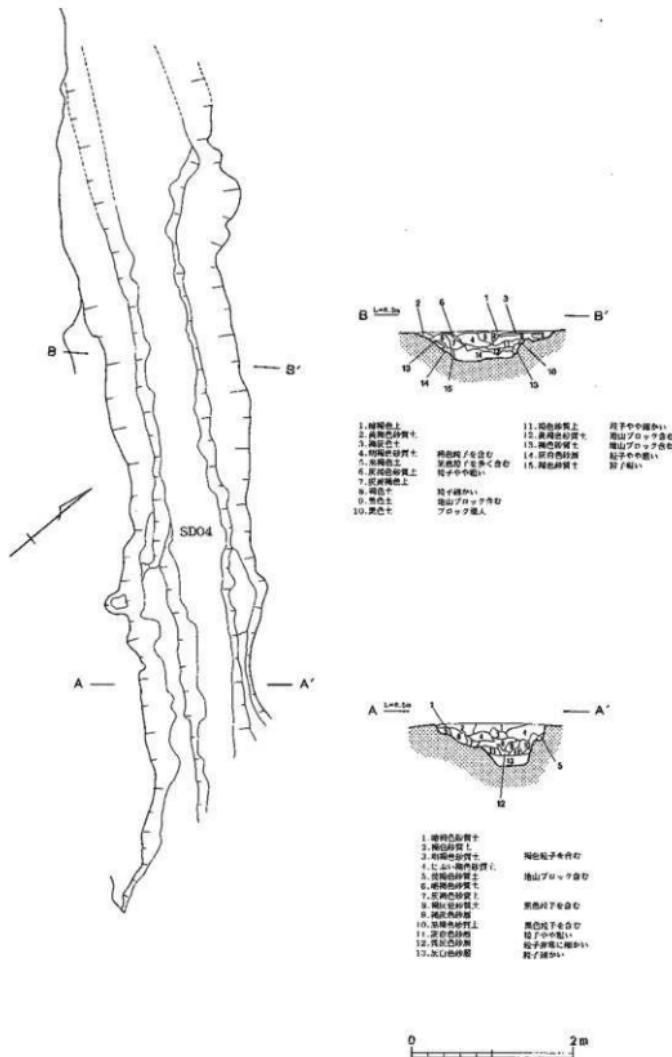
遺構の性格は判断し難いが、前述したSD 03と同様に覆土には砂質系土が堆積していることから、水路のように當時水が流れていた状態とは考えにくく、空濠のような状況であったと考えられる。そして、幅が約1.8mと規模も大きいことから、集落を囲繞する環濠として機能していた可能性も考えられる。

遺構が築かれた時期については、出土遺物には弥生時代中期頃の遺物しか認められていないことから、当該期に築かれ、機能していた期間も比較的短期間であったものと考えられる。

SD 04の出土遺物（第38図～第41図）

SD 04からは弥生時代中期中葉頃と考えられる遺物のみが出土しており、その中には弥生土器の壺・甕・鉢や石器が出土している。

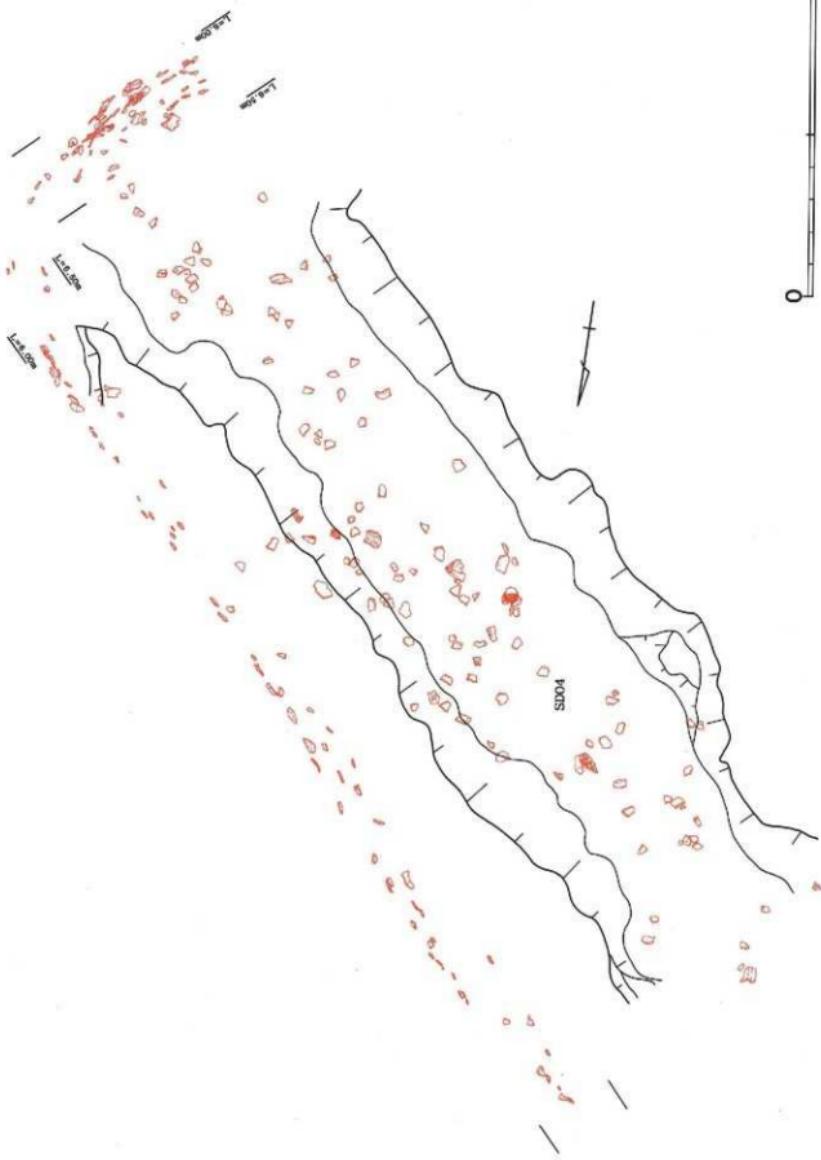
第38図-1～8は、弥生土器の壺である。1は、口縁部が短く外反し、口縁端部はわずかに拡張するが無文である。頸部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケによる調整が行われている。2は、



第35回 SD04実測図

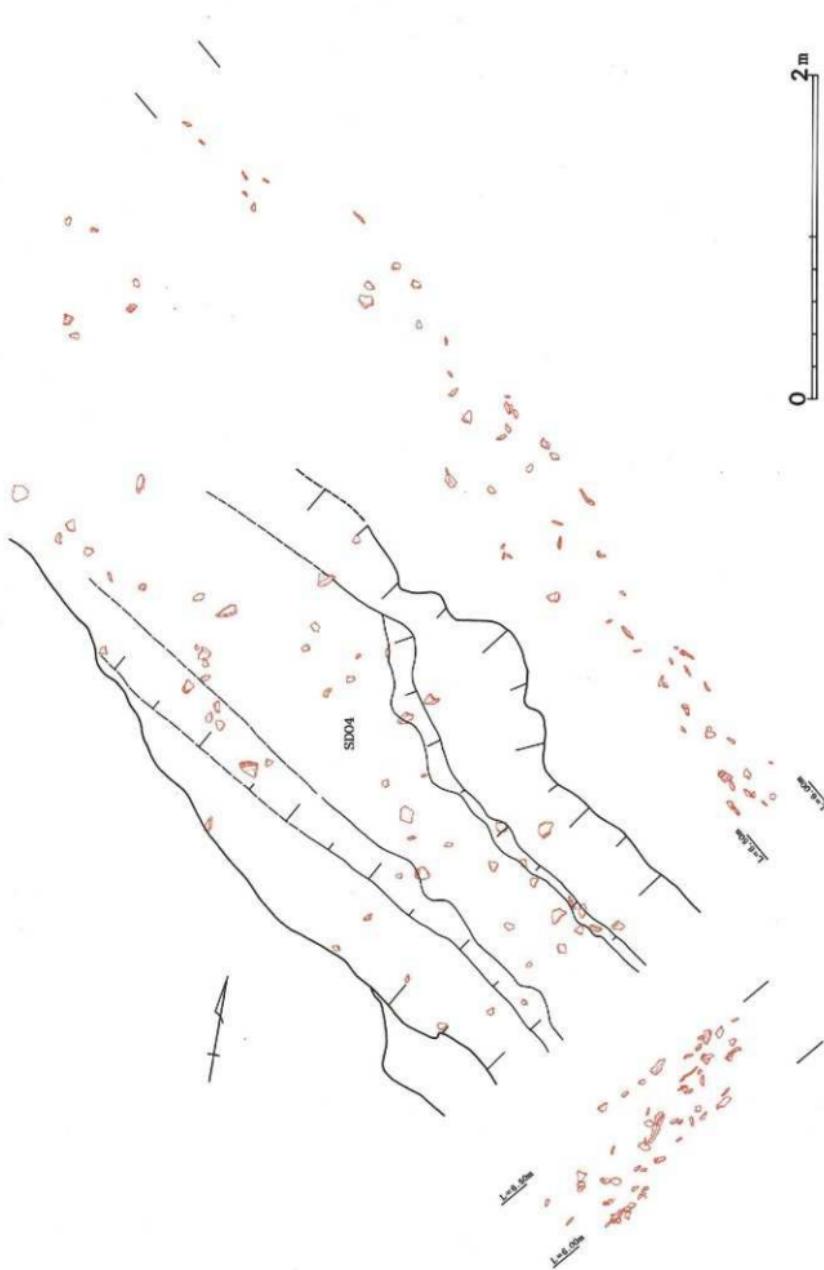
0 2m

第36圖 SD04遺物出土狀況測量圖（南側）



0 2m

第37圖 SD04遺物出土狀況實測圖（北側）

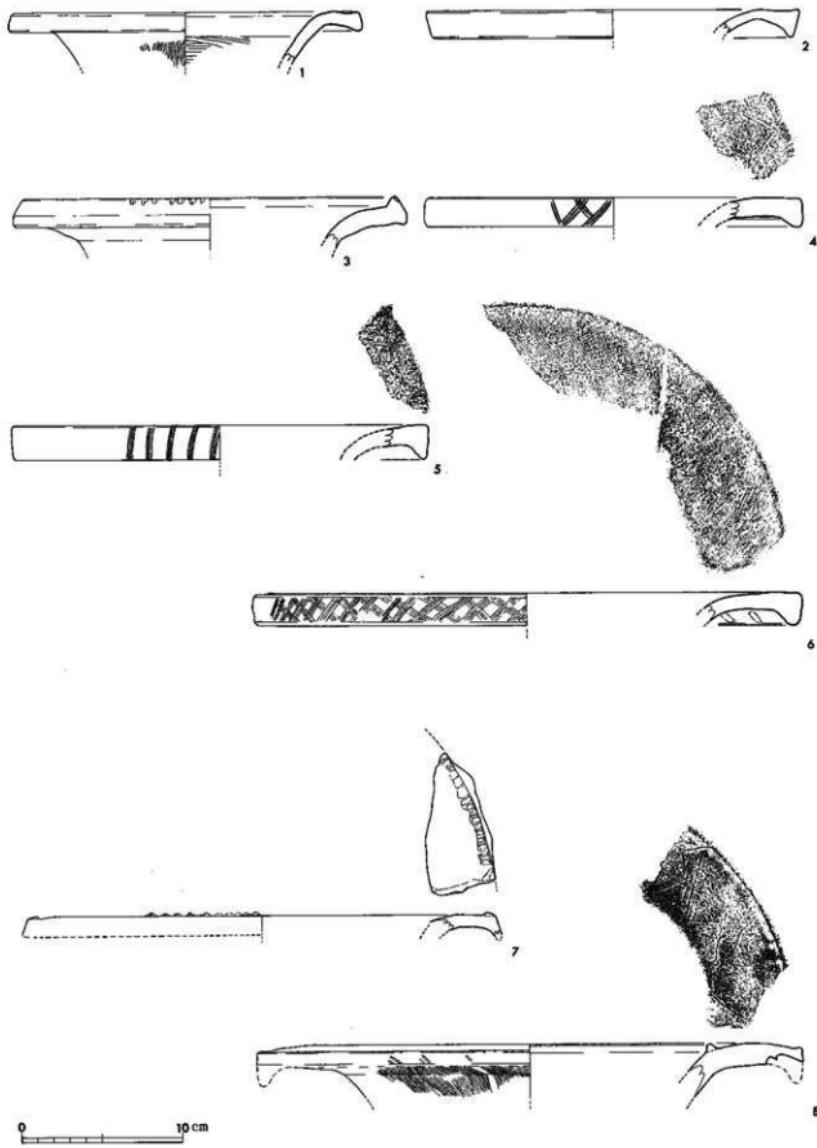


口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下にわずかに拡張するが無文である。3は、口縁部が短く外反し、口縁端部が上方に拡張して端部上方には刺突による刻目文を施している。このようなタイプの土器は、出雲地域ではあまり類例がない。4は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部の内外面には3本単位のクシ状工具により斜格子文を施している。5も口縁端部は下方にのみ拡張し、口縁端部には3本単位のクシ状工具による斜格子文、内面にも斜格子文を施している。6は、口径34.0cmを測る大形品であるが、口縁部は朝顔状に大きく開き、口縁端部は下方にのみ拡張している。口縁拡張部の内外面には3本単位からなるクシ状工具によって斜格子文を施し、内面にはさらに刺突による列点文が3列にめぐらされている。また、下方に拡張する口縁端部と頸部外面との境には指頭圧痕が明瞭に残っている。7は、朝顔状に開いた口縁部をもち、口縁端部の上方に指頭圧痕文帯を貼付け、口縁端部を上下に拡張させている。8は、朝顔状に開く口縁部に上下に拡張する口縁端部を有し、口縁拡張部の内外面には2本単位のクシ状工具によって斜格子文が施されている。また、口縁端部上方には刺突による刻目文、さらには内面に刻目文を施した三角形文帯を貼付けて飾っている。なお、頸部外面は縦方向のハケによる調整が行われている。

第39図-9は、口縁部が短く外反し、口縁端部は上方にのみ拡張するが無文である。頸部外面は縦方向のハケ、内面には指頭圧痕が明瞭に残っている。第38図-3と同様に出雲地域では珍しいタイプのものである。10は、わずかに外傾して伸びる長めの口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張している。口縁端部の両端からは貝殻による刻目文を施して「く」の字状の文様を作り出し、さらに円形浮文を貼付けている。頸部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のミガキによって調整されている。11・12は、壺の頸部から胴部にかけての破片である。11は、頸部に指頭圧痕文帯をめぐらし、外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整によって仕上げられている。12は、頸部に2以上の三角形貼付文帯をめぐらし、外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。この時期の壺は、指頭圧痕文帯や三角形文帯を貼付け、頸部と胴部には明瞭な境をもつてることが一つの特徴である。

以上のような壺は、おおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。しかし、これらの中には、出雲地域では類例の少ない第38図-3のような遺物が認められることは、今後も注視していく必要がある。また、当該期の天神遺跡から出土している壺の口縁部には、第38図-4・6・8のように斜格子文を施す例が圧倒的に多く、一つの地域性として「天神式」とでも呼称されるべきものではないだろうか。

第39図-13~22は、弥生土器の壺である。13は、口縁部がゆるく「く」の字状に外方に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して平坦面を作り、ヘラ状工具によって刻目文を施している。口縁部は内外面ナデ、外面頸部下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。14は、口縁部は13と同様に外方に屈折し、口縁端部に平坦面を作り出しているが拡張せず、無文である。頸部下の内外面には斜め方向のハケによる調整が行われている。15は、口縁端部がわずかに上下に拡張し、頸部下の内外面は縦方向のハケによって調整されている。16は、口縁部が鋭く屈折し、口縁端部は上下に拡張するが、特に上方に大きく拡張している。外面頸部下は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。17は、口縁部が外方に屈折し、口縁端部は上下に拡張す



第38図 SD04出土遺物実測図(1)

るが、拡張は上方により大きい。18は、口縁部が外方にゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部は拡張しない。19は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。20は、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面はナデによる調整が行われ、内面には凹線文状の凹みが認められる。21は、口縁部が外方に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下の外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによって調整されている。22は、壺の口縁部の小片であるが、器壁がやや厚く、口縁端部は拡張しない。

第40図-23～28も弥生土器の壺である。23は口縁部は外方に「く」の字状に屈折して口縁端部は拡張せず、やや丸くおさめている。頸部下外面はススの付着により調整不明であるが、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。24も形態的にはほぼ同じで、頸部下の外面は縦方向のハケ、内面はミガキによる調整が行われているようである。25は、口縁部は外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張するが平坦面は作らず、丸くおさめている。頸部下外面は斜め方向の細かいハケ、内面はやや間隔の広い斜め方向のハケによって調整されている。また、外面にはススが付着している。26は、壺のように口縁部が長く外方に開くが器壁は薄く、口縁端部は拡張せず丸くおさめている。27・28は壺の口縁部の小片であるが、口縁端部はやや上方に拡張するという特徴をもつ。

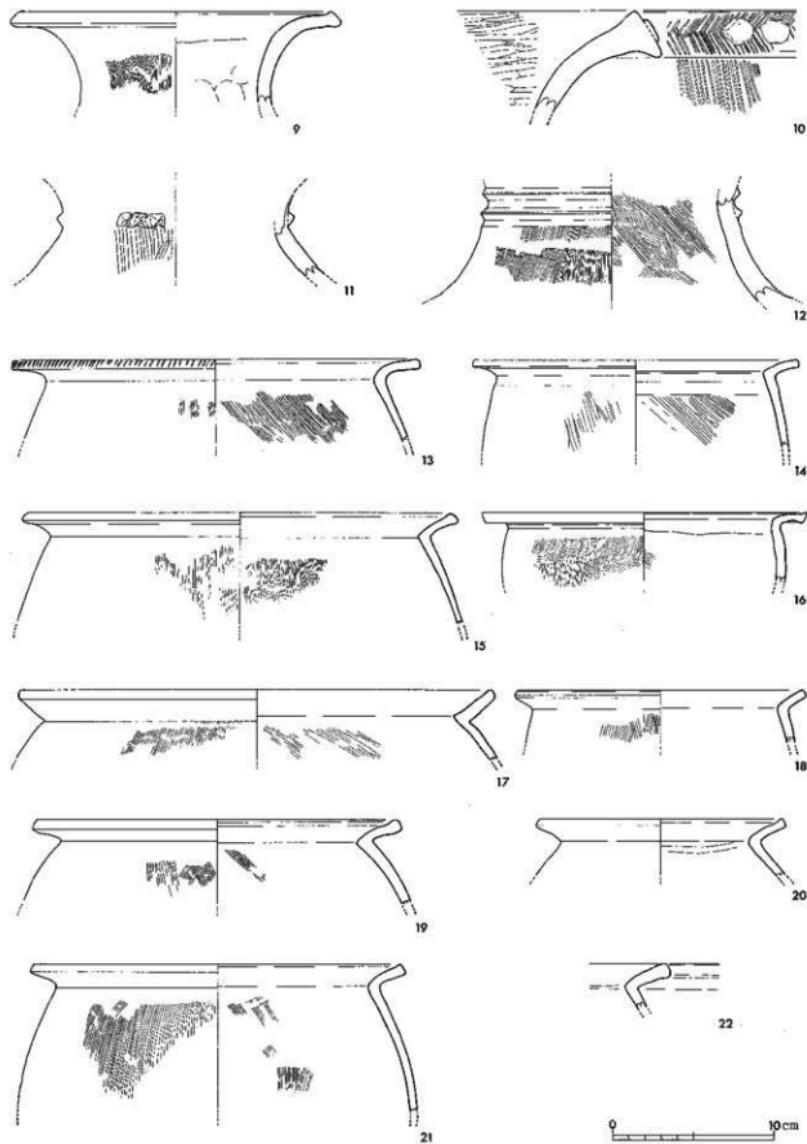
以上のような壺は、口縁端部が上下に拡張するものや上方のみに拡張するもの、拡張しないものなどがある。また、端部に平坦面を作るもの、丸くおさめるものなど様々な形態的特徴をもつものもあるが、おおよそ松本編年Ⅲ-1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第40図-29は、弥生土器の鉢であろうか。口縁端部にフラットな面を作り、外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。SD04から出土している壺・壺の形態から考えると、松本編年Ⅲ-1～2様式に相当する資料であろう。

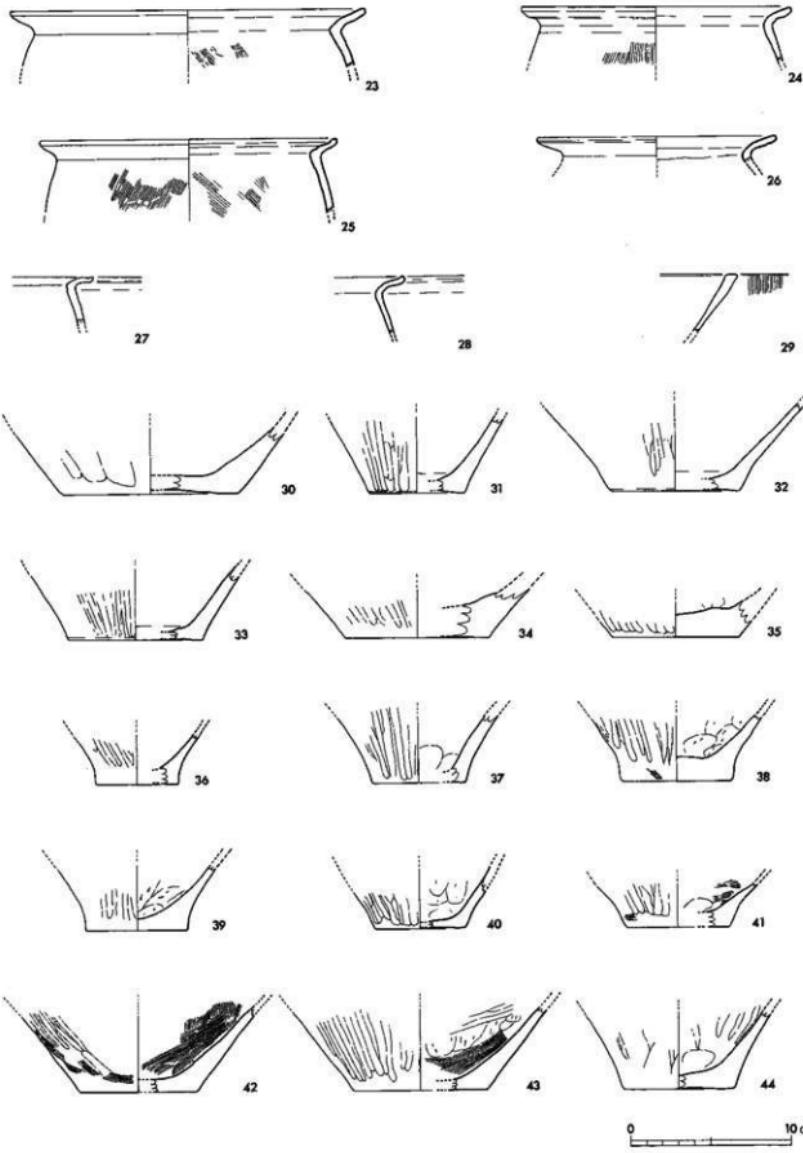
第40図-30～44は、弥生土器の壺あるいは壺の底部である。30は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、外面には約2cm幅のヘラ状工具によって押されたような痕跡が残っている。31は、底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面はナデによって調整されている。この時期の壺あるいは壺の底部から胴部にかけては、外面が縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われるのが一般的である。32～37についても同様であるが、35・37は内面底部付近には指頭圧痕が明瞭に残っている。また、36・37は底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がっている。38は、底径6.7cmを測る壺あるいは壺の底部である。外面は縦方向のミガキと一部には細かいハケ、内面はケズリによる調整が行われている。また、底部には長さ5mm、幅2mm程度の初のような痕跡が残っており、注意される。出雲平野では未だ確実な弥生時代の水田跡は検出されてはいないが、第7次発掘調査C区から出土した木製農耕具などとともに、遺跡内で稻作が行われていたことを証明する一資料である。

39・40は、外面は縦方向のミガキ、内面は縦方向のケズリによって調整されている。内面がナデによって調整されているものと比較し、時期的にはやや後出するものであろう。

41は、外面は縦方向のミガキと一部には横方向のハケ、内面の一部にも横方向のハケ調整が行われ、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。42は、外面を縦方向のミガキにより調整した後、一



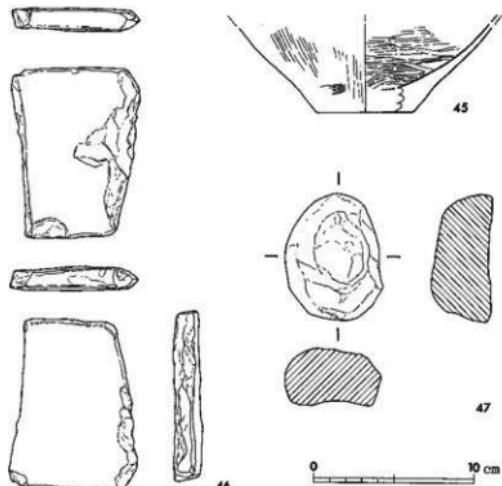
第39図 SD04出土遺物実測図(2)



第40図 SD04出土遺物実測図(3)

部をハケで消している。内面は全面にやや粗いハケによる調整が行われている。43は、外面は一般的な縦方向のミガキにより調整されているが、内面はケズリによる調整が行われた後、横方向のミガキがなされ、さらに一部にはハケによる調整が行われている。44は、外面は縦方向のミガキ、内面は刺突具で突いたような調整が行われ、剣状の文様を作り出している。このような土器は、後述するSD09からも出土している。

第41図-45も弥生土器の壺あるいは壺の底部から胴部にかけ



第41図 SD04出土遺物実測図(4)

ての破片であるが、形態的には非常に珍しい特徴をもつ。外面は、一般的な縦方向のミガキと一部には横方向のハケによって調整されているが、内面は丁寧な横方向のミガキによって調整されている。なお、このような特徴をもつ土器はSD03（第31図-1、第34図-29・30）からも出土している。

以上のように、壺あるいは壺の底部から胴部にかけての破片には、様々なバリエーションがあるが、SD04から出土している壺や壺の形態から考えると、おおよそ松本編年Ⅲ-1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。このうち、内面が横方向のミガキによって調整されるものはやや古い様相を示し、ケズリによって調整されているものはやや後出するものと考えられる。

SD04からは、弥生時代中期中葉頃の石器も数点出土している。46は片端が欠損しているが、最大長7.2cm以上、最大幅10.0cm、最大厚1.35cm、重さ161gを測る。両面ともに磨かれ、側面は面取りされている。また、片端には刃部を割り出そうとしたような痕跡があり、それ以外の部分は側面同様に面取りされた部分が残っている。用途は不明であるが、製品を転用しようとした未完成である可能性もある。なお、石材には頁岩を用いている。

47は、最大長7.8cm、最大幅5.85cmを測り、平面的には橢円形を呈し、最大厚3.50cm、重さ302gを測る石製品である。片面は割って平坦に作り出し、上面は円球状に形を整えている。また、円球状に加工した面には数箇所に打痕が認められ、赤く染まった部分が認められる。鑑定に出してはないが、朱を擦りつぶしたものとも考えられ、注目すべき遺物である。

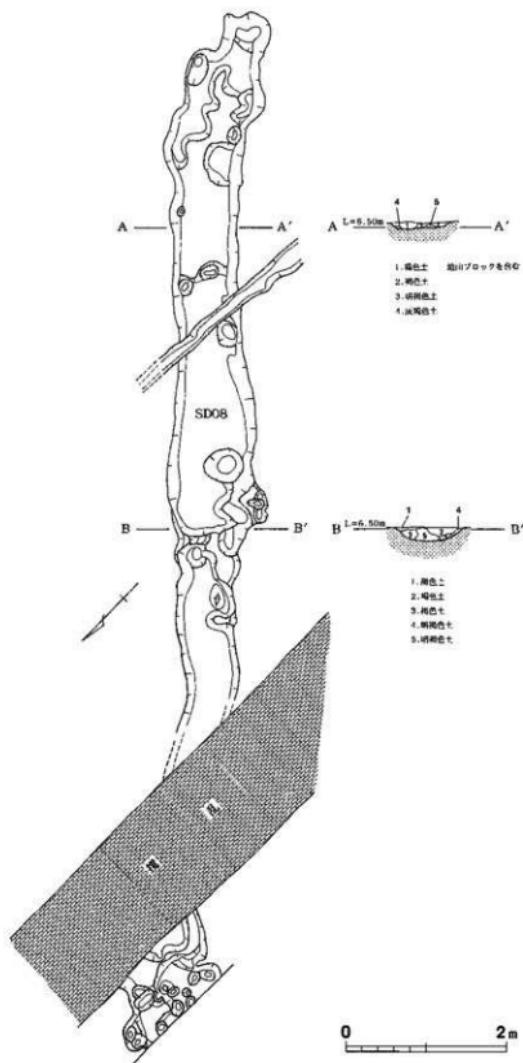
以上のように、SD04からは多くの遺物が出土しているが、その中には出雲地域では珍しい形態的特徴をもつものがある。しかしながら、時期的には総じて弥生時代中期中葉頃に相当する資料と言

える。

SD08 (第42図)

調査区のやや北側、A 5 GrからB 7 Grにかけて黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東-西北西の方向に伸びる溝状遺構である。A 5 GrではSD08よりも新しい時期の遺構であるSD07によって一部が切られ、B 7 Grでは水道管理設のために攪乱を受け、北側は調査区外へと伸びている。また、遺構の南側は途中で切れているが、これは上面が何度かの削平を受けているものと考えられ、本来はもう少し長く伸びていた可能性が強い。特に5 Gr以北では、削平された面が大きく、遺構の底部が部分的に残るような状況であった。検出した状況では、長軸12.6 m以上、最大幅1.2 m、狭い所でも約80 cmを測る。なお、検出高は標高約6.54 mであり、黄褐色シルト質土（地山）は、5 Gr以北では約20 cmほど高くなっている。

覆土には、褐色土や明褐色土・灰褐色土など腐食系の土が堆積し、最深部は地山である黄褐色シルト質土に達する。断面の形状は、両肩からやや緩やかに落ち、底面はレンズ状に丸く作り出している。なお、遺構の南側では削平された部分が大きく、深さは約10 cmと浅いが、残



第42図 SD08実測図

存状態のやや良好な北側では約20 cmの深さがある。

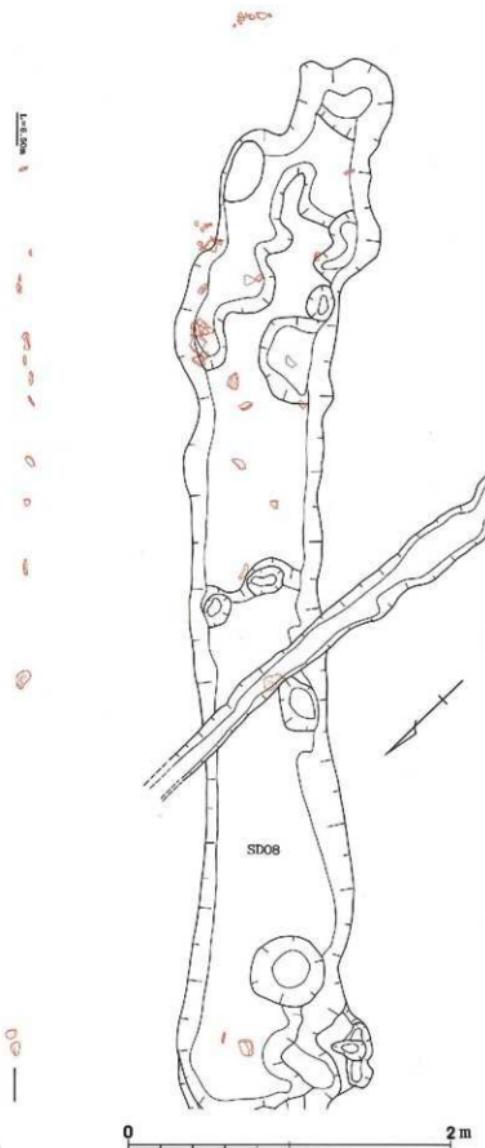
全体の形状は、B 6 Gr付近でやや幅が狭くなるものの、ほぼ一様である。しかし、溝の底部はピット状に掘り込まれたり、高まりとなっている箇所があるなど不均一である。

遺物の出土状況をみると、遺構の南側（第43図）では標高6.42 mから6.78 mの範囲で遺物が認められる。層位的には上層から多く遺物が出土しているが、大きく削平を受けていると考えられることから、一概には言及できない。また、位置的には南側に集中して遺物が認められている。

一方、遺構の北側（第44図）では標高6.30 mから6.50 mの範囲に遺物が認められる。層位的には下層から多くの遺物が出土しており、位置的にみると北側に遺物が集中している傾向にある。

遺構の性格は、上部が削平を受けていると考えられることから判断し難い。しかし、底面にはピット状に掘り込まれた箇所や高まりなどがあり、SD 03やSD 04で示唆した環濠のような施設とは考えにくい。

遺構が築かれた時期については、SD 08の出土遺物には弥生時代中期中葉の遺物のみが認められていることから、当該期



第43図 SD 06遺物出土状況実測図（南側）

に築かれ、機能していた期間も比較的短期間であったものと考えられる。

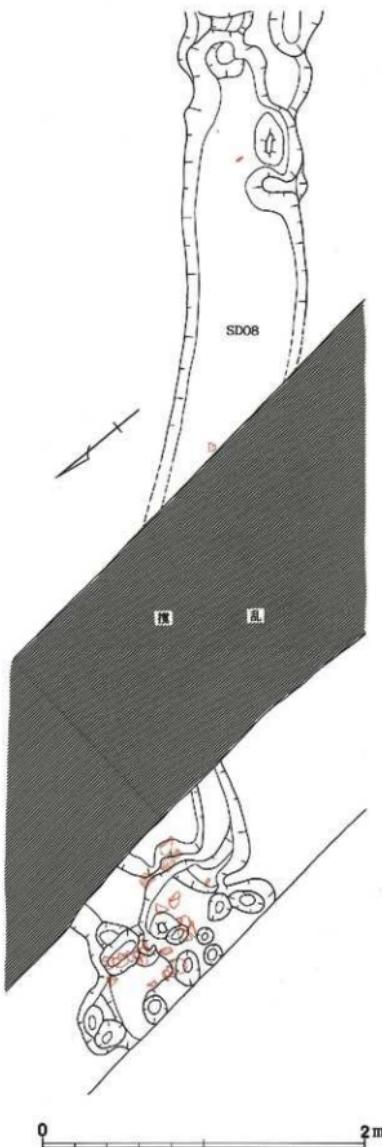
SD08の出土遺物（第45図）

SD08からは、弥生土器の壺・甕・高坏が出士しており、これら全てが弥生時代中期中葉頃の遺物と考えられる。

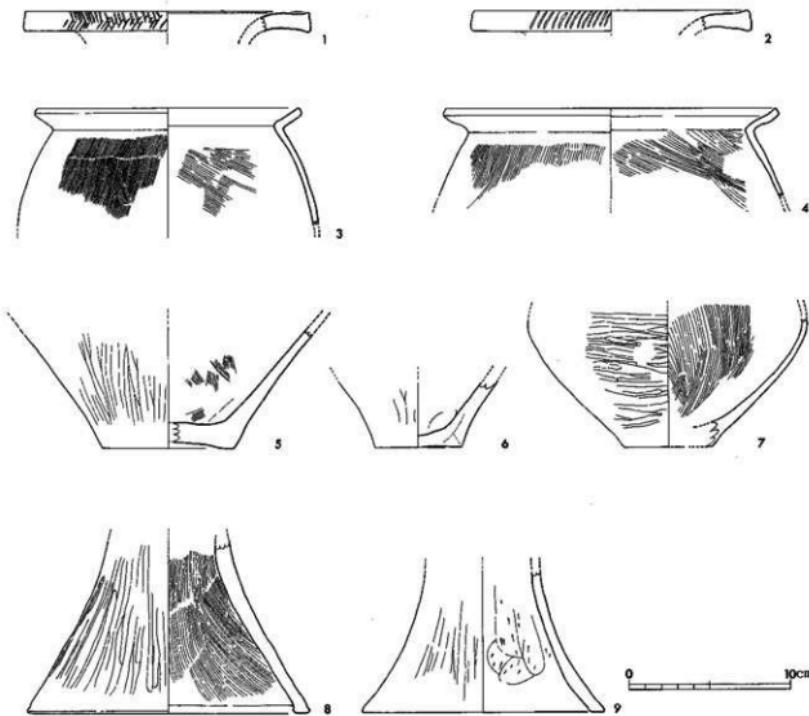
第45図-1・2は、弥生土器の壺である。1は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張している。口縁拡張部の平坦面には両端から互い違いの方向に貝殻による刻目文を施し、「く」の字状の文様を作り出している。2も1と同様に口縁部が大きく朝顔状に開くもので、口縁端部はわずかに上下に拡張し、拡張部には貝殻による刻目文がめぐらされている。これらの壺は、おおよそ松本編年Ⅲ-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉でもやや古い様相を示す資料であろう。

3・4は、弥生土器の甕である。3は、口径16.3cmを測り、口縁部が外方にゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して平坦面を作り出している。頸部下の外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われており、外面胴部から口縁部にかけてスヌが付着している。4は、口径20.4cmを測り、口縁部は外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張している。3と同様に頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整され、口縁部外面にはスヌが付着している。以上のようないは、壺と同様に松本編年Ⅲ-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

5～7は、弥生土器の壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片である。5は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケによって調整さ



第44図 SD08遺物出土状況実測図（北側）



第45図 SD08出土遺物実測図

れ、内面底部付近には指頭圧痕が明瞭に残っている。6は、5と比べると底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がっている。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われ、内面底部付近には指頭圧痕が認められる。7は、外面が横方向のミガキによって調整されるという特異な土器である。内面はハケによって調整され、胴部は強く張り出している。このようなタイプの土器は、弥生時代前期には認められるものであるが、中期には出雲地域では珍しく、松江市布田遺跡などわずかに出土しているにすぎない。これらの土器からは、時期的判断はし難いが、内面にケズリによる調整が認められず、SD08から出土している壺や甕の形態的特徴を考えると、松本編年III-1様式に相当する資料と考えられよう。

8・9は、弥生土器高坏の脚部である。8は、脚部は末広がりになり、端部は内外にやや拡張してフラットな面を作り出している。脚部外面は縦方向の丁寧なミガキ、内面はやや粗いハケにより調整されている。9は風化が著しいが、脚部は末広がりになり、端部にフラットな面を作り出す。脚部外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。これらの高坏のように脚端部にフラットな面をもつものは珍しいが、天神遺跡からは第5次発掘調査においても同タイプのものが出土し

ており、地域的な特徴の一つと考えられる。

S D 0 9 (第46図)

調査区のやや南側、A 2 Gr～B 3 Grにかけて黄褐色シルト質土（地山）上面で検出した東南東～西北の方向に伸びる溝状遺構である。A 3 GrとB 3 Grにかけては古代の遺構である S D 0 5・S K 0 3・S K 0 6、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭にかけての遺構と考えられる S D 1 0・S X 0 6に切られている。また、西側は水道管、ガス管埋設のために大きく搅乱を受けているが、東西とも調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では、長軸 10.0 m以上、最大幅 5.52 m、狭い所でも 5.08 m を測る。なお、検出高は標高約 6.30 m である。

覆土は、上層から下層にかけて複雑な堆積を示している。上層には灰白色・褐色・暗褐色などの砂質土が堆積しているが、ブロック的に灰色・黒褐色の粘質土を含んでいる。また、28層から31層にかけては覆土の中でも切合関係をもち、他の覆土よりも古いものと考えられる。中層にも明褐色・灰白色・赤褐色などの砂質土と灰色・黒褐色・明灰色などの粘質土が互層状に複雑に堆積し、この中には褐色粒子や黒色土ブロックを含む層が認められる。下層も基本的には砂質土と粘質土の混合層ではあるが、最下層には灰褐色・明褐色の砂層が堆積し、最深部は灰白色粗砂層にまで達し、この層位からはかなりの湧水がある。

断面の形状は、両肩から約 45 度の角度で落ちて一旦平坦な面を作り出し、そこからなだらかに落ちてもう一度平坦面を作り出してさらに最深部へ向かって落ちている。底面の幅は約 80 cm を測り、ほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは約 1.0 m、浅い所でも 92 cm の深さがある。

全体の形状は、遺構の西側が新しい時期の遺構によって切られているため、一概には言えないが、東側では南肩部から落ちた平坦な面が広く、西肩部から落ちた平坦面がやや狭くなっている。なお、上部の溝の幅はほぼ一様な広さを有している。

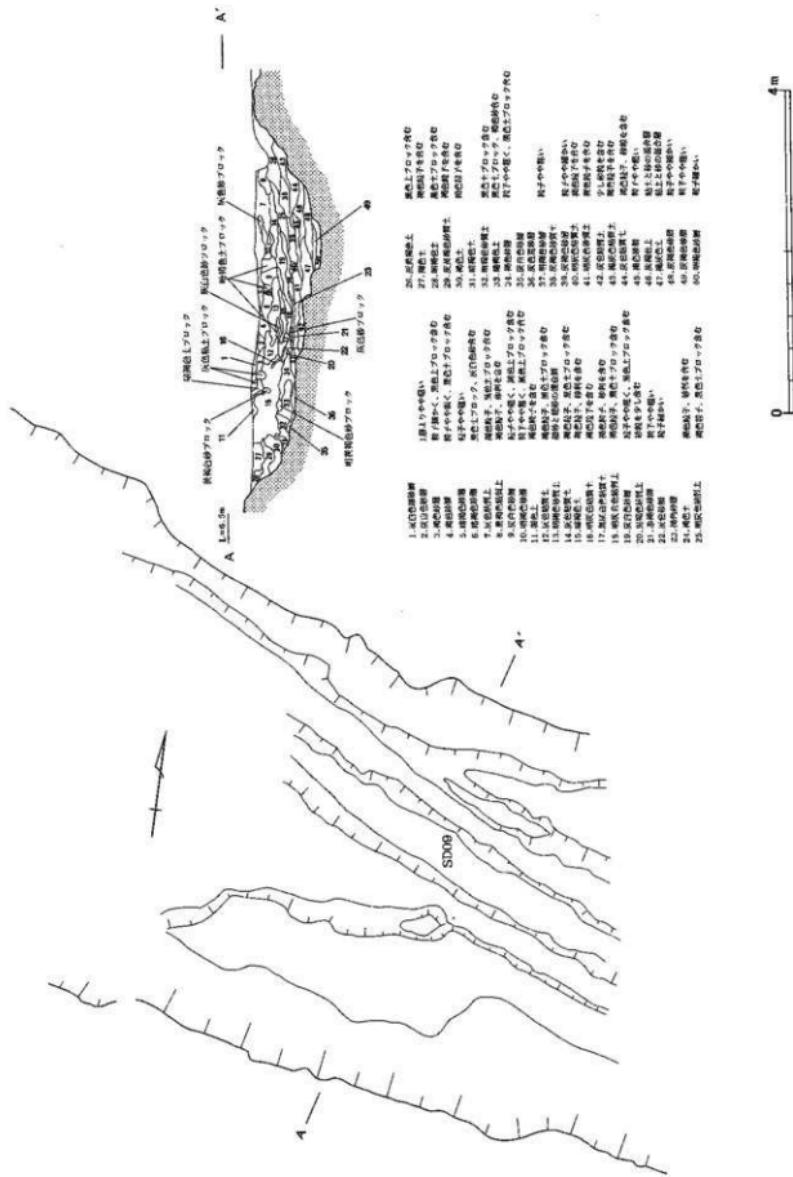
遺物の出土状況をみると（第47図）、標高 5.34 m から 6.32 m の範囲に遺物が認められている。位置的には遺構の東側・南側で遺物の出土量が多い傾向にある。しかし、これは西側が古代の遺構である S K 0 6 によって大きく切られているためであり、実際には S K 0 6 の最下層からは多くの弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土しており、これは S D 0 9 に伴うものと考えられる。また、層位的にみると、上層よりも中層・下層からの出土量が多い。

遺構の性格は判断し難いが、覆土には砂質土と粘質土が互層状に堆積していることから、ある程度の水の流れがあったことが推測される。また、幅 5.52 m、深さ 1.0 m と大規模なものであることから、集落を囲繞する環濠として機能していた可能性もある。

なお、天神遺跡第7次発掘調査A区では、幅 6.0 m、深さ 0.9 m を測る大溝 1 が検出されており、遺構の規模・方向がほぼ一致することから、S D 0 9 と同一の溝である可能性がある。大溝 1 からは、弥生時代中期中葉頃の遺物のみが出土していることから、当該期の遺構と解されている。S D 0 9 からは弥生時代中期中葉頃の遺物が多いが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の遺物も検出されており、時期的な問題については再考の必要があろう。

S D 0 9 が築かれた時期については、出土遺物から考えると、弥生時代中期中葉頃に築かれたと考え

第46図 SD09実測図



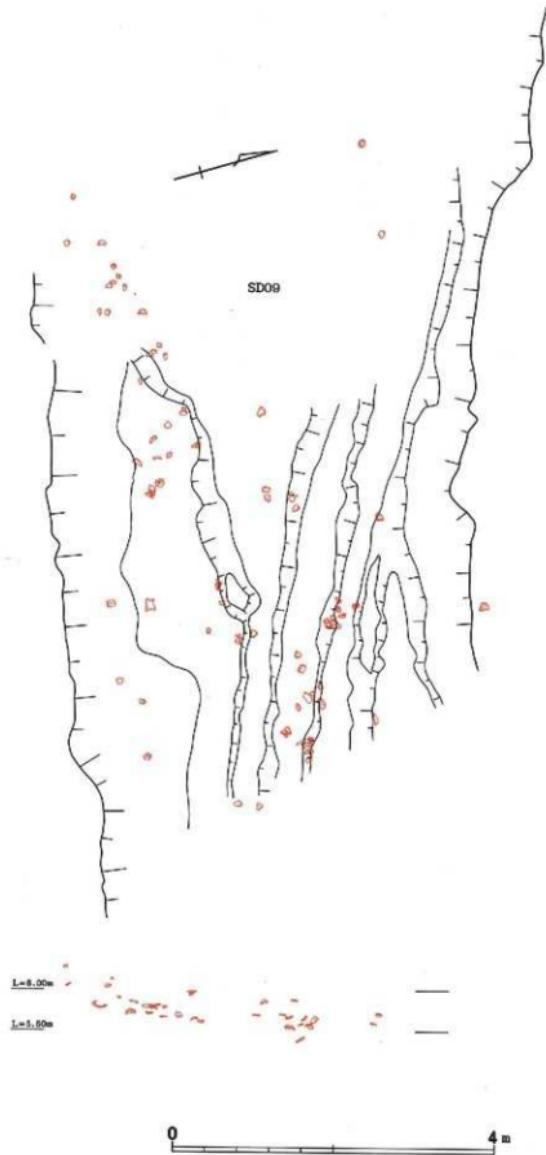
えられる。その後、弥生時代後期にはほとんど機能しなくなり、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて再び掘り直して利用されたのではないだろうか。そして、古墳時代前期中頃までには再び機能しなくなつたと考えられる。なお、このような傾向は、前述したSD03でも認められる傾向である。

SD09の出土遺物

(第48図～第53図)

前述したように、SD09からは弥生時代中期中葉から古墳時代前期初頭にかけての遺物が出土している。このうち弥生時代中期中葉頃の遺物には、弥生土器壺・甕・高坏・蓋・鉢などが出土している。また、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物には、古式土師器壺・高坏・低脚坏・器台などが出土しており、出土量も多く、布留式傾向壺も認められるなどバラエティーに富んでいる。

第48図-1～11は、弥生土器の壺である。1は、口縁部が大きく朝顔

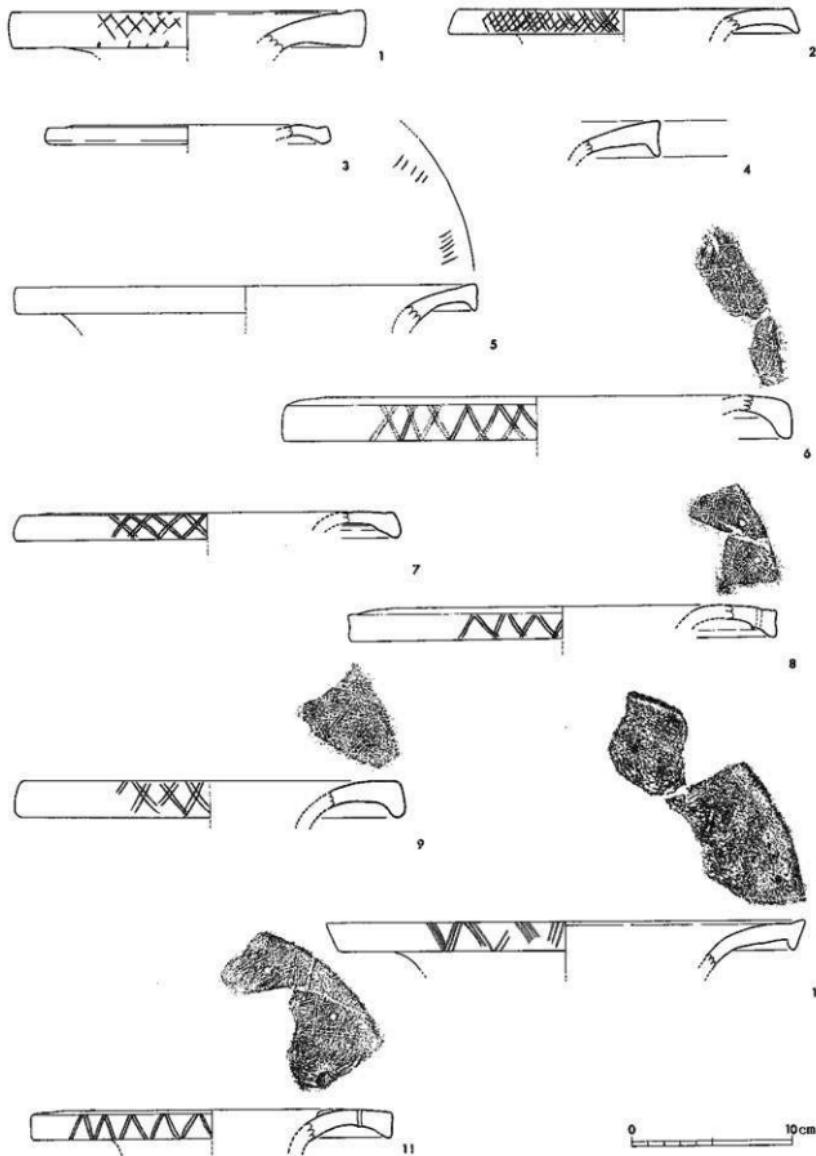


第47図 SD09遺物出土状況実測図

状に開き、口縁端部はあまり拡張しないが平坦面を作り出している。口縁拡張部には1本のクシ状工具による斜格子文、両端からは刺突具によって刻目文が施されている。2は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は下方にのみ拡張している。口縁拡張部には1本のクシ状工具によって斜格子文を密に施している。3も同様に口縁部が朝顔状に開くが口縁端部は上方に波打つように拡張し、無文である。4も同様であるが、口縁端部は下方にのみ大きく拡張し、口縁端部上端には刺突による刻目文が施されている。5は、風化が著しいが口縁端部は下方にのみ拡張し、朝顔状に開く口縁部内面にはヘラ状工具によって約1cmの直線が刻まれ、めぐらされている。6は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部と内面には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文が施されている。7は、口縁部は大きく開き、口縁端部は下方に拡張するが、上方にもわずかに拡張している。口縁拡張部には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文が施され、内面にも3本単位からなるクシ状工具によって波頂間の狭い波状文が2列にめぐらされている。8は、大きく朝顔状に開く口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部と内面には2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文を施し、口縁部内面から外面に向かって2以上の穿孔が認められる。9は、口縁端部は下方にのみ拡張し、口縁拡張部から内面にかけては2本単位からなるクシ状工具によって斜格子文が施され、さらに内面頭部付近には直線文がめぐらされている。10は、口縁端部が上下に大きく拡張する。口縁拡張部には3本単位からなるクシ状工具によって山形文が施され、口縁内面には4本単位からなる波状文が2列に施され、さらに内面頭部付近には2列に刺突列点文がめぐらされている。11は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部から内面にかけては2本単位からなる斜格子文が施され、口縁部内面から外面に向かって6以上の穿孔が認められる。さらに内面頭部付近には3列に刺突列点文、1以上の円形浮文を貼付けて飾っている。11は、8とよく似た形態をもっており、同一個体である可能性がある。

第49図-13は、口径9.6cmを測る小形の壺である。口縁部は前述したものより短く外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張して無文である。16は、頸部から口縁部に向かっての開き方から、壺と考えられる。口縁部は水平方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデによる調整が行われているが、このような形態的特徴をもつ壺は雲霧地域ではあまり類例がない。詳しく述べてはわからぬが、他地域からの搬入品と考えることもできよう。山口県山口市吉田遺跡からは同じような形態の土器が出土しており、瀬戸内あるいは北部九州からの影響を受けたものではないだろうか。なお、この土器は高壺の壺部である可能性もある。17は、壺の頸部から胴部にかけての破片である。外面頭部には1条の指頭圧痕文帯を貼付け、その下方は縦方向のハケ、内面はナデと横方向のミガキによって調整されている。以上のような壺は、その特徴から松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第49図-19~22は、弥生土器の鉢あるいは無頸壺と称されるものである。19は、口縁端部を厚くして上面にフラットな面を作り、体部はやや張り出すようである。外面口縁部の下には1条の指頭圧痕文帯が貼付けられ、その下方はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。20は、口径約38.8cmを測る大形のもので、口縁端部は内側に突出している。厚く、平坦に作り出した口縁端部外面には刻目文、1.5cmほど下には指頭圧痕文帯が貼りめぐらされ、その下方は縦方向のハケ

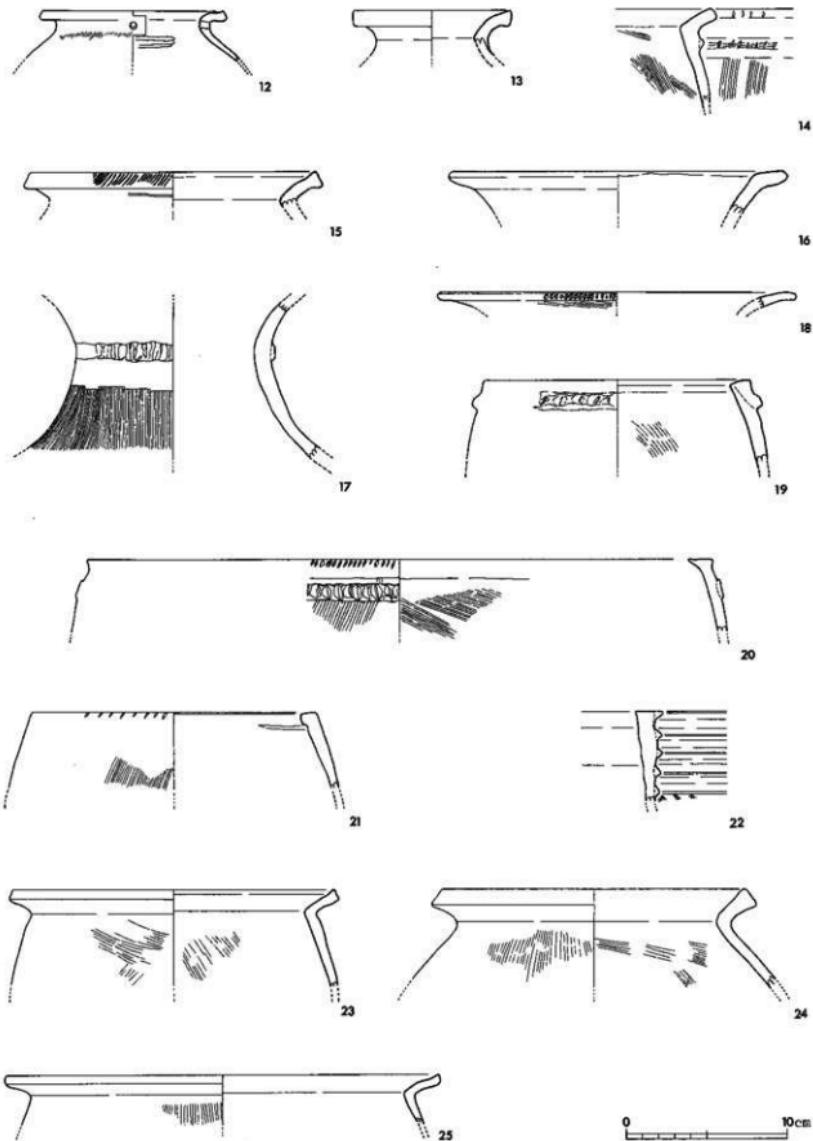


第48図 SD09出土遺物実測図(1)

による調整が行われている。なお、内面には 19 と同様に斜め方向のハケによる調整が行われている。21 は、口縁端部がやや内側に肥厚し、上面にフラットな面を作り出して口縁端部の外面には刺突による刻目文を施している。22 は、同様に口縁端部を厚くして上面をフラットに作っている。外面には口縁端部から胴部にかけて刺突による刻目文を施した三角形文帯を貼付け、その下方には 2 本単位からなるクシ状工具によって斜格子文（または山形文）が施されている。内面はナデによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ鉢あるいは無頸壺は、おおよそ松本編年 III-1~2 様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第 49 図 - 12・14・15・18・23～25 は、弥生土器の壺である。12 は、口縁部が強く外方に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張してやや丸くおさめている。頸部下外面は縱方向のハケ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。また、頸部外面から内面に向かって 2 つの穿孔が認められている。14 は、口縁部が外方に短く「く」の字状に屈折し、口縁端部に平坦面を作り、刺突による刻目文を施している。頸部下外面には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、その下方は縱方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。なお、外面胴部から口縁部にかけてはスヌが付着している。15 は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。平坦面を作る口縁拡張部には貝殻腹縁による刻目文が密に施されている。18 は、器壁が薄く、口縁部が強く外方に屈折し、口縁端部は拡張せず丸くおさめ、刺突による刻目文を施している。口縁部外面は横方向の丁寧なミガキ、内面はナデによる調整が行われている。このようなタイプの土器は、出雲地域では珍しい。23 は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張して平坦面を作っているが、無文である。頸部下は内外面ともに斜め方向のハケによる調整が行われている。24 は、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。頸部下外面は縱方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。25 は、口縁端部はわずかに上方に拡張している。頸部下外面は縱方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。

第 50 図 - 26～35 も弥生土器の壺である。26 は、口縁部が外方に強く短く屈折し、口縁端部には平坦面を作りて刺突による刻目文を施している。頸部下外面には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、内面はナデによる調整が行われている。第 49 図 - 14 と非常によく似た形態であることから、同一個体である可能性もある。27 は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張している。頸部下の内外面ともにナデによる調整が行われている。28 は、器壁がやや薄く、口縁端部は上方にわずかに拡張して丸くおさめている。29 は、口縁部は外方に短く鋭く屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張してやや丸くおさめている。頸部下外面は縱方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面口縁部にはスヌが付着している。30 は、口縁部が外方にやや強く屈折し、口縁端部は拡張せず、やや丸くおさめている。31 は、外方に強く屈折するやや長めの口縁部を有し、口縁端部は拡張せず、丸くおさめている。頸部下は内外面ともにナデによって調整され、外面口縁部にはスヌが付着している。32 は、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して丸くおさめている。頸部下外面は縱方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。33 は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は上方にわずかに拡張して平坦面を作っているが、無文である。34 は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに拡張して平坦面を作っ



第49図 SD09出土遺物実測図(2)

ているが、無文である。なお、外面にはススが付着している。35は、口径10.2cmを測るやや小形の壺で、口縁部が外方にゆるく屈折し、口縁端部は拡張しないが平坦面を作り出している。

以上のような壺は、様々な形態的特徴をもっているが、おおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

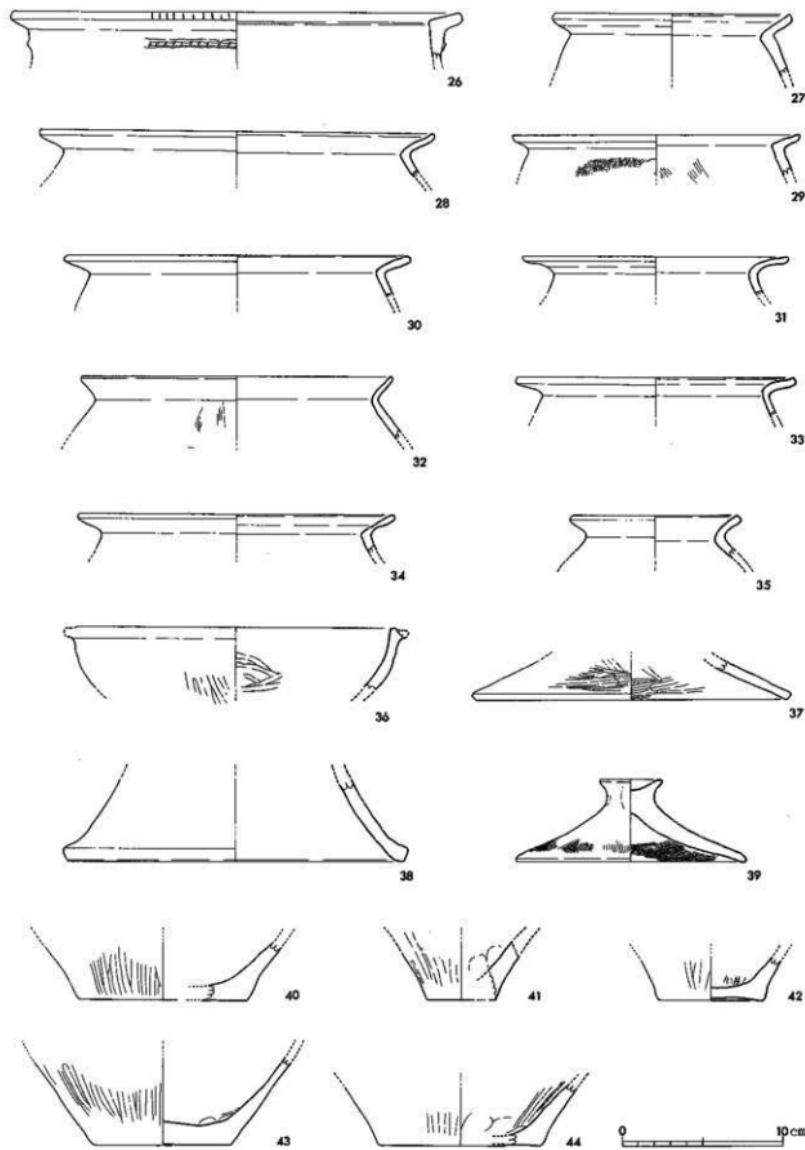
第50図-36は、弥生土器高壺の壺部であろう。口縁端部は水平方向に外方へ突出し、外面は縱方向のミガキ、内面は横方向のミガキによって調整されている。この高壺も、壺や壺の形態から考えると、おおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式の範疇に入る資料と考えられる。なお、SD09から出土している当該期の高壺は、この1点のみである。

第50図-39は、弥生土器の蓋である。底径14.2cm、器高5.1cmを測り、上部に内側に凹んだ輪状のつまみをもつものである。外面は縱方向のハケ、内面は横方向の細かいハケによって丁寧な調整が行われている。なお、つまみ部には指頭圧痕が明瞭に残っている。蓋はこの1点のみの出土であり、無頸壺の蓋に利用されたものであろう。おおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第50図-40~44は、弥生土器の壺あるいは壺の底部付近の破片である。40は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面は縱方向のミガキによって調整されている。41は、底径4.2cmとやや小さく、底部から胴部にかけてやや外反ぎみに立ち上がり、外面は縱方向のミガキ、内面はナデによって調整され、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。42は、外面は縱方向のハケ、内面はナデによる調整が行われているが、内面底部付近には粗く、工具によるものと考えられる痕跡が認められる。43は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、外面は縱方向のミガキ、内面はナデによって調整され、内面底部付近には指頭圧痕が認められる。44は風化が著しいが、底部から胴部にかけてやや外反ぎみに立ち上がり、外面は縱方向のミガキ、内面も縱方向のミガキによる調整が行われているようである。このような土器は出雲地域には珍しいが、弥生時代前期末からの系譜を引いたやや古めの様相を示すものであろうか。

第51図-45~58も弥生土器の壺あるいは壺の底部から胴部にかけての破片である。45は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面はやや粗く、間隔の広い縱方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。46も形態的にはほぼ同様で、外面に残る縱方向のミガキは約7mmと間隔が広く、外面にススが付着している。47は、外面は細かく丁寧な縱方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われ、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。48は、外面の縱方向のミガキは粗く、間隔が広いという特徴をもつ。49・50は、外面は一般的な縱方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われている。

51は、底部から胴部にかけて直立ぎみに立ち上がり、外面はやや粗く、間隔の広いミガキ、底部付近には一部横方の細かいハケ、内面はケズリによる調整が行われている。52は、底径3.7cmとやや小さく、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、外面は縱方向のミガキ、内面は縱方向のケズリによる調整が行われている。53は、外面は縱方向のミガキ、内面は横方向のケズリによって調整されている。54は、外面は縱方向のミガキ、内面は縱方向のケズリによる調整が行われている。55は、底径3.9cmとやや小さく、外面には指頭圧痕が明瞭に残り、内面には刺突具で突いたような痕



第50図 SD09出土遺物変測図(3)

跡が残っている。このような土器は S D 0 4 (第 40 図 - 44) からも出土している。56 は、底部から胴部にかけてやや外反ぎに立ち上がり、外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。このようなタイプの土器も出雲地域には珍しいが、S D 0 3・S D 0 4 からも内面が横方向のミガキによって調整された土器が出土している。57 は、小形の壺あるいは壺の底部から胴部にかけての破片である。底部は丸底で胴部が球形を呈し、内外面とも手捏ねで作られ、指圧痕が至るところに認められる。58 は、底径 2.2 cm とやや小さく、底部から胴部にかけて大きく広がって立ち上がっている。外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。弥生時代後期の遺物であろう。

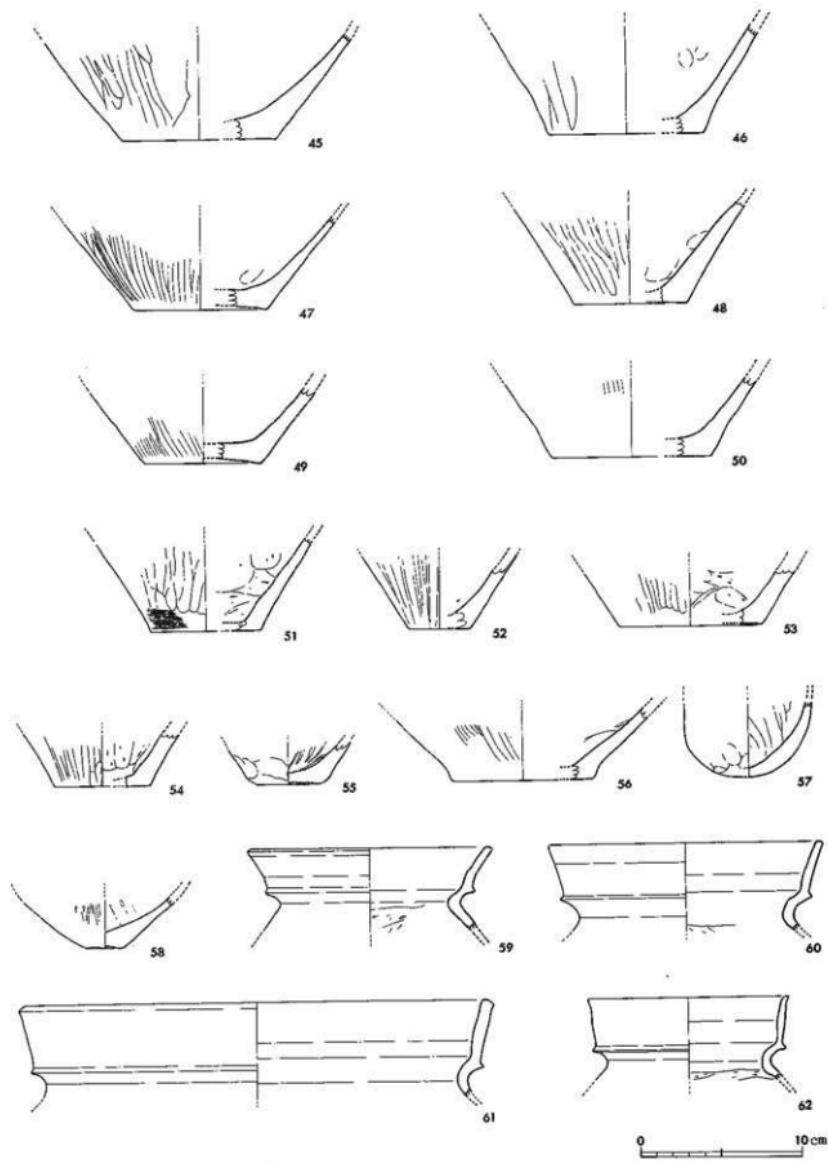
以上のような壺あるいは壺の底部は、その特徴から時期的に類別できるものである。40～54については、松本編年 III-1～2 様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。そのうち、51～54 については、内面にケズリによる調整が行われていることから、松本編年 III-2 様式に相当する資料であろう。また、56 については、内面が横方向のミガキによって調整されていることから、松本編年 III-1 様式の中でも古い様相を示すものと考えられる。なお、55・57・58 については、底径が小さくなるという特徴から、松本編年 V 様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期の遺物であろう。

S D 0 9 からは、前述したような弥生時代中期の遺物のほか、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物も確認されている。

第 51 図 - 59～62 は、複合口縁をもつ古式土師器の壺である。59 は、複合口縁の稜は水平方向に突出し、口縁端部はやや平坦に作り出している。口縁部内外面は横方向のナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。60 もほぼ同じ形態である。61 は、口径 28.2 cm とやや大形のもので、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁の稜は水平方向に向いている。62 はやや器壁が薄いが、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作っている。

第 52 図 - 63～74 も複合口縁をもつ古式土師器の壺である。63 は、口縁部が直立し、口縁端部はやや外方に折り曲げて平坦面を作り出している。複合口縁の稜は水平方向に向くが、やや鋭さを欠いている。なお、この土器は内外面ともに朱塗りされている。64 は、口縁端部を外方に折り曲げているが、やや丸くおさめている。65 は、63 と同様に口縁端部に平坦面を作っている。66 は、頸部から胴部にかけての破片である。外面頸部やや下にはクシ状工具による直線文・波頂間のやや広い波状文が施され、その下方は斜め方向のハケ、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。なお、外面胴部にはススが付着している。67～71 はほぼ同様な形態をもち、複合口縁の稜は水平方向に折り曲げているが、やや丸みを帯びておさめている。なお、71 は口縁端部にススが付着している。72 は、複合口縁の稜はやや下方に向き、口縁端部は折り曲げず、先細りとなって丸くおさめている。73 はやや器壁が薄いが、口縁端部をやや外方に折り曲げて平坦面を作っている。74 は、頸部付近の破片であるが、内面頸部下にはケズリによる調整が行われている。

以上のような壺は、72 がやや古い様相を呈しているが、その特徴から草田 6 期から 7 期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。これらの土器は、⁶⁷ 東出雲町大木権現山 1 号墳・1 号土壤資料、鹿島町南講武草田遺跡 C D - 4、D E - 3 区土器溜資料、⁶⁸



第51図 SD09出土遺物実測図(4)

出雲市山持川岸遺跡 S K 0 2 · S I 0 1 · S B 0 1 資料などに相当するものであろう。

第 52 図 - 75 ~ 78 は、単純口縁の布留式傾向壺である。75 は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく「く」の字状に屈折し、口縁端部はやや内傾して稜をなしている。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。76 は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部はやや丸くおさめている。頸部下外面は横方向のナデ、内面はケズリによる調整が行われ、外面口縁部にはススが付着している。77 は、頸部下外面はハケによる調整、内面頸部や下方からケズリによる調整が行われている。形態的特徴が 76 とほぼ同じであることから、同一個体である可能性もある。78 は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部はやや内傾して稜をなしている。外面頸部や下方には 8 本単位からなるクシ状工具によって波頭間が広い波状文・直線文が施され、内面頸部や下からはケズリによる調整が行われている。なお、外面にはススが付着している。

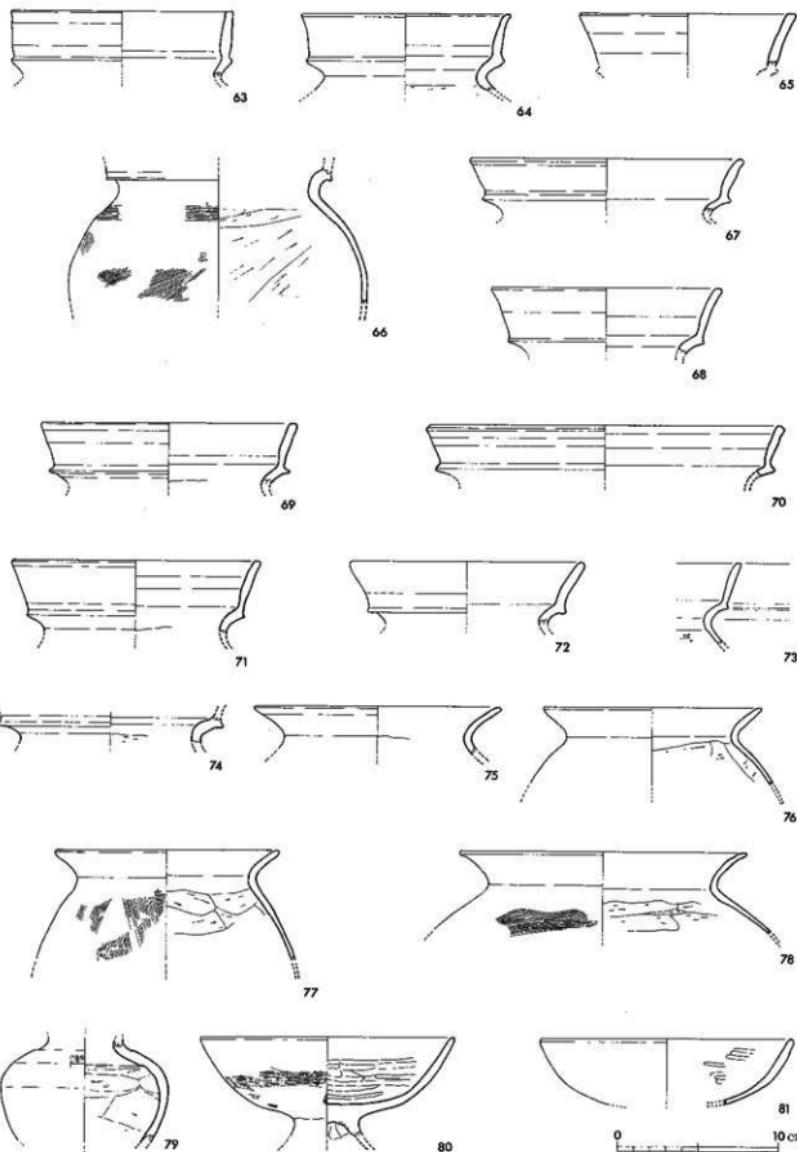
以上のような布留式傾向の壺は、第 7 次発掘調査 B 区 S D 0 6 からも多量に出上しているが、S D 0 9 から出土している壺は、出雲平野における複合口縁をもつ壺と胎土が同じであることから、畿内系の壺を模倣して作られたものであろう。

第 52 図 - 79 は、小形の壺あるいは壺であろう。胸部が球形を呈し、外面はナデ、頸部下には細かいハケによる調整が認められ、内面は横方向のケズリによる調整が行われている。弥生時代終末期以降のものであろう。

第 52 図 - 80 · 81 は、古式土師器の高杯あるいは低脚杯である。80 は、口縁端部は丸くおさめ、杯部外面は細かいハケ、内面は横方向の丁寧なミガキによって調整されている。杯部と脚部は円盤充填法によってつながれ、脚部はかなり末広がりになるものと考えられる。天神遺跡から出土するこの時期の高杯は、総じて器壁が厚く、杯部に深さがあり、器高も高杯と低脚杯の中間に位置するものがある。在地的な手法の特徴であるのかは判断し難いが、注意が必要である。81 は、口縁端部は丸くおさめ、杯部外面上方は横方向のミガキ、下方はハケ、内面はミガキによって調整されている。

第 59 図 - 82 は、杯部外面はハケ、内面上方は横方向のミガキ、下方は縦方向のミガキによる調整が行われている。83 · 84 は高杯脚部の破片である。83 は、脚部外面は丁寧な縦方向のミガキ、杯部外面の下方にはハケによる調整が認められる。内面は横方向のケズリによる調整が行われ、円盤充填法によって杯部と脚部をつないでいる。84 は風化が著しいが、やや大形の高杯と考えられ、脚部内面はケズリによる調整が行われている。86 · 87 は、高杯の脚端部から裾部にかけての破片である。86 は、裾部が大きく広がり、脚端部には平坦面を作っている。内面脚部付近から上方は横方向のケズリによる調整が行われている。87 は、裾部は広がるが 86 ほどではなく、平坦面を作る脚端部にはナデで凹線を作っている。脚部外面は縦方向のミガキ、内面裾部にはハケ、脚部付近から上方はケズリによる調整が行われている。

第 50 図 - 37 · 38 も高杯の脚端部から脚部にかけての破片であろう。37 は、裾部が大きく末広がりとなり、脚端部はほぼ平坦に作り出している。また、内外面ともに横方向の丁寧なミガキによる調整が行われている。この時期の高杯としては、出雲地域ではあまり類例のないものである。38 は、器壁が厚く、底径約 20.8 cm を測る大形のものである。裾部は広がり、脚端部はやや上方に拡張し、下端はやや内傾して稜をなしている。内外面は横方向のナデによる調整が行われている。



第52図 SD09出土遺物実測図(5)

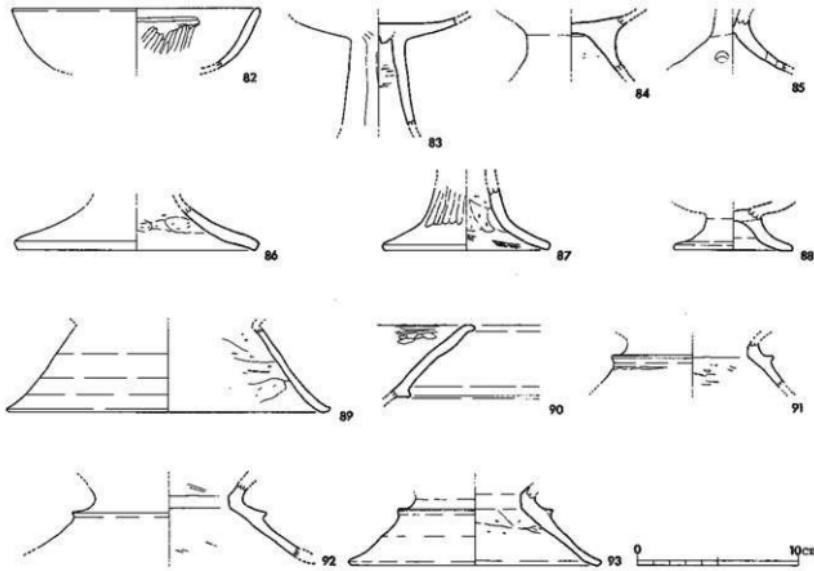
以上のような高坏あるいは低脚坏は、器形や形態からは判断し難いが、SD09から出土している壺の特徴から考えると、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に相当する資料ではないだろうか。

第53図-85は、小型器台であろうか。広がる裾部には2箇所に透し孔が認められる。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。高坏と同様に弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

第53図-89～93は、古式土師器の器台である。89は脚部の破片で、外面はナデ、内面は横方向のケズリによって調整され、外面にはスヌが付着している。90は受部の破片で、外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。また、筒部の稜は水平方向に向いているがやや鋭さを欠いている。91は、脚部から筒部付近にかけての破片である。脚部外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、筒部の稲は水平方向に向いているが丸みを帯びている。92も同様に脚部から筒部付近にかけての破片である。外面はナデ、脚部内面はケズリによる調整が行われるが、筒部上方にもケズリによる調整が認められ、筒部の稜は水平方向に鋭く突出している。93は、形態が91と非常によく似ており、同一個体である可能性もある。

以上のような器台については、時期的判断は難しいが、SD09から出土している古代土師器から考えると、おおよそ草田6期～7期の範疇に入る資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

以上のように、SD09からは多くの遺物を検出しているが、時期的には、弥生時代中期中葉を中心とした時期と弥生時代終末期から古墳時代前期初頭を中心とした時期に大別することができる。こ



第53図 SD09出土遺物実測図(6)

の傾向は、前述した SD 03 と同様で、SD 09 が機能していた時期を考えるうえで、注意が必要である。

SD 12 (第 54 図)

調査区のほぼ中央、A 4 Grから B 5 Grにかけて、黄褐色シルト質土上面（地山）で検出した溝状遺構である。A 4 Grでは古代から中世にかけての遺構である SX 02・SX 03・SK 05、弥生時代中期頃の遺構と考えられる SD 11 によって切られ、B 4 Grでは古代の遺構である SK 04、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構と考えられる SD 10 によって切られている。新しい時期に築かれた遺構によって切られているため、検出状況はよくないが、東西とも調査区外へとさらに伸びている。また、A 4 Grで溝は分岐しているが、ほぼ東南東—西北西の方向に伸びている。検出した状況では、長軸 10.5 m 以上、最大幅 2.22 m、狭い所では 62 cm を測る。なお、検出高は標高約 6.00 m である。

覆土には、上層には褐色粒子を含む明褐色土、灰白色の砂粒を含む明黄褐色土・褐灰色土などが堆積し、中層には粘質土と砂層が互層状に堆積し、最下層は褐灰色粘砂層が堆積している。断面の形状は、南肩部からは約 45 度の角度で落ち、北肩部からはややなだらかに落ちるが、中段からはやや鋭角に落ちている。底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約 43 cm、深い所でも約 25 cm の深さがある。また、最深部は灰白色粗砂層にまで達しているが、他の遺構と比べると湧水は少ない。

全体の形状は、A 4 Gr 東側での溝の幅はほぼ一様であるが、分岐した北側では溝の幅が広く、B 5 Gr で最大幅を有す。一方、分岐した南側の溝の幅は約 70 cm と狹くなっている。

遺物は、他の遺構と比べると少量であるが、弥生時代中期頃の遺物を中心に出土している。層位的には下層からの出土量が多く、位置的には分岐した北側の溝からの出土量が多い。

遺構の性格としては、覆土に粘質土と砂質土が互層状に堆積していることから、一定の水の流れがあったことが推測される。そして、溝が途中で分岐していることから考えると、灌漑用水路のような機能を果していたのではないだろうか。

遺構の築かれた時期については、切合関係、出土遺物から考えても発掘調査全体を通して検出された遺構の中で最も古く、弥生時代中期中葉でもやや古い時期のものと考えられる。

SD 12 の出土遺物 (第 55 図)

SD 12 からは遺物の出土量としては少ないが、弥生土器のみが出土しており、器種としては壺・甕・高坏がある。

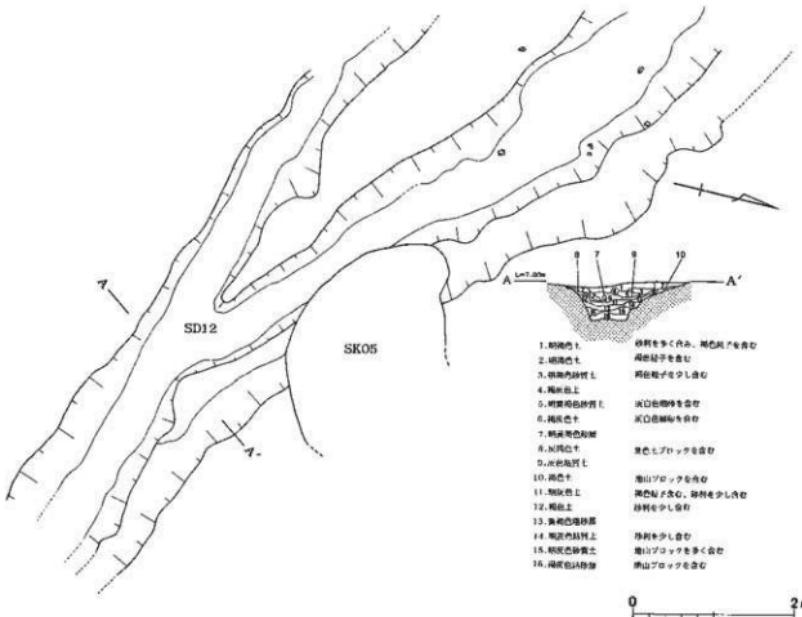
第 55 図 - 2 ~ 4 は、弥生土器の壺である。2 は、口縁部が大きく朝顔状に開くもので、口縁端部はわずかに上下に拡張し、平坦面を作り出している。口縁拡張部には貝殻腹縁による刻目文を施し、ナデてわずかに凹みを作っている。3 は、口縁部が大きく朝顔状に開いて口縁端部は上下に拡張する。口縁拡張部には 4 本単位からなるクシ状工具によって山形文を施している。3 は、頸部から口縁部にかけての破片である。頸部外面には刺突文を施した三角形文帯を 3 条以上貼付け、その上方は縦方向

のハケ、内面頸部は横方向のミガキ、上方は斜め方向のハケによる調整が行われている。

以上のような壺は、その特徴からおおよそ松本編年III-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

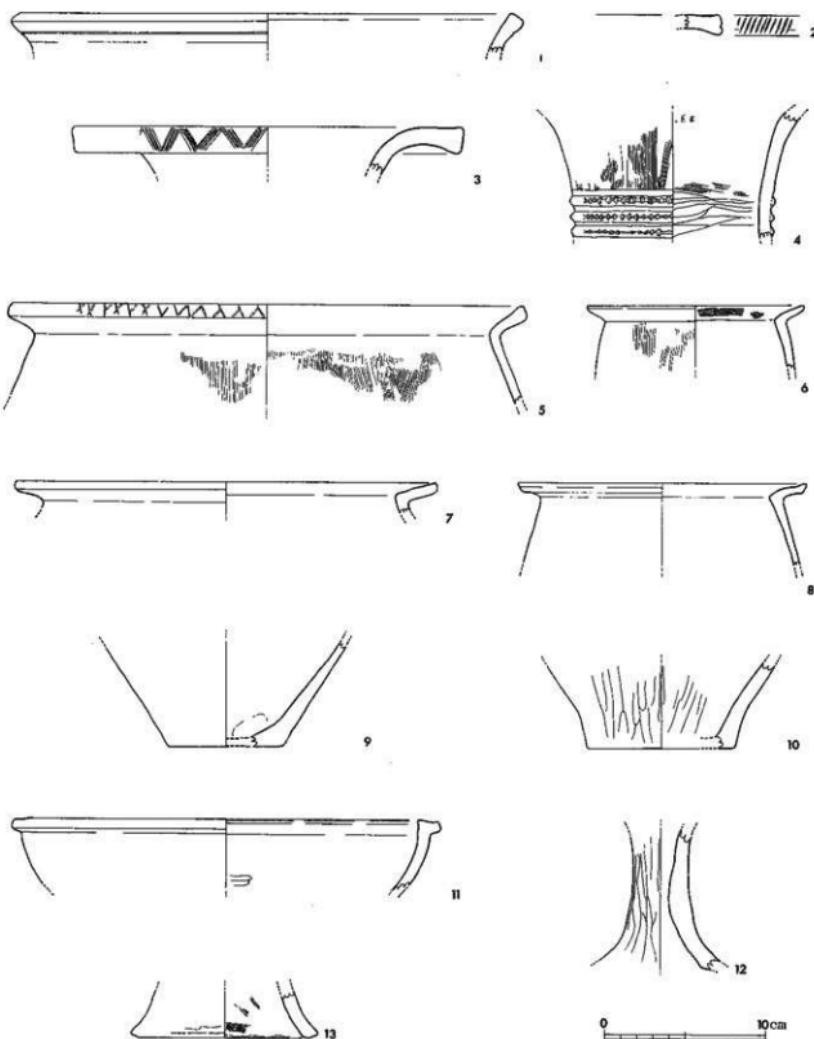
第55図-1・5~8は、弥生土器の壺である。1は、頸部から口縁部にかけて外方にゆるく屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張して平坦面を作っているが、無文である。5は、口径31.6cmを測る大形のもので、頸部から口縁部にかけて外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。口縁拡張部には貝殻腹縁により交互に刻目文を施し、「×」印のような文様をめぐらせている。頸部下の外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向の細かいハケによって調整されている。6は、口径13.3cmを測るやや小形のもので、頸部から口縁部にかけて鋭く屈折し、口縁端部は拡張せずに丸みを帯びておさめている。口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケによる調整が行われ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。7は、頸部から口縁部にかけて鋭く屈折し、口縁端部は拡張しないがほぼ平坦に作り、外面にはススが付着している。8は、頸部から口縁部にかけて外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張する。なお、外面口縁部にはススが付着している。

以上のような壺は、その特徴からおおよそ松本編年III-1~2様式の範疇に入る資料と考えられるが、III-1様式に近く、やや古めの様相を示すものであろう。



第54図 SD12実測図

第55図-9・10は、弥生土器の壺あるいは壺の底部から胴部にかけての破片である。9は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。風化が著しいため外面の調整は不明であるが、内面はナデによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が認められる。10は、底部から胴部にかけて外反ぎ



第55図 SD12出土遺物実測図

みに立ち上がる。外面は縦方向のミガキ、内面も縦方向のミガキによる調整が行われている。このような特徴をもつ土器はSD09から出土しているが、出雲地域ではあまり類例がなく、II-1様式の系譜を引くもので、やや古めの様相を示すものであろう。

第55図-11・13は、弥生土器の高坏である。11は坏部の破片であるが、口径26.4cmを測る大形のものである。口縁端部は肥厚して上面にフラットな面を有し、内外に水平方向に突出している。外方に突出する口縁端部は、上方にわずかに拡張し、ほぼ平坦におさめている。坏部外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。このような口縁をもつ高坏は類例が少ないが、天神遺跡では第2次発掘調査時にも同様な高坏が検出されている。在地的な形態的特徴であろうか。12は、高坏脚部の破片である。外面は縦方向の丁寧なミガキによって調整され、内面は無調整である。13は高坏の脚端部から据部にかけての破片であろう。脚端部は雑な調整ではあるがほぼ平坦に作り出し、外面据部はナデ、内面は部分的にハケによる調整が行われている。

以上のような高坏も、SD12から出土している壺や甕の特徴を考えると、おおよそ松本編年III-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。

以上のようにSD12から出土している遺物は、弥生時代中期中葉頃の遺物ではあるが、5~8の甕、10の底部から胴部にかけての破片、11の高坏などは松本編年III-1様式の範疇に入る資料と考えられ、やや古い様相を示している。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのその他の遺構

この時期の遺構としては、前述した他にも溝状遺構3(SD07・SD10・SD11)、落ち込み状遺構2(SX04・SX06)を検出している。

SD07は、A6GrからA7Grにかけて、黄褐色シルト質土(地山)上面で検出したほぼ南北方向に伸びる溝状遺構である。遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しているにすぎず、時期的判断は難しいが、切合関係から考えるとSD08よりも新しい時期の遺構である。なお、北側は上部が削平されているために途中で切れている。

SD10は、A3GrからB5Grにかけて、SD09の上面で検出した溝状遺構で、途中で蛇行しながら東南東-北北西の方向に伸びている。切合関係から考えるとSD09よりも新しく、古墳時代前期初頭頃の遺構であろう。なお、遺構内から遺物は出土していない。

SD11は、A3Grの東側、黄褐色シルト質土(地山)上面で検出した東-西北西に伸びる溝状遺構である。遺構内からは弥生時代中期中葉頃の遺物が数点出土していることから、当該期の遺構と考えられるが、切合関係からSD12よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。なお、西側は上部が削平されているために残存状況が悪く、途中で切れている。

SX04は、B5Grの黄褐色シルト質土(地山)上面で検出した落ち込み状遺構である。新しい時期の遺構によって切られているが、切合関係から考えるとSD09よりも新しく、SD10よりも古い遺構であることが明らかである。遺物は出土していないが、古墳時代前期初頭頃の遺構である可能性が強い。

SX06は、B5GrのSD09上面で検出した落ち込み状遺構である。この遺構も新しい時期の遺

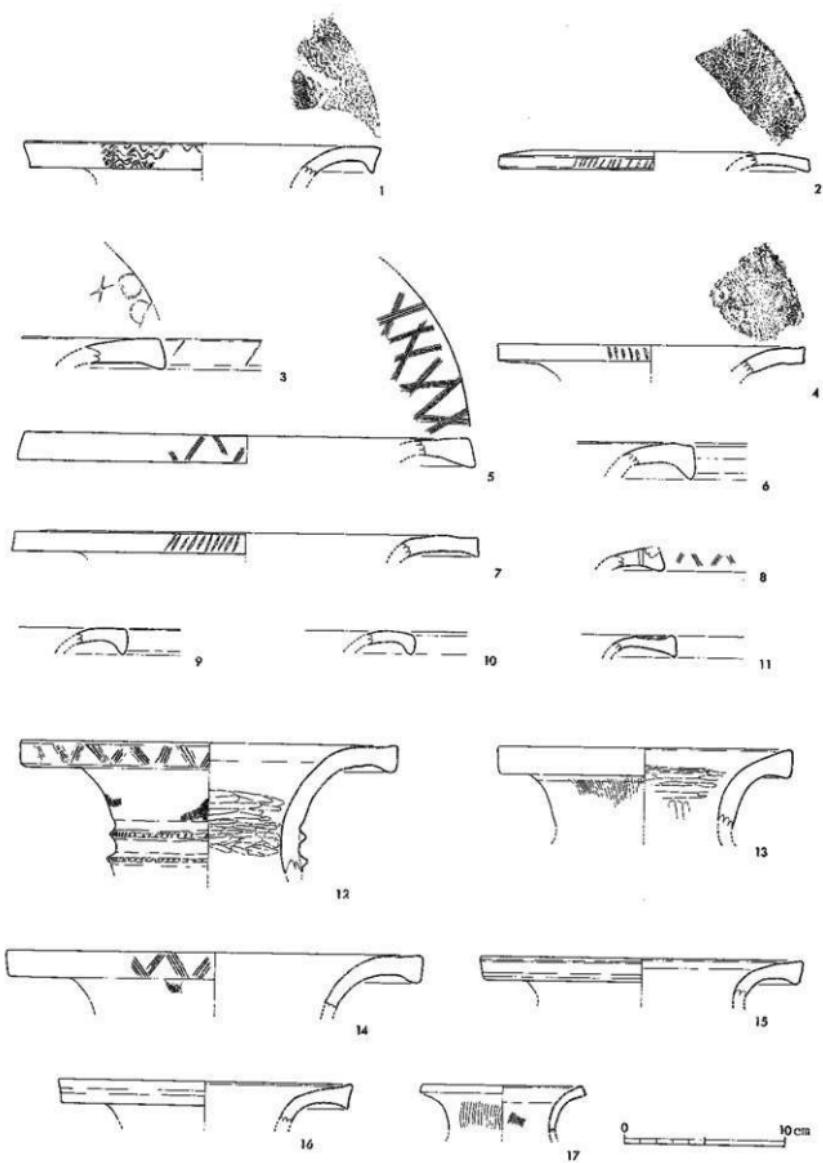
構に大きく切られているが、方向・溝の幅がSD10とはほぼ一致することから、同じ遺構の可能性もある。

7Gr～8Grにかけては明確な遺構は検出されていないが、これは地山上面が何度かの削平を受けているためで、実際には遺構の底部のみが部分的に残っている状態であった。この中には当該期の遺構もあったと考えられ、覆土中からは当該期の遺物も少量ではあるが出土している。

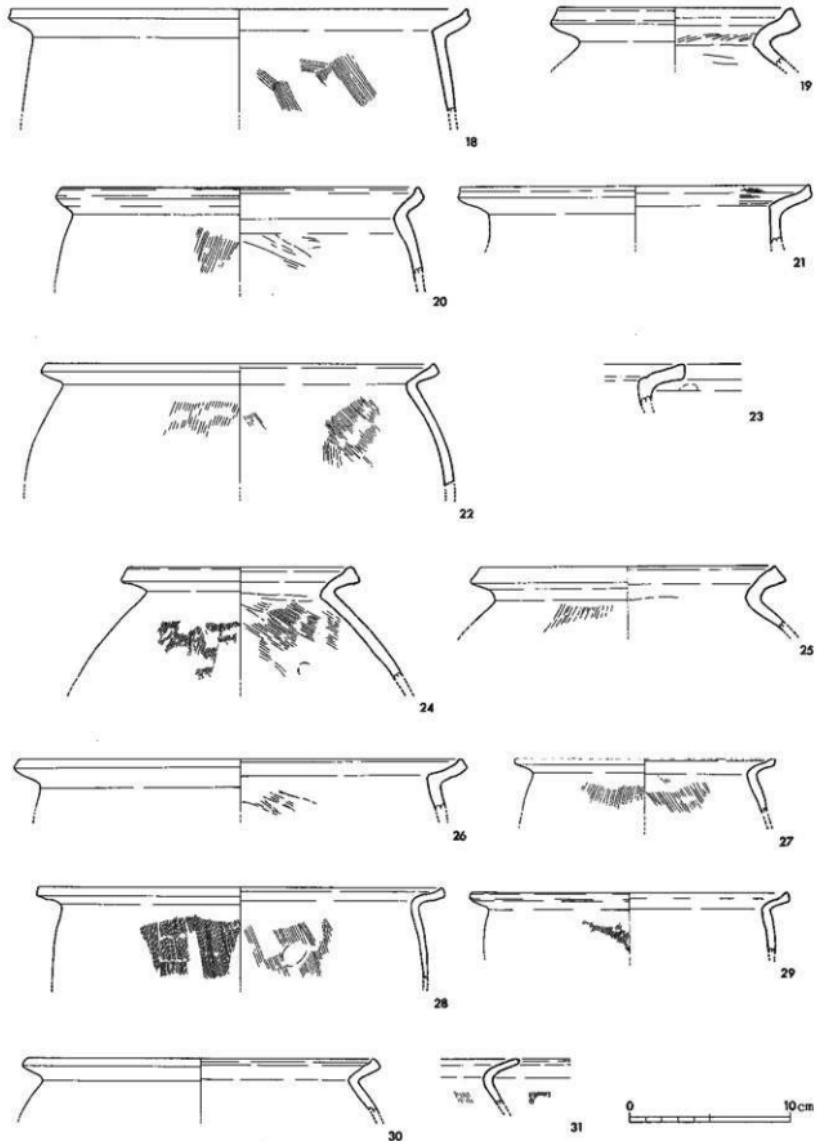
遺構外の出土遺物（第56図～第60図）

前述のように、遺構内からは多量の遺物が出土しているが、遺構検出面の上層に堆積する層は、全てが安定した遺物包含層となっており、遺物の出土量も多い。遺物の時期としては、弥生時代中期中葉から近世にかけてのものが出土しているが、その中でも弥生土器・古代の遺物の出土量が多い。

第56図-1～17は、弥生土器の壺である。1は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下に拡張する。口縁拡張部と内面にはクシ状工具によって波頂間の狭い波状文が施され、内面にはさらに2列に刺突列点文がめぐらされている。2は、口縁部は大きく朝顔状に開くが、口縁端部は拡張しない。口縁端部には貝殻腹縁による刻目文が施され、内面には3本単位からなるクシ状工具によって斜格子文・2本単位からなるクシ状工具による波状文がめぐらされている。3は、同様に口縁部は大きく開くタイプのものであるが、口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁拡張部には、1本のクシ状工具による斜線文、内面には円形浮文を2以上貼付け、さらにその内側には1本のクシ状工具による斜格子文が描かれている。4は、口縁部が短く外反し、口縁端部は上方にのみ拡張する。口縁拡張部にはヘラ状工具による刻目文、内面には5本単位からなるクシ状工具によって波状文が施され、さらに内側には6本単位からなるクシ状工具によって直線文が描かれている。5は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁拡張部には3本単位からなるクシ状工具によって山形文、内面には斜格子文が施されている。6も形態的にはほぼ同様であるが、無文である。7は、口縁部がやや長めに外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁拡張部にはヘラ状工具によって刻目文が密に施されている。8は、口縁部が大きく開くタイプのものであるが、口縁拡張部には2本単位からなるクシ状工具によって山形文を施し、内面から外面に向かって2以上の穿孔が認められる。9～11は、口縁部が大きく朝顔状に開くが、無文である。9・10は、口縁端部は下方にのみ拡張し、11はわずかに上下に拡張している。12は、頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部は大きく朝顔状に開き、口縁端部はわずかに上下に拡張し、口縁拡張部には3本単位からなるクシ状工具によって山形文がめぐらされている。頸部外面には刻目文を施した三角形文帯を2以上貼付け、その上方はハケによる調整が行われ、頸部内面には丁寧なミガキによる調整が行われている。13は、口縁部が短く外反し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。頸部外面は縦方向のハケ、頸部内面の上方は横方向のミガキ、下方は縦方向のミガキによって調整されている。なお、口縁拡張部から口縁部内面にかけては無文である。14は、やや長めの外反する口縁部を有し、口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁拡張部には4本単位からなるクシ状工具によって山形文を施している。頸部外面には縦方向のハケによる調整が認められる。15・16は、口縁部が短く外反し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部の平坦面は強くナデて凹面を作り出している。17は、口径9.9cmを測るやや小



第56図 遺構外出土遺物実測図(1)



第57図 遺構外出土遺物実測図(2)

形の壺である。口縁部は短く外反し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部外面は縦方向のハケによる調整が行われ、口縁部の内外面にはススが付着している。

以上のような壺は、その特徴から、おおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

第57図-18~31は、弥生土器の壺である。18は、口縁部は外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張して平坦面を作っている。また、口縁拡張部はナデでわずかに凹面を作り出し、頸部下外面はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。19は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。口縁部外面はナデ、内面下方には一部ハケによる調整が認められる。頸部下の外面はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。20は、口縁部が外方に比較的ゆるく屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張する。口縁拡張部にはナデでわずかに凹面を作り出している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は粗い斜め方向のハケによる調整が行われている。21は、口縁部が外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張して平坦面にはナデでわずかに凹面を作り出している。22は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は縦・斜め方向のハケによって調整されている。23は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張して頸部外面には指頭圧痕が認められる。24は、口縁部は強く外方に屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張している。頸部下外面は細かい縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。胸部はかなり張り出し、外面全体にススが付着している。25は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部はわずかに上下に拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。26は、頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は上方にのみ拡張する。頸部下外面はナデ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。27は器壁が薄く、口縁部は外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面口縁部にはススが付着している。28は、口縁部は外方に鋭く屈折して口縁端部は内湾ぎみに立ち上がり、上方にのみ拡張している。頸部下外面は細かい縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。29は、口縁部が強く外方に屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張している。頸部下外面は縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。なお、外面口縁部にはススが付着している。30も形態的にはほぼ同様である。31は、口縁部が外方に強く屈折し、口縁端部は拡張せず丸くおさめている。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面にススが付着している。

第58図-32~37も弥生土器の壺である。32は、口縁部は外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部はわずかに上方に拡張している。頸部下は外面ともナデによる調整が行われている。33は、口径11.6cmを測る小形の壺で、口縁部は外方に鋭く屈折し、口縁端部は拡張しない。頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われ、外面にはススが付着している。34は小片で口縁部の開き方は判断できないが、口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面はナデ、内面は上方に横方向のハケ、その下方はケズリによる調整が行われている。内面がケズリによって調整されていることから、弥生時代後期以降のものと考えられ、ミニチュア土器の可能性もある。35は、口縁部

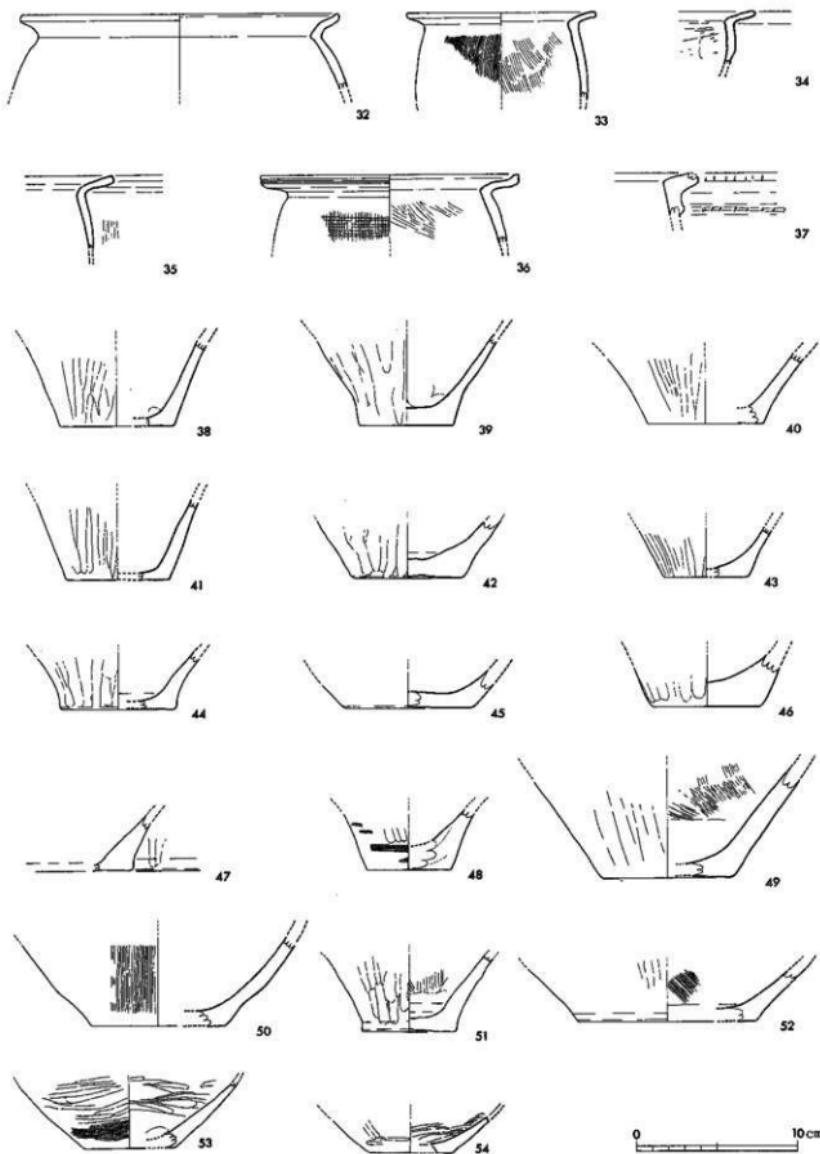
が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部は拡張せず丸みを帯びておさめている。風化が著しいが、頸部下外面は縦方向のハケによる調整が行われている。36は、口縁部が外方に鋭く屈折し、口縁端部は上方にのみ拡張する。口縁拡張部には1条の凹線文が施されている。頸部下外面は縦・横方向のハケによって格子状の文様を施し、内面は斜め方向のハケによって調整されている。前述した壺よりもやや新しく、弥生時代中期後葉のものであろう。また、外面が格子状のハケによって調整される例は珍しい。37は、口縁部が短く外反して口縁端部にやや平坦な面を作り出し、ヘラ状工具によって刻目文を施している。外面頸部下には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、内外面ともナデによる調整が行われている。

以上のような壺は、形態的には様々な特徴をもっているが、おおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料であり、弥生時代中期中葉のものであろう。しかし、中には34・36のように弥生時代中期中葉から後期にかけてのものも少量ながら確認されている。

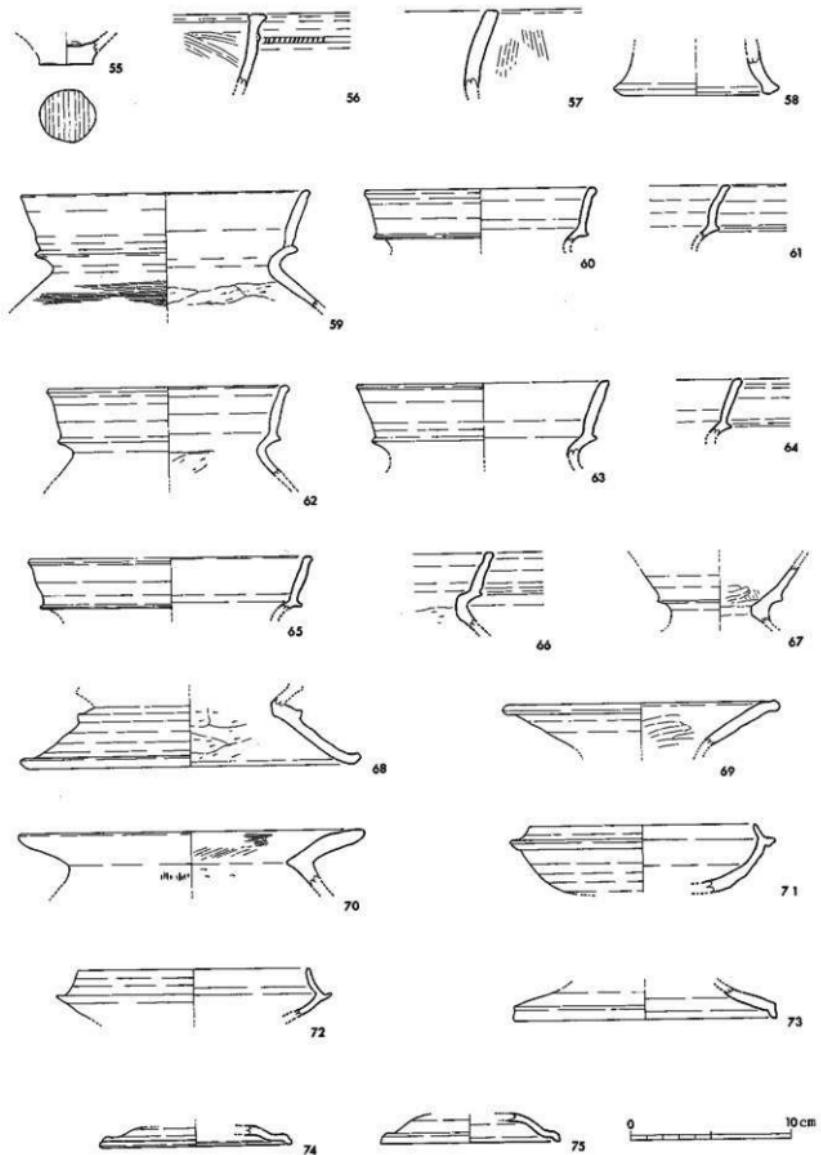
第58図-38~54は、弥生土器の壺あるいは壺の底部から胴部にかけての破片である。38は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が残っている。同様なタイプのものには40・41・43・47がある。39は、底部から胴部にかけて外反ぎみに立ち上がる。外面は縦方向のやや幅が広いミガキ、内面はナデによる調整が行われ、底部付近には指頭圧痕が残っている。なお、外面がやや幅の広いミガキによって調整されるタイプのものには、42・44・46などがあり、底部から胴部にかけて外反ぎみに立ち上がるものには、44・47などがある。45・46は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。48は、底径5.2cmとやや小さく、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は縦方向のミガキと細かいハケ、内面はナデによる調整が行われている。49も底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外面は縦方向のやや幅が広いミガキ、内面底部付近はナデ、その上方は斜め方向のハケによる調整が行われている。50は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。このように、外面が縦方向のハケによって調整される土器は出雲地域では珍しい。51は、底部から胴部にかけて外反ぎみに立ち上がる。外面はやや幅の広い縦方向のミガキ、内面底部付近はナデ、その上方は斜め方向のハケによる調整が行われている。52は、外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケによって調整されている。53は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面底部付近は横方向の細かいハケ、その上方は丁寧な横方向のミガキ、内面も丁寧な横方向のミガキによる調整が行われている。なお、外面の一部にはススが付着している。54は、底部から胴部にかけて内湾ぎみに立ち上がる。外面は縦・横方向のミガキ、内面は丁寧な横方向のミガキによる調整が行われている。また、底部もミガキによって調整されている。53・54のように横方向のミガキによって調整される土器は、SD03・SD04・SD09からも数点出土しているが、松本編年Ⅲ様式の系統を引くやや古い様相を示すものであろう。

以上のような壺あるいは壺の底部は、その特徴からおおよそ松本編年Ⅲ-1~2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。このうち、53・54については、前述したようにやや古い様相を示すものであろう。

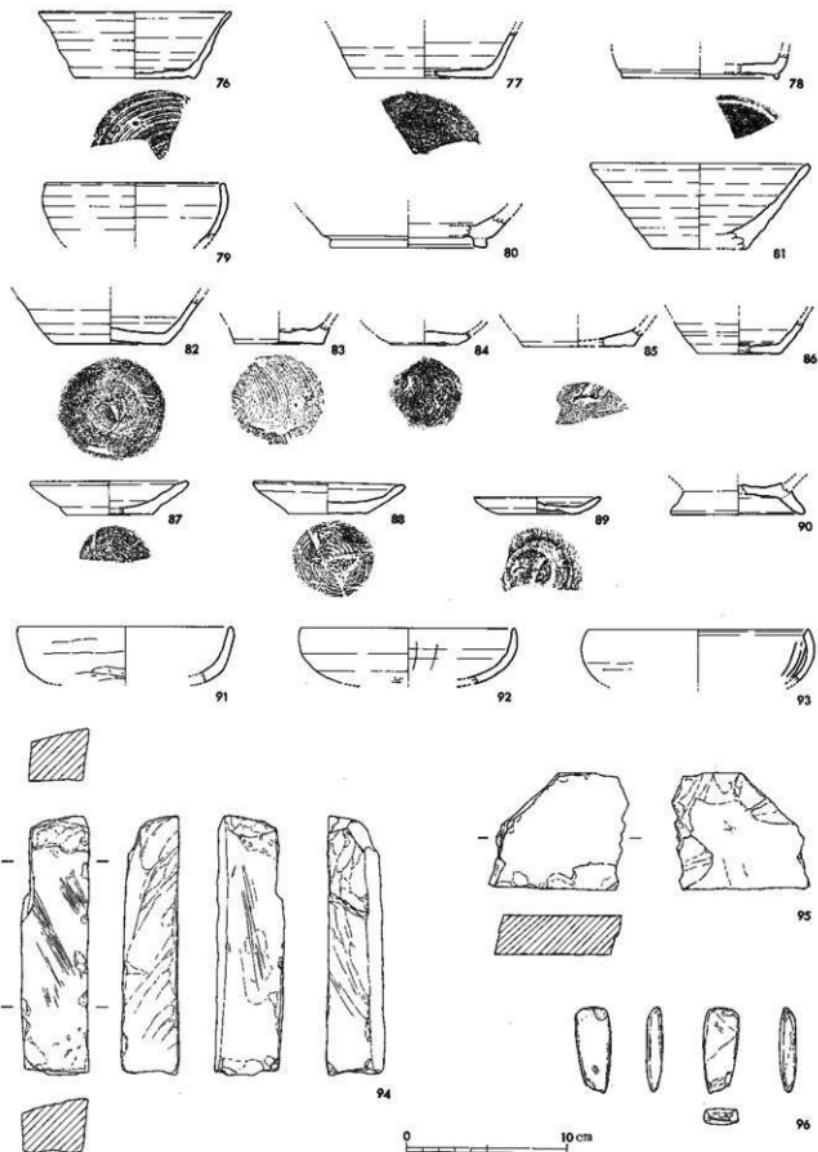
第59図-55は、壺あるいは壺の底部であるが、底径3.3cmと小さいものである。底部外面は板



第58図 遺構外出土遺物実測図(3)



第59図 造構外出土遺物実測図(4)



第60図 造橋外出土遺物実測図(5)

目（あるいはハケ）による調整が行われている。底径が小さく、胴部が張り出すという特徴から、松本編年V様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期のものであろう。

56・57は、弥生土器の鉢であろうか。56は、口縁部が肥厚して口縁端部は内外に水平方向に突出している。外面には刻目文を施した三角形文帯を貼付け、その下方はナデ、内面は丁寧な斜め方向のミガキによる調整が行われている。57は、やや外傾して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はほぼ平坦におさめている。外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。

以上のような鉢は、57がやや古い様相を示すものの、松本編年III-1～2様式の範疇に入る資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

58は、弥生土器高壺の脚部である。脚端部は肥厚して内外にわずかに拡張し、平坦面を作り出している。裾部は内外面ともにナデによる調整が行われている。弥生時代中期中葉頃のものであろう。

第59図-59～66は、複合口縁をもつ古式土師器の甕である。59は、口縁端部をわずかに外方に折り曲げて平坦面を作り、複合口縁の稜は水平方向に向いている。口縁部は内外面ナデ、頸部下の外面は横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。60は、口縁端部を外方に折り曲げているが平坦面を作らず、丸みを帯びておさめ、複合口縁の稜は水平方向に鋭く突出している。このような形態をもつものには、64～66がある。61は、口縁端部は折り曲げていないがほぼ平面におさめている。62・63は、口縁端部を外方に折り曲げて口縁端部に平坦面を作っている。

以上のような甕は、その特徴から、59・62・63については草田編年7期に相当する資料と考えられ、古墳時代前期初頭のものであろう。また、60・61・64～66は草田編年6期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

67～69は古式土師器の器台である。67は、筒部から受部にかけての破片で、外面はナデ、内面は横方向のミガキによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に鋭く突出している。68は、脚部から筒部にかけての破片で、脚端部を上方に折り曲げている。外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われ、筒部の稜は水平方向に突出するがやや鋭さを欠く。69は受部の破片で、外面はナデ、内面は縦方向のミガキによる調整が行われている。

以上のような器台については時期的な判断は難しいが、他の古式土師器の形態的特徴から考えると草田編年5～7期に相当する資料と考えられる。

70は、土師器の甕である。口縁部は鋭く外方に屈折し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面はナデ、内面はナデと一部にハケによる調整が行われ、頸部下の外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。古墳時代後期以降の遺物であろう。

71・72は須恵器の壺身である。71は、口縁部は鋭く内傾し、外面上方は回転ナデ、下方はケズリ、内面は回転ナデにより調整されている。高広編年I B～II A期頃にかけての資料と考えられ、6世紀末から7世紀前葉にかけてのものであろう。72は、口縁部は内傾して長く伸び、内外面は回転ナデによって調整されている。71よりやや古めの特徴をもつもので、高広編年I A～I B期、6世紀後葉から7世紀初頭にかけてのものであろう。

73～75は壺蓋である。73は、口縁部にはかえりがなく、短く直立するもので、内外面ともに回転ナデによる調整が行われている。74・75は器高が低く、口縁端部は屈曲して短く直立するもので

ある。いずれも高広編年ⅢB期以降に相当する資料で、7世紀末～8世紀代のものであろう。

第60図-76～80は、須恵器坏である。76は、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。形態的には77もほぼ同様であり、8世紀中葉以降に出現する器形である。78は、高台をもつ坏である。高台部は短く直立し、断面は四角形を呈している。79は、坏の口縁部から体部にかけての破片で、内湾しながら立ち上がり、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。80は、高台をもつ坏で、高台部は短く直立し、断面は四角形を呈している。79は8世紀中頃、78・80は8世紀末以降のものであろうか。

81～86は土師器の坏である。81は、底径5.8cm、口径13.3cm、器高5.5cmを測り、底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる。内外面は回転ナデによって調整され、底部は回転糸切りにより切り離されている。10世紀前後のものであろう。82・86は、底部が静止糸切り後、ナデによって糸切り痕を消している。83は、底部に回転糸切りの痕跡が2度ある。84・85は内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。82・86は奈良時代、84・85は平安時代以降のものであろう。

87～89は、土師器の小皿である。87・88は内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りにより切り離されている。89は、底部がヘラ切りによって雑に切り離されている。土師器小皿は11世紀後半以降に出現する器形であることから、それ以降のものであろう。

91～93は、土師器高坏であり、内外面ともに朱塗りされるものである。91は、坏部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面上方はナデ、下方はケズリ、内面はナデによる調整が行われている。また、内外面の朱は、一般的にみられる朱と異なり、暗赤褐色を呈している。成分の違いであろうが、このような朱は、出雲地方の山間部でよくみられるものである。92は、坏部が内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面上方はナデと下方の一部にはハケ、内面はナデによって調整され、内面には暗文が施されている。93は、坏部が内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾して平坦面を作り出している。外面上方はナデ、下方はケズリ、内面はナデによる調整が行われ、暗文が施されている。以上のような高坏は、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであろう。

94～96は、石器である。94は、ほぼ完形の砥石であり、三面に使用痕が残っている。石材には安山岩を用いている。95は、両端が欠損しており、用途は不明であるが、二面に使用痕が残っている。砥石として使用された可能性もある。石材には桂質頁岩を用いている。96は、扁平片刃石斧である。刃部が欠損しているが、全面を磨いている。石材には桂質頁岩を用いている。94・95については時期は不明であるが、96は弥生時代のものであろう。

註

- (1) 「天満谷遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会（1987年）
- (2) 「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢 第18集』川原和人・桑原真治（1987年）
- (3) 「藤ヶ森遺跡（I 地点・II 地点）発掘調査報告書」出雲市教育委員会（1998年）
- (4) 「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告」島根県教育委員会（1982年）
- (5) 角田徳幸氏（島根県埋蔵文化財調査センター）の御教示による。
- (6) 角田徳幸氏（島根県埋蔵文化財調査センター）の御教示による。
- (7) 「池の奥古墳群」『松江東工業団地内発掘調査報告書』（1990年）
- (8) 「中竹矢1号墳・長峯遺跡」松江市教育委員会（1987年）
- (9) 「南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会（1992年）
- (10) 「弥生土器の様式と編年・山陰・山陽編」正岡勝夫・松本岩雄編 木耳社（1992年）
- (11) 「朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ」島根県教育委員会（1987年）
- (12) 「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）」島根県教育委員会（1988年）
- (13) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」出雲市教育委員会（1997年）
- (14) 「一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ（布田遺跡）」島根県教育委員会（1991年）
- (15) 「天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ」出雲市教育委員会（1986年）
- (16) 「吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について」『山口大学遺跡調査研究年報XII』豆谷和之（1993年）
- (17) 「大木権現山古墳群」東出雲町教育委員会（1979年）
- (18) 「南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会（1992年）
- (19) 「山持川川岸遺跡」出雲市教育委員会（1996年）
- (20) 「天神遺跡」出雲市教育委員会（1977年）
- (21) 「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会（1984年）

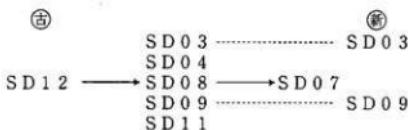
V. 総括

1. 造構

(1) 弥生時代中期中葉頃の造構

弥生時代中期中葉頃に築かれた造構は、溝状造構9条(SD03・04・07~09・11・12)を検出している。平面形態はSD12が途中で分岐し、やや蛇行しているが、その他の溝状造構は全てが直線状のものである。また、SD07以外は東南東から西北西に伸びるもの(SD03・04・08・09・11・12)であることが特徴である。深さは0.1~0.2mと浅いものがSD07・08・11、0.5m程度のものがSD03・04・12、それ以上、深さ1.0mのものがSD09である。また、溝の幅が、1.0m以下のものはSD07・11、1.0~1.5m程度のものがSD08、それ以上の規模なものがSD03・04・09・12であり、SD09に至っては溝幅5.52mを測る非常に大規模なものである。

これらの溝状造構は複雑な切合関係を有しているが、相互の関係を整理して示すと次のようになる。



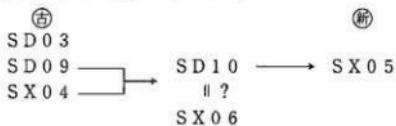
このうち、弥生時代中期中葉頃の遺物のみが出土している造構は、SD04・07・08・11・12で、切合関係から、SD12が最も古い造構であることが明らかである。しかし、SD03・09については、弥生時代中期中葉頃の遺物が圧倒的に多いが、中には弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物が混入していることから、注意が必要である。覆土には、掘り直しと考えられるような箇所は認められない。また、古式土師器は底面直上からも検出されており、弥生時代後期と考えられる遺物はほとんど含まない。このことからSD03・09は、弥生時代中期中葉頃に築かれた溝が、後期にはほとんど機能しなくなり、弥生時代終末期に再び同じ箇所を掘り返して利用された可能性が強い。

また、SD09については、第7次発掘調査A区で検出された大溝1(第61図)と造構の規模・方向がほぼ一致する。大溝1からは、弥生時代中期中葉頃の遺物のみが検出されていることから、当該期の造構と解されている。しかし、調査範囲も狭小であり、上面が他の造構によって切られているために時期的判断はし難く、SD09と同一の溝である可能性が指摘できる。

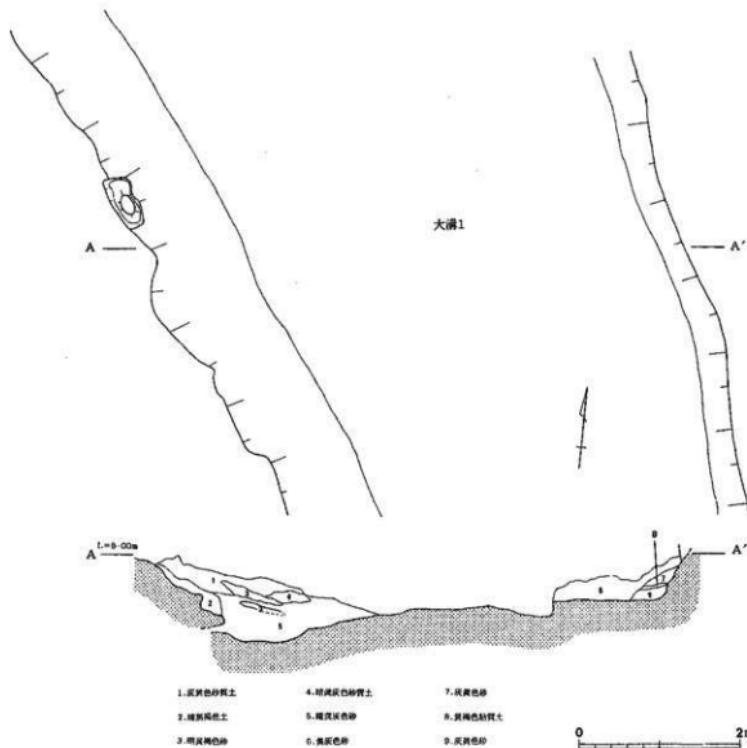
これら溝状造構の性格については、水路・区画を示すものなどいくつかの可能性が考えられるが、調査範囲も狭く、その様相を据えることは困難である。しかし、SD03・04・09については、溝の規模や時期から考えても第7次発掘調査で検出されたような集落を囲繞する環濠として機能していた可能性もある。なお、第7次発掘調査時にもそうであったように、溝の方向が、ほぼ同一方向に伸びる傾向にあることは、今後も注視していく必要がある。

(2) 弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構

当該期の造構は、前述したSD03・09を含めると、溝状造構3条 (SD03・09・10)、落ち込み状造構3 (SX04・05・06) を検出している。それぞれの造構が複雑な切合関係を有しているが、相互関係を整理して示すと次のようになる。



出土遺物は総じて少ないが、この中でもっとも新しい時期の遺構である S X 0 5 からは、古墳時代前期初頭の遺物が検出されており、他の遺構はこれよりも古い遺構であることが明らかである。しかし、S D 0 9 は弥生時代終末期に再び掘り直されたと考えられることから、これらの遺構が機能していたのは比較的短期間であったと思われる。



第61図 第7次調査大柄1実測図

なお、これらの遺構の性格については、調査範囲も狭いうえ、新しい時期の遺構によって切られている部分が大きく、判断し難い。

(3) 古代から中世にかけての遺構

この時期に築かれた遺構には、溝状遺構1条（SD06）、土坑状遺構5（SK02～SK06）、ピット状遺構9（P1～P9）を検出している。

これらのうち、平安時代末期頃に築かれたと考えられる遺構には、SK03～SK06・P4～P9がある。特にSK04・SK06からは多くの遺物が検出されているうえ、白磁も共伴していることから、良好な資料となっている。時期的には、11世紀後半から12世紀代にかけての遺構であろう。

また、切合関係からやや新しい時期に築かれた遺構には、SK02・SX02・03・P1～P3がある。これらの遺構は、上部が削平されているために残存状況が悪く遺物も認められないが、少なくとも12世紀後半以降に築かれた遺構である。

遺構の性格については、SK03・04・05・06は最深部は灰白色粗砂層に達し、かなりの湧水があることから考えても井戸として利用されていたと考えられる。このうちSK03の下層には木片が認められ、SK06からは側板・杭が検出されていることから、木枠組みの井戸であったと考えられる。SK04・05については、素掘りの井戸であったようで、木片などは確認されていない。なお、SK04・06は大量の遺物が出土していることから、井戸を廃棄する際に、土器を投げ入れて祭祀を行った可能性が指摘される。

その他の遺構の性格については、上部が削平されていることや調査範囲が狭いことから判断し難い。なお、ピット状遺構については、建物跡と想定できるような配置は認められない。

2. 遺物

(1) 弥生時代の遺物

弥生時代の出土遺物は調査を通して最も多く、器種には壺・甕・鉢・高杯・蓋などがある。時期的には松本編年Ⅲ-1～2様式に相当するものがほとんどであるが、中にはⅦ-1様式・V様式に相当するものも若干認められている。

壺には、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部が拡張して口縁拡張部から内面にかけて文様を施す例が圧倒的に多い。中でもクシ状工具によって斜格子文を施すものの割合が多く、これらは「天神式」と呼べるものであろう。特異なものとしては、第49図-16のように口縁部が水平方向に突出し、口縁端部を丸くおさめているものがある。瀬戸内・北部九州地方の影響を受けたものであろう。

甕は、口縁部が外方に「く」の字状に屈折し、口縁端部に平坦面をもつものと丸くおさめるものが多く、頸部下外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによって調整されるものがほとんどである。特異なものとしては、口縁部外面が丁寧なミガキによって調整される第49図-18などがある。

壺あるいは甕の底部から胴部にかけての破片には、この時期のものとしてはやや特異なものが数点出土している。この時期のものは、外面は縦方向のミガキ、内面はナデ、またはハケによって調整が行われるのが一般的である。しかし、内面が横方向のミガキによって調整される（第30図-1など）

もの、外面が横方向のミガキによって調整される（第45図-7）もの、内外面とも横方向のミガキによって調整される（第58図-53など）ものが検出されている。これらの土器は、II-1様式の系譜を引く、やや古い様相を示すものではないだろうか。

鉢・高坏にもやや異なる形態的特徴をもつものがある。在地的な手法の特徴で、一般的なもののバリエーションの中で考えられるものである。

弥生時代の石器も数点出土しており、砥石や扁平片刃石斧などが出土している。中でも、第41図-47は朱の痕跡のようなものが認められ、注目すべき遺物である。

(2) 弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺物

この時期の遺物は量的には少ないが、器種には壺・高坏・低脚坏・器台などがある。時期的には草田編年⁽³⁾5期～7期に相当する資料である。

このうち、壺には布留式傾向の特徴をもつもの（第52図-75～78）が数点出土している。これらは、出雲地域の胎土とほとんど同じであることから、畿内の壺を模倣して作られたものと考えられる。他の器種は出雲地域の特徴をもつものであり、一般的な調整により作られているものである。

(3) 古代から中世にかけての遺物

この時期の遺物は、SK04・06など遺構内からの出土量が多く、そのうち、土師器坏が大部分を占めている。器種としては、土師器坏のほか、足高高台付坏・台付坏・小皿・壺・須恵器壺・白磁碗がある。

足高高台付の坏・小皿は、11世紀後半以降に出現する器形であるとともに、11世紀後半から12世紀代にかけての口縁部に玉縁状の突帯が付く白磁が出土していることから、この時期の土師器の編年を考えるうえで、貴重な資料である。

また、土師器壺の中には外面がタタキ、内面が強いケズリによって調整される出雲地域では珍しいものも出土しており、注意すべき資料である。

3. おわりに

今回の発掘調査では範囲が極めて限定されていたこともあり、遺構の性格を十分に把握することができなかった。しかし、周辺には大規模な溝状遺構が多数存在することが明らかであり、その中には、環濠として機能していた可能性があるものがある。天神遺跡の周辺は早くから宅地化が進み、立錐のすきまもないほどであるが、今後調査する機会があれば、遺跡の実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えていくことが望まれる。

註

- (1) 「天神遺跡第7次発掘調査報告書」出雲市教育委員会（1997年）
- (2) 「弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編」正岡勝夫・松本岩雄編 木耳社（1992年）
- (3) 「南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会（1992年）

出土遺物観察表（土器）

掲図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13-1	B3Gr SK03	土師器 环	-	5.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	普通 lmの白粘土、 石英を含む	普通	
-2	B3Gr SK03 (下層)	土師器 环	-	4.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	普通 石英を多 く含む	良好	
-3	B3Gr SK03 (下層)	土師器 环	-	5.9	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/淡橙褐色 内/暗褐色 断/褐色	密 石英・雲 母を含む	普通	
-4	B3Gr SK03 (下層)	土師器 环	-	4.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	普通 石英を多 く含む	良好	
16-1	B4Gr SK04	土師器 环	-	6.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英・雲 母・金 雲母を含む	良好	
-2	B4Gr SK04 (中層～下層)	土師器 环	-	4.7	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密 石英を多 く含む	良好	
-3	B4Gr SK04	土師器 环	15.7	6.0	4.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	普通 lmの白粘土、 石・鈣を含む	良好	
-4	B4Gr SK04 (中層～下層)	土師器 环	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗褐色	普通 lmの白粘土、 石・鈣を含む	やや不良	
-5	B4Gr SK04	土師器 环	-	5.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	普通 lmの白粘土、 石英を含む	普通	
-6	B4Gr SK04	土師器 环	14.0	5.8	4.6	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	やや粗い lmの白粘土、 石英を含む	やや不良	外面スス付着
-7	B4Gr SK04	土師器 环	-	6.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 lmの白粘土、 石を含む	良好	
-8	B4Gr SK04	土師器 环	-	6.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/黒褐色 内/赤褐色 底/黒褐色	密 lmの白粘土、 石・鈣を含む	良好	
-9	B4Gr SK04 (中層)	土師器 环	-	6.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗褐色 (一部橙褐色)	密 lmの白粘土、 石・鈣を含む	普通	
-10	B4Gr SK04	土師器 环	15.6	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	黑褐色	密 石英・雲 母を含む	普通	
-11	B4Gr SK04	土師器 小皿	7.2	4.0	1.35	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	内/暗褐色 外/暗褐色 断/暗褐色	やや粗い lmの白粘土、 石英を含む	やや不良	内外面にスス付 着

番号	出土地点	器種	法 長(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
16-12	B4Gr SK04	土師器 小皿	7.4	3.8	2.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	やや粗い lm大的白色斑， 砾・錆斑	普通	
-13	B4Gr SK04 (中脇～下脇)	土師器 小皿	7.6	4.0	1.8	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡灰褐色	普通 石英を含む	良好	
-14	B4Gr SK04	土師器 足高台付 环	-	8.0	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	褐色	普通 lm大的白色斑， 砾・錆斑	良好	外面スス付着
-15	B4Gr SK04	土師器 台付 环	-	3.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄褐色	密 lm大的白色斑， 砾・錆斑	普通	
-16	B4Gr SK04	白磁 碗	19.7	-	-	外／ナデ 内／ナデ	乳白色	密	良好	
19-1	A4Gr SK05	土師器 环	-	4.0	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 lm大的白色斑， 砾・錆斑	良好	
-2	A4Gr SK05 (中脇)	土師器 环	-	4.0	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英を含む	良好	
-3	A4Gr SK05	土師器 环	-	5.3	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄褐色	密 石英を含む	普通	
-4	A5Gr SK05	土師器 环	-	4.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
-5	A5Gr SK05	土師器 环	21.8	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／橙褐色 内／暗褐色 断／橙褐色	密 石英を含む	良好	口縁部にスス付着
-6	A4Gr SK05	土師器 小皿	8.6	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡褐色	密 石英を多く 含む	良好	
-7	A4Gr SK05	土師器 小皿	8.8	3.9	1.95	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	黄褐色	密 石英を含む	良好	
22-1	A3Gr SK06	土師器 环	14.8	6.2	4.75	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／褐色 内／橙褐色 断／褐色	密 lm大的白色斑， 砾・錆斑	良好	回転水引き痕明瞭に残る
-2	A3Gr SK06	土師器 环	16.0	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	普通 lm大的白色斑， 砾・錆斑	普通	回転水引き痕残る
-3	A3Gr SK06 (下脇)	土師器 环	-	5.2	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	密 砾・錆斑多 (鉛)	良好	

拂図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
22-4	B3Gr SK06	土師器 坏	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 lm状の色斑・ 石・鈍を含む	良好	底部に厚みがある
-5	B3Gr SK06	土師器 坏	-	5.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 lm状の色斑・ 石・鈍を含む	良好	
-6	B3Gr SK06	土師器 坏	-	7.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/黒褐色 内/褐色 底/褐色	普通 lm状の色斑・ 石・鈍を含む	良好	
-7	B4Gr SK06 (中層)	土師器 坏	-	5.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英・金雲母を 含む	良好	
-8	B3Gr SK06	土師器 坏	-	4.3	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
-9	B3Gr SK06	土師器 坏	-	6.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/褐色 内/橙褐色 底/橙褐色	普通 肥歯子・石英を 含む	普通	
-10	A3Gr SK06 (下層)	土師器 坏	-	5.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	黄褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-11	B3Gr SK06 (下層)	土師器 坏	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/灰褐色 内/褐色 底/淡褐色	普通 石英を含む	普通	
-12	B3Gr SK06 (下層)	土師器 坏	-	5.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	やや粗い lm状の色斑・ 石・鈍を含む	良好	
-13	B3Gr SK06 (下層)	土師器 坏	-	5.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	回転水引き痕 隙に残る
-14	B3Gr SK06	土師器 坏	-	5.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 lm状の色斑・ 石・鈍を含む	良好	
-15	B4Gr SK06	土師器 坏	--	5.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	底部にへう状工具による調整痕 あり
-16	A4Gr SK06	土師器 坏	--	7.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・金雲母を含む	普通	
-17	B3Gr SK06	土師器 坏	12.2	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	橙褐色	普通 lm状の色斑・ 石・鈍を含む	普通	
-18	B3Gr SK06	土師器 坏	14.0	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	橙褐色	密 lm状の色斑・ 石・鈍を含む	良好	

押出番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
22-19	A3Gr SK06	土師器 环	15.6	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡橙褐色	密 lm以下(鉛,硬,鋸を含む)	普通	
-20	A3Gr SK06	土師器 环	15.0	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	外/褐色 内/褐色 新/暗褐色	密 lm以下(鉛,硬,鋸を含む)	良好	
-21	B4Gr SK06 (中層)	土師器 环	-	5.9	-	外/回転ナデ? 内/回転ナデ? 底/回転糸切り?	暗褐色 (一部橙褐色)	密 lm以下(鉛,硬を含む)	良好	須恵器のような 焼成
23-22	B3Gr SK06	土師器 小皿	8.0	4.6	2.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英,金雲母を 含む	良好	外面口縁部にス ス付着
-23	A4Gr SK06 (下層)	土師器 小皿	7.4	4.0	1.75	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	普通	良好	
-24	A3Gr SK06 (上層)	土師器 小皿	9.3	5.6	2.15	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 lm以下(鉛,硬,金 雲母を含む)	普通	
-25	A3Gr SK06 (下層)	土師器 小皿	10.3	5.0	1.95	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
-26	B4Gr SK06	土師器 小皿	8.2	4.4	2.4	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 石英を含む	良好	
-27	B3Gr SK06	土師器 小皿	8.9	4.8	2.0	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	やや粗い lm以下(鉛,硬,鋸を含む)	普通	
-28	B3Gr SK06	土師器 台付 环	-	4.8	-	外/回転ナデ 内/不明 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英を含む	良好	
-29	B4Gr SK06 (下層)	土師器 足高台付 环	-	4.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡橙褐色	密 lm以下(鉛,硬を含む)	良好	
-30	B5Gr SK06	土師器 足高台付 环	-	7.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	外/褐色 内/褐色 新/暗褐色	密 lm以下(鉛,硬,鋸を含む)	良好	坏部内面に黒褐色の付着物あり
-31	A3Gr SK06 (上層)	土師器 足高台付 环	-	9.5	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡褐色	密 鉛粒子,硬,金 雲母を含む	良好	
-32	A3Gr SK06	土師器 足高台付 环	-	5.5	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡褐色	密 石英を含む	良好	
-33	A3Gr SK06	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/不明 内/ケズリ	外/黒褐色 内/暗褐色 新/褐色	密 lm以下(鉛,硬を含む)	良好	搬入品の可能性 あり 外面スス付着

掲回番号	出土地点	器種	法 量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
23~34	A4Gr SK06	土師器 甕	25.5	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/タキ 内/ケズリ	外/黒褐色 内/褐褐色 断/褐色	普通 lm以下白胎土 石英を含む	良好	搬入品の可能性 あり 外面スス付着
—35	A4Gr SK06 (中層)	土師器 甕	—	—	—	外/タキ 内/ケズリ	外/黒褐色 内/褐褐色 断/黒褐色	普通 lm以下白胎土 石英を含む	良好	搬入品の可能性 あり 外面スス付着
—36	B3Gr SK06 (下層)	土師器 甕	23.4	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/タキ 内/ケズリ	外/黒褐色 内/褐褐色 断/褐色	やや粗い lm以下白胎土 石英を含む	良好	搬入品の可能性 あり 外面スス付着
—37	A3Gr SK06 (上層)	土師器 高环	14.0	—	—	环部内外面ナデ 脚部付近外面一部ハケ	褐褐色	密 lm以下白胎土 石英を含む	普通	内外面朱塗り
—38	A3Gr SK06	土師器 甕	21.6	—	—	口縁部 外/ナデ 内/ナデ、一部ハケ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	黒褐色	密 lm以下白胎土 石英を含む	良好	
—39	A4Gr SK06	須恵器 壺	—	6.6	—	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転系切り	黒褐色	密	良好	内面底部に自然 釉がかかる
—40	B3Gr SK06	白磁 甕	—	—	—	外/ナデ 内/ナデ	淡綠灰色	密 lm以下白胎土 石英を含む	良好	口縁部に玉縁が つく
25~1	B5Gr SX05	古式土師器 甕	15.4	—	—	口縁部外面ナデ 頸部下 外/直籠文、斜め方向ハケ 内/ケズリ	黄褐色	密 石英、重晶、金 雲母を含む	普通	外面スス付着
31~1	南側溝 土器群1 (SD03)	弥生土器 壺or甕	—	8.6	—	外/縦方向ミガキ 内/底面付近横方向ミガキ、斜 め方向ハケ	外/褐色 内/淡黃褐色 断/褐色	密 lm以下白胎土 石英を含む	良好	外面縦部にスス付着 内面縦部に指擦圧痕 がある
32~2	A1Gr SD03	弥生土器 壺	27.4	—	—	内外面ナデ 口縁端部の両端に刻目 文	外/褐色 内/黄褐色 断/褐色	やや粗い lm以下白胎土 石英を含む	普通	口縁端部上下に わざかに拡張する
—3	A1Gr SD03	弥生土器 壺	17.2	—	—	口縁部内外面ナデ 頸部 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハケ 口縁端部に斜格子文	外/褐色 内/黄褐色 断/褐色	普通 lm以下白胎土 石英を含む	良好	口縁端部上下に わざかに拡張する
—4	B2Gr SD03	弥生土器 壺	19.4	—	—	口縁部内外面ナデ	外/褐色 内/淡褐色 断/淡褐色	普通 石英を含む	普通	口縁端部上下に わざかに拡張する
—5	A1Gr SD03	弥生土器 壺	16.2	—	—	口縁部内外面ナデ	外/黒褐色 内/黒褐色 断/灰褐色	密 lm以下白胎土 石英を含む	普通	
—6	B3Gr SD03	弥生土器 甕	15.8	—	—	口縁部内外面ナデ	褐色	やや粗い lm以下白胎土 石英、重晶、金 雲母を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
—7	B2Gr SD03	弥生土器 甕	30.0	—	—	口縁部内外面ナデ 口縁端部の両端に刻目 文	褐色	やや粗い lm以下白胎土 石英、重晶、金 雲母を含む	良好	口縁端部上下に 拡張する

辨認番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
32-8	A1Gr SD03	弥生土器 壺	-	-	-	外／縁部貼付実帯に刻目文、 肩部に直線文・波状文 内／ナデ	外／褐色 内／淡黄褐色	やや粗い lmRtの色斑、 砾・鈍・錆斑 を含む	良好	
-9	A1Gr SD03	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に円形浮文、 刻目文	外／褐色 内／淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁部内面に三 角形文帯を貼付 け刻目文
-10	A1Gr SD03	弥生土器 壺	16.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／ケズりの後、斜 め方向ハケ	外／淡黄褐色 内／淡褐色 新／淡褐色	やや粗い lmRtの色斑、 砾・鈍・錆斑 を含む	普通	
-11	B2Gr SD03	弥生土器 壺	16.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／窓・斜め方向 にハケ	淡黄褐色	やや粗い 石英を含む	やや不良	口縁部に斜格子 文
-12	A1Gr SD03	弥生土器 壺	19.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／ナデ	淡黄褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	
-13	B3Gr SD03	弥生土器 壺	13.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／ナデ 内／ナデ	褐色	やや粗い lmRtの色斑、 砾・鈍・錆斑 を含む	良好	
-14	B3Gr SD03	弥生土器 壺	13.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に 刻目文	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
-15	B3Gr SD03	弥生土器 壺	18.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に 刻目文	外／褐色 内／淡黄褐色 新／淡褐色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-16	A1Gr SD03	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／ケズりの後、 ミガキ	外／褐色 内／褐色 新／灰褐色	密 lmRtの色斑、 砾・鈍・錆斑 を含む	良好	
-17	B2Gr SD03	弥生土器 壺	12.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／ミガキ、斜め 方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
33-18	南側溝 土器群1 (SD03)	弥生土器 壺	29.1	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／窓・斜め方向 ハケ	外／淡黄褐色 内／淡褐色 新／灰褐色	密 石英・雲母を含む	良好	
-19	A1Gr SD03	弥生土器 壺	29.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頂部下 外／縦方向ハケ 内／横方向ハケ	外／黃褐色 内／淡褐色 新／灰褐色	密 lmRtの色斑、 砾・鈍・錆斑 を含む	良好	
-20	B2Gr SD03	弥生土器 壺or壺	-	10.4	-	外／縦方向ミガキ、一 窓ハケ 内／剥離のため不明	外／淡褐色 内／不明 新／灰褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	
-21	B2Gr SD03	弥生土器 壺or壺	-	7.6	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	褐色 (一部赤褐色)	密 lmRtの色斑、 砾・鈍・錆斑 を含む	やや不良	
-22	A1Gr SD03	弥生土器 壺or壺	-	5.2	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	外／淡黄褐色 内／淡褐色 新／淡褐色	密 lmRtの白色斑、 石英・雲母を含む	良好	

擇図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高					
33-23	B2Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	9.3	-	外／風化著しく不明 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／淡褐色 内／褐色 断／淡黃褐色	密 lmktの白色糊、 石・墨を含む	不良	
-24	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	7.6	-	外／縦方向ミガキ 内／ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	外／赤褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	
-25	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	14.0	-	外／縦方向ミガキ 内／縦方向ハケ	外／淡褐色 内／淡黃褐色 断／灰褐色	普通 lmktの白色糊、 石・墨・全量を含む	普通	
-26	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	5.9	-	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ、底部付近に指頭圧痕残る	外／淡褐色 内／灰褐色 断／褐色	やや粗い lmktの白色糊、 石・墨を含む	やや不良	
-27	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	7.2	-	外／風化著しく不明 内／縦方向ケズリ	外／暗赤褐色 内／赤褐色 断／淡褐色	密 lmktの白色糊、 石を含む	不良	
-28	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	7.6	-	外／縦方向ミガキ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	やや粗い lmktの白色糊、 石・墨を含む	やや不良	
34-29	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	10.5	-	外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ	淡褐色	やや粗い lmktの白色糊、 石を含む	やや不良	
-30	A1Gr SD03	弥生土器 壺or甕	-	6.8	-	外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ・ハケ、底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 lmktの白色糊、 石・墨を含む	良好	外面ス付着
-31	A1Gr SD03	古式土師器 甕	15.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下不明	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	口縁端部丸くおさめる
-32	A1Gr SD03	古式土師器 甕	16.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ケズリ	褐色	やや粗い lmktの白色糊、 石・墨を含む	良好	口縁端部平坦に作る
-33	B3Gr SD03	古式土師器 甕	14.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／淡黃褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	口縁端部平坦に作る
-34	A1Gr SD03	古式土師器 甕	12.4	-	-	口縁部内外面ナデ	外／淡黃褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	口縁端部外方に折り上げる
-35	A1Gr SD03	古式土師器 器台	22.8	-	-	外／ナデ 内／横方向ミガキ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	受部破片
-36	A1Gr SD03	古式土師器 器台	-	17.8	-	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	脚部破片
-37	A1Gr SD03	ミニチュア土器	5.2	3.3	3.95	外／手捏ね、脚部付近 ミガキ 内／手捏ね	褐色 (一部黒褐色)	密 石・墨・雲母を含む	普通	

擇図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
38-1	A2Gr SD04	弥生土器 壺	21.3	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部 外／縦方向ハケ 内／横方向ハケ	褐色	密 白・白褐色、 灰・黒を含む	良好	
-2	A1Gr SD04	弥生土器 壺	23.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部 外／縦方向ハケ 内／不明	褐色	密 石英を含む	良好	口縁端部下垂する
-3	A1Gr SD04	弥生土器 壺	22.8	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部の上端に刻目文	褐色	普通 白・白色、 灰・黒を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-4	A2Gr SD04	弥生土器 壺	23.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に 斜格子文	淡褐色	やや粗い 白・白色、 灰・黒を含む	普通	口縁端部下垂する
-5	A2Gr SD04	弥生土器 壺	25.5	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜線文 口縁内面に斜格子文	外／暗褐色 内／褐色、 灰褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	口縁端部下垂する
-6	B2Gr SD04	弥生土器 壺	34.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文 口縁内面に斜格子文・輪判列直文	外／褐色 内／淡黃褐色 断／灰褐色	普通 白・白色、 灰・黒を含む	やや不良	口縁端部下垂する 外面に指頭圧痕 残る
-7	A2Gr SD04	弥生土器 壺	29.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁内面に指頭圧痕文 帶貼付ける	淡黃褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
-8	SD04	弥生土器 壺	33.6	-	-	口縁部斜け 口縁部に斜文・縫に組 口縁部斜枝・三段状・組文	黃褐色	普通 石英を含む	やや不良	頭部外面縦方向 ハケ
39-9	SD04	弥生土器 壺	19.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部 外／縦方向ハケ 内／ナデ、藍頭圧痕残る	外／黃褐色 内／淡黃褐色 断／淡褐色	やや粗い 白・白色、 灰・黒を含む	普通	口縁端部上方に 拡張する
-10	A2Gr SD04	弥生土器 壺	-	-	-	口縁端部に円形浮文 貝殻による刺突文 外／縦方向ハケ 内／横方向ミガキ	外／赤褐色 内／暗褐色 断／褐色	密 石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂する
-11	A1Gr SD04	弥生土器 壺	-	-	-	外／頭部に指頭圧痕文 帶貼付ける、縦方向 ハケ 内／ナデ	褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	頭部破片
-12	SD04	弥生土器 壺	-	--	-	外／頭部に2条以上の三角 形文帯貼付ける、縦方向 ハケ 内／斜め方向ハケ	外／黃褐色 内／褐色 断／褐色	普通 白・白色、 灰・黒を含む	普通	頭部破片
-13	A1Gr SD04	弥生土器 壺	24.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁端部に刻目文
--14	A1Gr SD04	弥生土器 壺	20.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／斜め方向ハケ 内／斜め方向ハケ	褐色	普通 石英を含む	良好	
-15	B2Gr SD04	弥生土器 壺	26.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／縦方向ハケ 内／縦方向ハケ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	

辨認番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
39-16	A1Gr SD04	弥生土器 甌	20.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	灰褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏・金剛等 を含む	良好	口縁端部上方に やや拡張する
-17	A2Gr SD04	弥生土器 甌	29.3	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	普通 石・金剛等を含む	良好	
-18	A1Gr SD04	弥生土器 甌	17.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ナデ	外／褐色 内／淡褐色 断／褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	やや不良	
-19	A2Gr SD04	弥生土器 甌	22.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／灰褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	良好	口縁端部上方に やや拡張する
-20	A1Gr SD04	弥生土器 甌	15.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	外／褐色 内／淡褐色 外／褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏・金剛等 を含む	普通	口縁端部上方に やや拡張する
-21	A1Gr SD04	弥生土器 甌	23.1	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／縦・斜め方向 ハケ	淡褐色	密 石英・青母・金剛 等を含む	良好	
-22	A1Gr SD04	弥生土器 甌	-	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏・金剛等 を含む	良好	
40-23	A2Gr SD04	弥生土器 甌	22.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／斜め方向 ハケ	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	普通 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	良好	外面ス付着
-24	A1Gr SD04	弥生土器 甌	16.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／ミガキ？	淡褐色	普通 石・青母・金剛 等を含む	普通	
-25	A2Gr SD04	弥生土器 甌	18.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／斜め方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	普通 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	良好	外面ス付着
-26	SD04	弥生土器 甌	14.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下／不明	橙褐色	普通 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	やや不良	
-27	A2Gr SD04	弥生土器 甌	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縦方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／淡褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	普通	
-28	B2Gr SD04	弥生土器 甌	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	外／暗褐色 内／淡褐色 断／灰褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	良好	
-29	A2Gr SD04	弥生土器 鉢？	-	-	-	外／縦方向ハケ 内／ナデ	褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	普通	口縁端部平坦に 作る
-30	A1Gr SD04	弥生土器 甌or臺	-	10.8	-	外／縦方向にヘラ状工 具による調整 内／風化著しく不明	外／暗褐色 内／褐色 断／暗褐色	密 lm以下の白色胎・ 石・鶏等を含む	普通	

探査番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
40-31	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	5.8	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ	橙褐色	密 lm大の白色胎 石英・雲母・金星 母を含む	普通	
-32	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	7.7	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ	淡黃褐色	やや粗い lm下の白色胎 石英・雲母を含む	やや不良	
-33	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	8.4	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ	外/褐色 内/淡褐色 断/褐色	やや粗い lm大の白色胎 石英・雲母を含む	不良	
-34	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	9.0	-	外/縦方向ミガキ 内/剥離のため不明	外/淡黃褐色 内/不明 断/灰褐色	密 lm大の白色胎 石英・雲母を含む	普通	
-35	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	7.8	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	外/褐色 内/淡黃褐色 断/淡褐色	密 lm大の白色胎 石英・雲母・金星 母を含む	良好	
-36	A2Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	5.1	-	外/縦方向ミガキ 内/陶化著しく不明	外/褐色 内/淡褐色 断/灰褐色	密 lm下の白色胎 石英・雲母を含む	良好	
-37	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	5.7	-	外/縦方向ミガキ 内/底部付近に指頭圧 痕残る	褐色	密 lm大の白色胎 石英・雲母を含む	良好	
-38	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	6.7	-	外/縦方向ミガキ、一 部ハケ 内/ケズリ	外/褐色 内/灰褐色 断/灰褐色	普通 lm大の白色胎 石英・雲母・金星 母を含む	良好	底部に粉塵あり
-39	B2Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	6.3	-	外/縦方向ミガキ 内/ケズリ	外/褐色 内/黑褐色 断/灰褐色	密 lm下の白色胎 石英・雲母・金星 母を含む	良好	
-40	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	5.5	-	外/縦方向ミガキ 内/ケズリ、底部付近 に指頭圧痕残る	外/深褐色 内/褐色 断/褐色	普通 lm大の白色胎 石英・雲母・金星 母を含む	やや不良	
-41	A2Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	6.4	-	外/縦方向ミガキ 内/一部ハケ、底部付 近に指頭圧痕残る	外/褐色 内/深褐色 断/灰褐色	やや粗い lm下の白色胎 石英・雲母を含む	普通	
-42	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	7.2	-	外/横方向ミガキ、一部ハケ 内/ハケ、底部付近に指頭圧 痕残る	外/黑色 内/深褐色 断/褐色	普通 lm大の白色胎 石英・金星母を含 む	良好	
-43	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	8.2	-	外/縦方向ミガキ 内/ケズリの後ハケ、 横方向ミガキ	外/黑色 内/淡黃褐色 断/褐色	密 lm大の白色胎 石英・雲母を含む	普通	
-44	A1Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	8.2	-	外/縦方向ミガキ 内/鋼具で削いたような調子、 底部付近に指頭圧痕残る	外/淡褐色 内/褐色 断/褐色	密 lm下の白色胎 石英・雲母を含む	普通	内面底部にスス 付着
41-45	B2Gr SD04	弥生土器 壺or甌	-	6.0	-	外/縦方向ミガキ、一 部ハケ 内/横方向ミガキ	外/淡黃褐色 内/深褐色 断/灰褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	

辨認番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
45-1	A5Gr SD08	弥生土器 壺	17.7	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に上下から刻 目文	淡褐色	普通 Inukt白色 灰・黒等結合	良好	
-2	B7Gr SD08	弥生土器 壺	17.0	--	--	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	暗褐色	密 Inukt白色 灰・黒等結合	良好	
-3	A5Gr SD08	弥生土器 壺	16.3	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハ ケ	外/褐色 内/灰褐色 灰褐色	普通 Inukt白色 灰・黒等結合	良好	外面ス付着
-4	B7Gr SD08	弥生土器 壺	20.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハ ケ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	良好	外面ス付着
-5	A5Gr SD08	弥生土器 壺or壺	-	8.2	-	外/縦方向ミガキ 内/ハケ、底端付近に 指頭圧痕残る	黄褐色	やや粗い Inukt白色 灰・黒等結合	良好	
-6	A5Gr SD08	弥生土器 壺or壺	-	5.4	-	外/縦方向ミガキ 内/底端付近に指頭圧 痕残る	外/褐色 内/淡褐色 灰褐色	やや粗い Inukt白色 灰・黒等結合	不良	
-7	A5Gr SD08	弥生土器 壺or壺	-	5.4	-	外/横方向ミガキ 内/縦・斜め方向ハケ	淡褐色	やや粗い Inukt白色 灰・黒等結合	普通	搬入土器の可能 性あり
-8	A5Gr SD08	弥生土器 高杯	-	16.0	-	外/縦方向ミガキ 内/縦・斜め方向ハケ	褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	普通	脚端部平坦に作 る
-9	B7Gr SD08	弥生土器 高杯	-	15.0	-	外/縦方向ミガキ 内/ケズリ・脚端部は ナデ	外/褐色 内/登褐色 灰褐色	普通 Inukt白色 灰・黒等結合	不良	脚端部平坦に作 る
48-1	B3Gr SD09	弥生土器 壺	21.8	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文、 両端に刻目文	淡褐色	密 Inukt白色 灰・黒等結合	普通	
-2	B3Gr SD09	弥生土器 壺	20.5	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に斜格子文	褐色	密 Inukt白色 灰・黒等結合	普通	口縁端部下垂す る
-3	B3Gr SD09	弥生土器 壺	17.4	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 Inukt白色 灰・黒等結合	普通	口縁端部上方に やや膨張する
-4	B3Gr SD09	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部上端に刻目文	淡橙褐色	普通 Inukt白色 灰・黒等結合	やや不良	口縁端部下垂す る
-5	A3Gr SD09	弥生土器 壺	28.4	-	-	口縁部内外面ナデ	外/淡褐色 内/褐色 灰・黒等結合	密 Inukt白色 灰・黒等結合	やや不良	口縁端部下垂す る
-6	A3Gr SD09	弥生土器 壺	31.1	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部と口縁内面に 斜格子文	淡褐色	普通 Inukt白色 灰・黒等結合	やや不良	口縁端部下垂す る

押出番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
48-7	A3Gr SD09	弥生土器 壺	22.4	-	-	口縁部外面ナデ 口縁端部に斜格子文 口縁内面に波状文	淡褐色	密 lmelted鉄錆、 石英、雲母、金雲 母を含む	普通	口縁端部下垂す る
-8	B4Gr SD09	弥生土器 壺	26.4	-	-	口縁部外面ナテ 口縁端部に斜格子文 口縁端部から内面に2つの孔あり	褐色	やや粗い lmelted鉄錆、 石英、雲母を含む	良好	口縁端部下垂す る
-9	B4Gr SD09	弥生土器 壺	23.2	-	-	口縁部外面ナデ 口縁端部と口縁内面に斜格子文	淡黄褐色	粗い lmelted鉄錆、石 英、雲母を含む	普通	口縁端部下垂す る 口縁内面に直線 文が入る
-10	A3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺	29.6	-	-	口縁部外面ナテ 口縁端部に山形文 口縁内面に波状文・斜格子文	淡褐色	普通 lmelted鉄錆、 石英、雲母を含む	普通	口縁端部下垂す る
-11	A3Gr SD09	弥生土器 壺	22.2	-	-	口縁部外面ナテ 口縁端部に山形文、口縁内面に巻き文・斜格子文 ・斜格子文・円滑文	外／淡褐色 内／褐色 断／灰褐色	普通 lmelted鉄錆、 石英、雲母を含む	普通	口縁端部下垂す る 口縁内面から外面に 5以上の穿孔あり
49-12	B3Gr SD09	弥生土器 壺	11.2	-	-	口縁部内外面ナテ 頭部下 外／腹方向ハケ 内／横方向ミガキ	淡褐色	密 石英、雲母を含む	良好	頸部に2以上の 穿孔あり
-13	A3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺	9.6	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 lmelted鉄錆、 石英、雲母を含む	良好	
-14	B3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺or鉢	-	-	-	口縁部内外面ナテ 口縁端部に刻目文 頭部下 外／竪方向ハケ 内／斜め方向ハケ	橙褐色	密 石英、雲母を含む	普通	頸部外面に三角 形文帯を貼付け 刻目文 外面スヌ付着
-15	A3Gr SD09	弥生土器 壺	17.7	-	-	口縁部内外面ナテ 口縁端部に刻目文	淡褐色	密 lmelted鉄錆、 石英、雲母を含む	普通	
-16	B3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺or高坏	20.6	-	-	口縁部内外面ナテ 頭部下 外／ナテ 内／ナテ	外／褐色 内／淡褐色 断／淡褐色	やや粗い lmelted鉄錆、 石英、雲母を含む	良好	搬入土器の可能 性あり
-17	A3Gr SD09	弥生土器 壺	-	-	-	外／頭部に指頭庄文帯貼付ける、 竪方向ハケ 内／ナテ、下方はミガキ?	淡褐色	やや粗い 石英、雲 母を含む	普通	
-18	A3Gr SD09	弥生土器 壺	21.6	-	-	外／口縁部ミガキ 内／ナテ	外／暗褐色 内／深褐色 断／灰褐色	密 石英、雲母を含む	良好	口縁端部に刻目 文
-19	B4Gr SD09	弥生土器 無縁壺 or 鉢	16.4	-	-	外／指頭庄底文帯貼付 け、下方はナテ 内／斜め方向ハケ	外／深褐色 内／深褐色 断／褐色	密 石英を含む	普通	
-20	A3Gr SD09	弥生土器 無縁壺 or 鉢	38.8	-	-	外／端部に刻目文、指頭 庄底文帯貼付 け、横方向ハケ 内／斜め方向ハケ	外／黒色 内／褐色 断／褐色	普通 lmelted鉄錆、 石英、雲母、金雲 母を含む	やや不良	
-21	A3Gr SD09	弥生土器 無縁壺 or 鉢	17.6	-	-	外／端部に刻目文、胸 部横方向ハケ 内／ナテ	淡褐色	普通 石英、雲 母を含む	普通	

排図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
49-22	A3Gr SD09	弥生土器 無頸壺 or 鉢	-	-	-	孔/縁部に刻印文、4条の三彩文と を組み、周辺文。下方に斜格子 文?内/ナテ	淡褐色	普通 石英・雲 母を含む	普通	
-23	A3Gr SD09	弥生土器 壺	20.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハケ	淡褐色	普通 lmの白色釉・ 石英・雲母・金 銀を含む	普通	
-24	B3Gr SD09	弥生土器 壺	18.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハケ	淡褐色	普通 lmの白色釉・ 石英・雲母・金 銀を含む	良好	
-25	A3Gr SD09	弥生土器 壺	26.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縦方向ハケ 内/ナテ	褐色	密 lmの白色釉・ 石英を含む	やや不良	外面スス付着
50-26	B4Gr SD09 (上層)	弥生土器 壺	27.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 孔/三彩文等を斜め物、粗段 内/ナテ	淡褐色	密 石英・雲 母を含む	やや不良	
-27	B3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺	14.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/ナデ	淡褐色	普通 石英・雲 母を含む	普通	口縁端部上方に やや拡張する
-28	A3Gr SD09	弥生土器 壺	24.4	-	-	口縁部内外面ナデ	外/褐色 内/淡褐色 瓶/灰褐色	密 lmの白色釉・ 石英・雲母を含む	良好	口縁端部上方にやや 拡張する 口縁端部にスス付着
-29	B3Gr SD09	弥生土器 壺	17.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縦方向ハケ 内/斜め方向ハ ケ	淡褐色	密 lmの白色釉・ 石英・雲母・金 銀を含む	普通	口縁端部にスス 付着
-30	B3Gr SD09	弥生土器 壺	21.0	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲 母を含む	普通	
-31	A3Gr SD09	弥生土器 壺	16.4	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	密 石英・雲 母を含む	良好	外面スス付着
-32	A3Gr SD09 (上層)	弥生土器 壺	19.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縦方向ハケ 内/ナデ	淡灰褐色	普通 lmの白色釉・ 石英・雲母・金 銀を含む	普通	
-33	B3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺	17.2	-	-	口縁部内外面ナデ	外/黄褐色 内/灰褐色 瓶/淡褐色	密 lmの白色釉・ 石英・雲母を含む	良好	
-34	B3Gr SD09	弥生土器 壺	19.5	-	-	口縁部内外面ナデ	外/褐色 内/淡褐色 瓶/灰褐色	密 lmの白色釉・ 石英・雲母・金 銀を含む	普通	外面スス付着
-35	B3Gr SD09	弥生土器 壺	10.2	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	密 lmの白色釉・ 石英を含む	やや不良	
-36	B3Gr SD09	弥生土器 高環	19.2	-	-	口縁部内外面ナデ 环部 外/縦方向ミガキ 内/横方向ミガキ	外/褐色 内/黄褐色 瓶/淡褐色	普通 lmの白色釉・ 石英・雲母・金 銀を含む	普通	口縁端部水平に 突出する

辨証番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
50-37	A3Gr SD09	古式土師盃 高坏?	-	19.2	-	外/横方向ミガキ 内/横方向ミガキ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金属 等を含む	良好	
-38	A3Gr SD09 (下層)	古式土師器 高坏?	-	20.8	-	内外面ナデ	淡褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母・金属 等を含む	良好	
-39	A3Gr SD09	弥生土器 蓋	-	14.2	5.1	外/縦方向ハケ 内/横方向ハケ	褐色	密 石英を含む	良好	つまみ部に指頭 圧痕残る
-40	B4Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	10.4	-	外/縦方向ミガキ 内/剥離のため不明	外/褐色 内/不明 断/灰褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	普通	
-41	A3Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	4.2	-	外/縦方向ミガキ 内/底部付近に指頭圧 痕残る	外/淡褐色 内/褐色 断/褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	やや不良	
-42	B4Gr SD09 (上層)	弥生土器 蓋or壺	-	6.4	-	外/縦方向ミガキ 内/底部付近に工具痕?	黒褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	不良	
-43	B3Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	8.4	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	外/暗褐色 内/褐色 断/灰褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母・金属 等を含む	良好	
-44	A3Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	10.0	-	外/縦方向ミガキ 内/縦方向ミガキ? 底部付近に指頭圧 痕残る	淡黄褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母・金属 等を含む	不良	
51-45	B4Gr SD09 (下層)	弥生土器 蓋or壺	-	9.6	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ	外/淡灰褐色 内/灰褐色 断/淡褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	普通	
-46	B4Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	9.6	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、指頭圧痕残 る	外/赤褐色 内/褐色 断/灰褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
-47	B3Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	8.2	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	淡黄褐色	やや粗い lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	良好	
-48	A3Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	7.0	-	外/縦方向ミガキ 内/ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	淡褐色	やや粗い 石英・雲母を含む	不良	
-49	B4Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	7.2	-	外/縦方向ミガキ 内/剥離のため不明	外/赤褐色 内/淡褐色 断/灰褐色	密 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	普通	
-50	B4Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	9.9	-	外/縦方向ミガキ 内/剥離のため不明	外/暗褐色 内/黑色 断/褐色	普通 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母を含む	良好	
-51	A3Gr SD09	弥生土器 蓋or壺	-	6.8	-	外/縦方向ミガキ、底 部付近ハケ 内/ケズリ	褐色	普通 lmkt下の鉛釉・ 石英・雲母・金属 等を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
51-52	B3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺or甌	-	3.7	-	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	褐色	やや粗い 土の白化跡、 研磨跡	やや不良	
-53	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甌	-	8.8	-	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	外／黒褐色 内／淡褐色 断／黒褐色	やや粗い 土の白化跡、 研磨跡	やや不良	
-54	B3Gr SD09 (下層)	弥生土器 壺or甌	-	5.8	-	外／縦方向ミガキ 内／縦方向ケズリ	外／赤褐色 内／黒褐色 断／黒褐色	密 土の白化跡、 研磨跡	良好	
-55	B3Gr SD09	弥生土器 壺or甌	-	3.9	-	外／手捏ね、指頭圧痕残る 内／刺突痕で突いたような 痕跡あり	灰褐色	やや粗い 土の白化跡、 研磨、金属 混入	やや不良	
-56	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甌	-	8.6	-	外／縦方向ミガキ 内／横方向ミガキ	淡黄褐色	密 土の白化跡、 石英、雲母、金葉 混入	普通	
-57	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甌	-	-	-	外／手捏ね、指頭圧痕残る 内／手捏ね、指頭圧痕残る	灰褐色	普通 土の白化跡、 石英、鈍結	良好	
-58	A3Gr SD09	弥生土器 壺or甌	-	2.2	-	外／縦方向ミガキ 内／ケズリ	外／赤褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 土の白化跡、 研磨	良好	
-59	A3Gr SD09	古式土師器 甌	14.7	--	-	口縁部内外面ナデ 顎部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	やや粗い 石英、雲母を含む	良好	
-60	A3Gr SD09	古式土師器 甌	16.8	-	-	口縁部内外面ナデ 顎部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英、雲母、鐵 銅鉛	良好	
-61	A3Gr SD09	古式土師器 甌	28.2	-	-	口縫部内外面ナデ 口縫部平坦に作る 顎部下不明	淡褐色	密 土の白化跡、 研磨	普通	
-62	A3Gr SD09	古式土師器 甌	12.4	-	-	口縫部内外面ナデ 顎部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 石英、雲母を含む	良好	
52-63	B3Gr SD09 (下層)	古式土師器 甌	13.6	-	-	口縫部内外面ナデ 口縫部平坦に作る	淡黄褐色	普通 石英、雲母を含む	良好	外面朱塗り
-64	B3Gr SD09	古式土師器 甌	12.8	-	-	口縫部内外面ナデ 顎部下 外／ナデ 内／ケズリ	淡黄褐色	普通 土の白化跡、 研磨	普通	
-65	A3Gr SD09	古式土師器 甌	13.2	-	-	口縫部内外面ナデ 口縫部平坦に作る	淡褐色	やや粗い 石英、雲母を含む	普通	
-66	B4Gr SD09 (下層)	古式土師器 甌	-	-	-	外／頸部下に直線文、 胸部ハケ 内／頸部下からケズリ	灰褐色	普通 石英、雲母を含む	普通	外面副部にスス 付着

邦図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
			口径	底径	器高						
52-67	B3Gr SD09	古式土師器 甕	16.6	-	-	口縁部内外面ナデ	黄褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	良好		
-68	B3Gr SD09	古式土師器 甕	14.1	-	-	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	普通		
-69	B3Gr SD09 (下層)	古式土師器 甕	15.6	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金 剛石含む	良好		
-70	A3Gr SD09	古式土師器 甕	21.4	-	-	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	良好		
-71	A3Gr SD09	古式土師器 甕	14.9	-	-	口縁部内外面ナデ	外/淡褐色 内/淡黄褐色 断/淡褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	普通	外面スヌ付着	
-72	B3Gr SD09 (下層)	古式土師器 甕	14.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁部丸くおさめる	外/褐色 内/淡褐色 断/淡褐色	密 石英・雲 母を含む	良好		
-73	A3Gr SD09	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下	外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	普通 石英・雲母・金 剛石含む	普通	
-74	B3Gr SD09	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下	外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	普通	
-75	B4Gr SD09	古式土師器 甕	15.0	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 石英・雲母・金 剛石含む	良好	布留式傾向甕	
-76	B3Gr SD09	古式土師器 甕	15.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下	外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 石英・雲 母を含む	普通	布留式傾向甕 外面一部にスヌ付着
-77	A3Gr SD09	古式土師器 甕	13.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下	外/ハケ 内/ケズリ	淡黄褐色	普通 石英・雲 母を含む	普通	布留式傾向甕 外面一部にスヌ付着
-78	A3Gr SD09	古式土師器 甕	17.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下	外/開陽の広い波 状文・直線文 内/ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	良好	布留式傾向甕 外面一部にスヌ付着
-79	B3Gr SD09	古式土師器 甕or壺	-	-	-	外/ナデ、一部ハケ 内/ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	良好		
-80	A3Gr SD09	古式土師器 高环or 低脚环	15.6	-	-	外/ハケ 内/横方向ミガキ	褐色	密 石英・雲母・金 剛石含む	普通	円盤光塗法	
-81	A3Gr SD09	古式土師器 高环or 低脚环	15.5	-	-	外/ナデ 内/横方向ミガキ	淡褐色	普通 石英・雲母・金 剛石含む	普通		

拂図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
53-82	A3Gr SD09	古式土師器 高环or 低脚环	15.2	-	-	外/ナデ 内/横・縦方向ミガキ	淡褐色	普通 石・雲母・金 銀を含む	良好	
-83	B3Gr SD09	古式土師器 高环or 低脚环	-	-	-	外/縦方向ミガキ 内/ケズリ 环部 外/ハケ 内/ミガキ	淡褐色	密 石英・雲 母を含む	普通	円盤充填法
-84	B3Gr SD09	古式土師器 高环or 低脚环	-	-	-	脚部 外/風化著しく不明 内/ケズリ 环部 内外面とも風化著し く不明	淡褐色	密 石・雲母・金 銀を含む	普通	
-85	A3Gr SD09 (下層)	古式土師器 小型器台	-	-	-	裾部 外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金 銀を含む	普通	外面に2以上の 穿孔あり
-86	B3Gr SD09	古式土師器 高环	-	14.8	-	裾部 外/風化著しく不明 内/ナデ 脚部 外/風化著しく不明 内/ケズリ	淡褐色	密 石・雲母・金 銀を含む	やや不良	
-87	A3Gr SD09 (下層)	古式土師器 高环	-	10.2	-	裾部内外面ナデ 脚部 外/ミガキ 内/ケズリ	橙褐色	密 石英・雲母・金 銀を含む	普通	
-88	A3Gr SD09	古式土師器 低脚环	-	7.2	-	裾部から脚部にかけて 内外面ナデ	外/褐色 内/淡褐色 断/褐色	密 石英・雲母・金 銀を含む	やや不良	
-89	B3Gr SD09	古式土師器 器台	-	19.6	-	外/ナデ 内/ケズリ	橙褐色	密 石英・雲 母を含む	良好	脚部破片 外面スス付着
-90	B3Gr SD09	古式土師器 器台	-	-	-	外/ナデ 内/ミガキ	淡褐色	普通 石・雲母・金 銀を含む	良好	受部破片
-91	B3Gr SD09	古式土師器 器台	-	-	-	外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 石・雲母・金 銀を含む	普通	筒部破片
-92	B3Gr SD09	古式土師器 器台	-	-	-	外/ナデ 内/ケズリ	淡黃褐色	密 石英を含 む	普通	筒部破片
-93	B3Gr SD09	古式土師器 器台	-	15.2	-	外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 石・雲母・金 銀を含む	普通	脚部破片
55-1	B5Gr SD12	弥生土器壺	30.4	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 石英・雲 母・金 銀を含む	不良	
-2	A4Gr SD12	弥生土器壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	橙褐色	普通 石英・雲 母・金 銀を含む	普通	
-3	A4Gr SD12	弥生土器壺	24.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文	淡褐色	普通 石英・雲 母を含む	良好	

擲出番号	出土地点	器種	法 量(cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口径	底径	器高					
55- 4	A4Gr SD12	弥生土器 壺	-	-	-	外/3条以上の中三角形貼付文帯 に刺突文、上方は縦方向ハケ 内/横方向ミガキ、上方はハケ	橙褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	内面上方に刺突文あり
- 5	A4Gr SD12	弥生土器 壺	31.6	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 頸部下 外/縦方向ハケ 内/縦方向ハケ	淡雅褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	良好	外面側部にスス付着
- 6	B5Gr SD12	弥生土器 壺	13.3	-	-	口縁部 外/ナデ 内/横方向ハケ 外/縦方向ハケ 内/ナデ	淡黄褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	普通	
- 7	B5Gr SD12	弥生土器 壺	25.9	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
- 8	B5Gr SD12	弥生土器 壺	17.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下不明	外/褐色 内/淡褐色 断/淡黄色	密 laundered 石英・雲母・金銀 等を含む	良好	外面スス付着
- 9	A4Gr SD12	弥生土器 壺or壺	-	7.0	-	外/風化著しく不明 内/底部付近に指頭圧 痕残る	淡黄褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	普通	
- 10	A4Gr SD12 (上層)	弥生土器 壺or壺	-	9.1	-	外/横方向ミガキ 内/横方向ミガキ	黑褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	普通	
- 11	A4Gr SD12 (上層)	弥生土器 高坏	26.4	-	-	口縁端部水平に突出する 外/ナデ 内/横方向ミガキ	淡褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	良好	
- 12	B5Gr SD12	弥生土器 高坏	-	-	-	外/横方向ミガキ 内/不明	淡黄褐色	密 laundered 石英・雲母・金銀 等を含む	良好	
- 13	B5Gr SD12	弥生土器 高坏	-	10.6	-	外/ナデ 内/ハケ	外/褐色 内/暗褐色 断/灰褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	やや不良	
56- 1	A5Gr 包含層	弥生土器 壺	22.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に波状文 口縁内面に波状文・刺 突列点文	褐色	密 石英・雲母を含む	良好	口縁端部下垂す る
- 2	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	19.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刺目文 口縁内面に斜格子文・ 波状文	淡褐色	密 laundered 石英・雲母・金銀 等を含む	良好	
- 3	B4Gr 包含層	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刺繍文 口縁内面に2以上の円 形浮文・斜格子文	淡黄褐色	密 laundered 石英・雲母を含む	普通	口縁端部下垂す る
- 4	A8Gr 包含層	弥生土器 壺	19.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刺突文 口縁内面に波状文・直 線文	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金銀 等を含む	やや不良	
- 5	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	27.4	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 口縁内面に斜格子文	橙褐色	普通 laundered 石英・雲母・金銀 等を含む	良好	口縁端部下垂す る

掲図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
56-6	B6Gr 包含層	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	やや粗い 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	口縁端部下垂する
-7	B6Gr 包含層	弥生土器 壺	28.8	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に刻目文	赤褐色	普通 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	口縁端部下垂する
-8	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 口縁内面から2以上の 穿孔あり	淡褐色	やや粗い 石英・碧玉・金剛 等を含む	やや不良	口縁端部下垂する
-9	表探	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・碧玉を含む	やや不良	口縁端部下垂する
-10	西側溝	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	外/褐色 内/淡黄褐色 断/灰褐色	普通 石英・白母岩・ 石英・碧玉を含む	やや不良	口縁端部下垂する
-11	A3Gr 包含層	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	やや粗い 石英・碧玉を含む	良好	口縁端部上下に 拡張する
-12	A3Gr 包含層	弥生土器 壺	23.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 頸部 外/線方向ハケ 内/横方向ミガキ	外/淡褐色 内/淡黄褐色 断/灰褐色	普通 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	口縁端部下垂する 外面端部に2以上の 三角形文帯を貼付け、刻目文
-13	B6Cr 包含層	弥生土器 壺	18.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部 外/線方向ハケ 内/横・縦方向 ミガキ	外/褐色 内/灰褐色 断/灰褐色	やや粗い 石英・白母岩・ 石英・碧玉を含む	良好	
-14	B4Gr 包含層	弥生土器 壺	25.6	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に山形文 頸部 外/ハケ 内/ナデ	淡褐色	普通 石英・碧玉・金剛 等を含む	普通	口縁端部下垂する
-15	B5Gr 包含層	弥生土器 壺	19.8	-	-	口縁部内外面ナデ	橙褐色	やや粗い 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	
-16	A4Gr 包含層	弥生土器 壺	18.2	-	-	口縁部内外面ナデ	橙褐色	密 石英・碧玉を含む	良好	
-17	A7Gr 包含層	弥生土器 壺	9.9	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部 外/線方向ハケ 内/斜め方向ハケ	褐色	密 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	口縁部内外に スス付着
-18	B5Gr 包含層	弥生土器 壺	28.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/斜め方向 ハケ	褐色	やや粗い 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-19	A7Gr 包含層	弥生土器 壺	14.4	-	-	口縁部内外面ナデ、内 面一部ハケ 頸部下 外/ナデ 内/斜め方向ハケ	外/暗褐色 内/褐色 断/灰褐色	普通 石英・白母岩・ 石英・碧玉・金剛 等を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-20	A1Gr 包含層	弥生土器 壺	22.1	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/線方向ハケ 内/斜め方向ハケ	灰褐色	普通 石英・白母岩・ 石英・碧玉・金剛 等を含む	普通	口縁端部上方に 拡張する

辨別番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
57-21	B5Gr 包含層	弥生土器 甕	21.6	-	-	口縁部内外面ナデ、内 面・底ハケ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金銀 鉛を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-22	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	24.1	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／底、斜め方 向ハケ	黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金銀 鉛を含む	普通	口縁端部上方に 拡張する
-23	A4Gr 包含層	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 外面頸部付近に指頭圧 痕残る	淡黄褐色	粗い 石英・雲母・金銀 鉛を含む	やや不良	
-24	西側溝	弥生土器 甕	13.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／斜め方 向ハケ	外／褐色 内／濃褐色 断／灰褐色	密 石英下の白色砂 質・石英・雲母・ 金銀鉛を含む	良好	外面スス付着
-25	B5Gr 包含層	弥生土器 甕	18.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／ナデ	淡黄褐色	密 石英を含む	普通	
-26	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	27.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／斜め方向の 粗いハケ	淡褐色	粗い 石英・雲母・金銀 鉛を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-27	B2Gr 包含層	弥生土器 甕	16.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／斜め方向ハ ケ	灰褐色	密 石英下の白色砂 質・石英・雲母・ 金銀鉛を含む	良好	外面口縁部にス ス付着
-28	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	25.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／斜め方向ハ ケ	外／淡褐色 内／濃褐色 断／灰褐色	密 石英・雲母・金銀 鉛を含む	良好	外面口縁部にスス付着 口縁端部上方に拡張す る
-29	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	19.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／斜め方向ハケ 内／ナデ	外／黒色 内／灰褐色 断／灰褐色	普通 石英下の白色砂 質・石英・雲母・ 金銀鉛を含む	良好	外面口縁部にスス付着 口縁端部上方に拡張す る
-30	B7Gr 包含層	弥生土器 甕	21.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	外／褐色 内／淡黃褐色 断／灰褐色	やや粗い 石英・雲母・ 金銀鉛を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-31	B2Gr 包含層	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／斜め方向ハ ケ	外／褐色 内／淡褐色 断／褐色	密 石英・雲 母を含む	普通	外面スス付着
58-32	B2Gr 包含層	弥生土器 甕	19.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	淡黄褐色	やや粗い 石英・雲母・金銀 鉛を含む	普通	口縁端部上方に 拡張する
-33	B4Gr 包含層	弥生土器 甕	11.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／斜め方向ハ ケ	外／褐色 内／濃褐色 断／灰褐色	普通 石英下の白色砂 質・石英・雲母・ 金銀鉛を含む	良好	外面スス付着
-34	A3Gr 包含層	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ 下ハケ、下方 はケズリ	黄褐色	密 石英・雲 母を含む	良好	
-35	A1Gr 包含層	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／底方向ハケ 内／風化著しく 不明	淡褐色	密 石英・雲 母を含む	やや不良	

辨認番号	出土地点	器種	法 異 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口径	底径	器高					
58-36	A6Gr 包含層	弥生土器 壺	15.8	-	-	口縁部内外ナデ 頭部下 外／縦・横方 向ハケ 内／鉛丸方向ハケ	外／淡褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	普通 石英・雲母・金星 等を含む	良好	口縁端部に凹線 文が入る
-37	B3Gr 包含層	弥生土器 壺or瓶	-	-	-	口縁部内外ナデ 口縁端部に刻目文 頭部下 外／ナデ 内／ナデ	淡橙褐色	密 石英・雲母を含む	やや不良	外面スス付着 外面端部下に三 角形文帯を貼付 け、刻目文
-38	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	7.0	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
-39	B4Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	5.8	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	外／黒褐色 内／褐色 断／褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	普通	
-40	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	7.2	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／淡橙褐色 内／黒褐色 断／淡橙褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	普通	
-41	A6Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	6.4	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	やや粗い 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
-42	B5Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	6.6	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／暗褐色 内／灰褐色 断／褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	普通	
-43	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	5.2	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／褐色 内／灰褐色 断／灰褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	普通	
-44	A1Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	6.9	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	褐色	普通 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	やや不良	内面スス付着
-45	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	7.6	-	外／縦方向ミガキ、一 部ハケ 内／ナデ	外／淡褐色 内／褐色 断／灰褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	良好	
-46	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	7.7	-	外／縦方向ミガキ、一 部ハケ 内／ナデ	淡黃褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	やや不良	
-47	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	-	-	外／縦方向ミガキ 内／ナデ	外／暗褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	やや不良	
-48	B7Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	5.2	-	外／縦方向ミガキ、一 部ハケ 内／ナデ	褐色	密 1~2mm以下の白色 砂質・石英・雲母 を含む	良好	
-49	A4Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	7.7	-	外／縦方向ミガキ 内／ハケ	外／暗褐色 内／褐色 断／褐色	普通 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を含む	良好	
-50	B3Gr 包含層	弥生土器 壺or壺	-	8.2	-	外／縦方向ハケ 内／ナデ	外／褐色 内／灰褐色 断／淡褐色	密 石英・雲母・金星 等を含む	普通	

探査番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
58-51	B5Gr 包含層	弥生土器 盤or甌	-	5.8	-	外/縦方向ミガキ 内/ハケ	褐色	密 1mmの白粉膜、 石英、雲母を含む	普通	外面スス付着
-52	A1Gr 包含層	弥生土器 盤or甌	-	10.7	-	外/縦方向ミガキ 内/ハケ	外/褐色 内/緑褐色 断/褐色	普通 1mmの白粉膜、 石英、雲母を含む	普通	
-53	B7Gr 包含層	弥生土器 盤or甌	-	5.6	-	外/横方向ミガキ、底 部付近ハケ 内/横方向ミガキ、底部付 近に指頭压痕残る	外/褐色 内/黒灰色 断/褐色	密 石英を含む	良好	外面スス付着
-54	A3Gr 包含層	弥生土器 盤or甌	-	5.2	-	外/縦・横方向ミガキ 内/横方向ミガキ	灰褐色	密 1mm以下の白色粉 膜・石英・雲母を含む	良好	外面底部ミガキ
59-55	A3Gr 包含層	弥生土器 盤or甌	-	3.3	-	外/ナデ 内/指頭压痕残る 底/板目?	褐色	普通 石英・雲 母を含む	良好	
-56	表採	弥生土器 盤or無頸甌	-	-	-	外/口縁下に1条の三 角形文帯を貼付け、 刻目文、胴部ナデ 内/斜め方向ミガキ	淡褐色	密 石英を含む	良好	外面スス付着
-57	A3Gr 包含層	弥生土器 鉢	-	-	-	外/縦方向ハケ 内/ナデ	暗褐色	普通 1mm以下の白色粉 膜・石英・雲母を 含む	やや不良	内外面にスス付 着
-58	A1Gr 包含層	弥生土器 高坏	-	9.0	-	外/ナデ 内/ナデ	褐色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-59	A2Gr 包含層	古式土師器 甌	17.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/横方向ハ ケ 内/ケズリ	外/淡黄褐色 内/灰褐色 断/淡褐色	普通 1mm以下の白色粉 膜・石英・雲母を 含む	良好	口縁部平坦に 作る
-60	A1Gr 包含層	古式土師器 甌	14.2	-	-	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	普通	外面スス付着
-61	A1Gr 包含層	古式土師器 甌	-	-	-	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密 石英・雲 母を含む	良好	口縁部内外面に スス付着
-62	B4Gr 包含層	古式土師器 甌	14.7	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	密 1mmの白粉膜、 石英・雲母・金 雲母を含む	普通	
-63	A3Gr 包含層	古式土師器 甌	15.5	-	-	口縁部内外面ナデ	外/褐色 内/淡黄褐色 断/灰褐色	普通 1mm以下の白色粉 膜・石英・雲母を 含む	やや不良	
-64	A3Gr 包含層	古式土師器 甌	-	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-65	A3Gr 包含層	古式土師器 甌	17.3	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色粉 膜・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	

押出番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
59-66	A3Gr 包含層	古式土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	淡黄褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
-67	表探	古式土師器 器台	-	-	-	外/ナデ 内/受部ミガキ、脚部 ケズリ	外/淡褐色 内/褐色 底/淡褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	
-68	A3Gr 包含層	古式土師器 器台	-	20.2	-	外/ナデ 内/ケズリ	橙褐色	普通 石英・錫 銅鉛鉄	良好	脚部破片
-69	A3Gr 包含層	古式土師器 器台	16.5	-	-	外/ナデ 内/楕方向ミガキ	橙褐色	普通 石英・雲母を含む	普通	受部破片
-70	A5Gr 包含層	土師器 甕	21.6	-	-	口縁部 外/ナデ 内/ハケ 頸部下 外/楕方向ハケ 内/ケズリ	外/淡褐色 内/褐色 底/淡褐色	やや粗い 石・雲・錫 銅鉛鉄	不良	
-71	A1Gr 包含層	須恵器 环身	14.0	-	-	外/回転ナデ、下部ケ ズリ 内/回転ナデ	外/灰色 内/暗灰色 底/灰色	普通	良好	外面に自然釉か かる
-72	A1Gr 包含層	須恵器 环身	14.3	-	-	内外面回転ナデ	暗灰色	密 雲母を含む	良好	外面に自然釉か かる
-73	A1Gr 包含層	須恵器 环蓋	15.2	-	-	内外面回転ナデ	外/灰色 内/暗灰色 底/暗灰色	密 1mm以下白色 石・雲母を含む	普通	内外面に自然釉か かる
-74	B4Gr 包含層	須恵器 环蓋	12.0	-	-	内外面回転ナデ	灰色	密 1mm以下白色 石・雲母を含む	良好	口縁端部に沈線 入る
-75	B5Gr 包含層	須恵器 环蓋	11.2	-	-	内外面回転ナデ	黒灰色	密 1mm以下白色 石・雲母を含む	良好	外面口縁端部に 自然釉かかる
60-76	A6Gr 包含層	須恵器 环	11.8	7.6	4.1	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡灰色	密 石英を含む	普通	
-77	A1Gr 包含層	須恵器 环	-	8.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	普通 石英を含む	やや不良	
--78	A4Gr 包含層	須恵器 高台付 环	-	9.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	普通 1mm以下白色 石・雲母を含む	普通	
-79	B2Gr 包含層	須恵器 环	11.0	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	暗灰色	密 石英を含む	良好	
-80	B5Gr 包含層	須恵器 高台付 环	-	9.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下白色 石・雲母を含む	やや不良	

掲図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
60-81	A1Gr 包含層	土師器 环	13.3	5.8	5.25	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母・ 金剛石を含む	良好	内外面にスス付 着 回転水引き痕明 瞭に残る
-82	A1Gr 包含層	土師器 环	-	6.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ハケ・ ナデ	外／暗褐色 内／淡褐色 底／糸切り後、淡褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	良好	
-83	A1Gr 包含層	土師器 环	-	5.6	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	暗褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	普通	2度の糸切り痕 あり
-84	B2Gr 包含層	土師器 环	-	4.2	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	赤褐色	密 石英・雲 母を含む	不良	
-85	A1Gr 包含層	土師器 环	-	6.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・雲 母を含む	良好	
-86	A1Gr 包含層	土師器 环	-	5.0	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ナデ	外／暗褐色 内／淡褐色 底／淡褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	普通	外面朱塗り 外面一部にスス 付着
-87	A3Gr 包含層	土師器 小皿	9.6	5.4	2.1	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り	橙色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	普通	
-88	A2Gr P4	土師器 小皿	9.2	4.9	1.95	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／褐色 内／褐色 底／淡褐色	普通 1~3mm大の白色砂 質・石英・雲母を 含む	良好	内面一部にスス 付着
-89	B4Gr 包含層	土師器 小皿	7.8	4.1	1.15	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／糸切り後、ナデ	外／暗褐色 内／淡黃褐色 底／褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	普通	
-90	A1Gr 包含層	土師器 足高台付 环	-	8.2	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	良好	环部内面黒褐色
-91	A1Gr 包含層	土師器 高环	13.2	-	-	外／ナデ、下半部ケズ リ 内／ナデ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	普通	内外面朱塗り
-92	B2Gr 包含層	土師器 高环	13.2	-	-	外／ナデ、一部ハケ 内／ナデ	淡橙褐色	普通 1mm以下の白色砂 質・石英・雲母を 含む	普通	内外面朱塗り 内面に暗文が入 る
-93	B2Gr 包含層	土師器 高环	13.6	-	-	外／ナデ、下半部ケズ リ 内／ナデ	淡褐色	密 石英・雲 母を含む	良好	内外面朱塗り 内面に暗文が入 る

出土遺物観察表（鉄器・石器）

辨図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
17-1	B4Gr SK04	鉄鎌	上端欠損	鉄	9.35	2.4	—	42	鋸化
-2	B4Gr SK04 (中腰～下端)	鉄鎌	上端欠損	鉄	6.9	2.5	—	21	鋸化
-3	B4Gr SK04	不明	完形	鉄	7.25	3.4	—	121	鋸化
19-8	A4Gr SK05	鉄鎌	完形	鉄	6.3	3.1	—	27	鋸化
23-41	A3Gr SK06	不明	両端欠損	鉄	5.7	1.9	—	11	鋸化
-42	A3Gr SK06	砥石	片端欠損	安山岩(細粒)	11.3	6.9	3.5	308	二面に使用痕あり
34-38	土器群1 (SD03)	砥石	両端欠損	流紋岩質 凝灰岩	5.8	3.7	2.5	47	全面に使用痕あり
-39	A1Gr SD03	砥石	両端欠損	流紋岩質 凝灰岩	6.0	3.0	2.5	55	全面に使用痕あり
41-46	A1Gr SD04	不明	片端欠損	流紋岩 (中粒)	7.2	10.0	1.35	161	側面を面取りしている 片端に刃部のようなもの削り出ず
-47	A2Gr SD04	不明	一部欠損	玄武岩 (中粒)	7.8	5.85	3.5	302	朱の痕跡あり
60-94	A2Gr 包含層	砥石	ほぼ完形	安山岩	15.8	4.0	3.3	420	三面に使用痕あり
-95	A1Gr 包含層	砥石?	両端欠損	珪質頁岩	7.2	7.6	2.4	220	二面に使用痕あり
-96	A3Gr 包含層	扁平片刃石斧	刃部欠損	安山岩	5.3	2.2	1.0	18	全面を磨いている